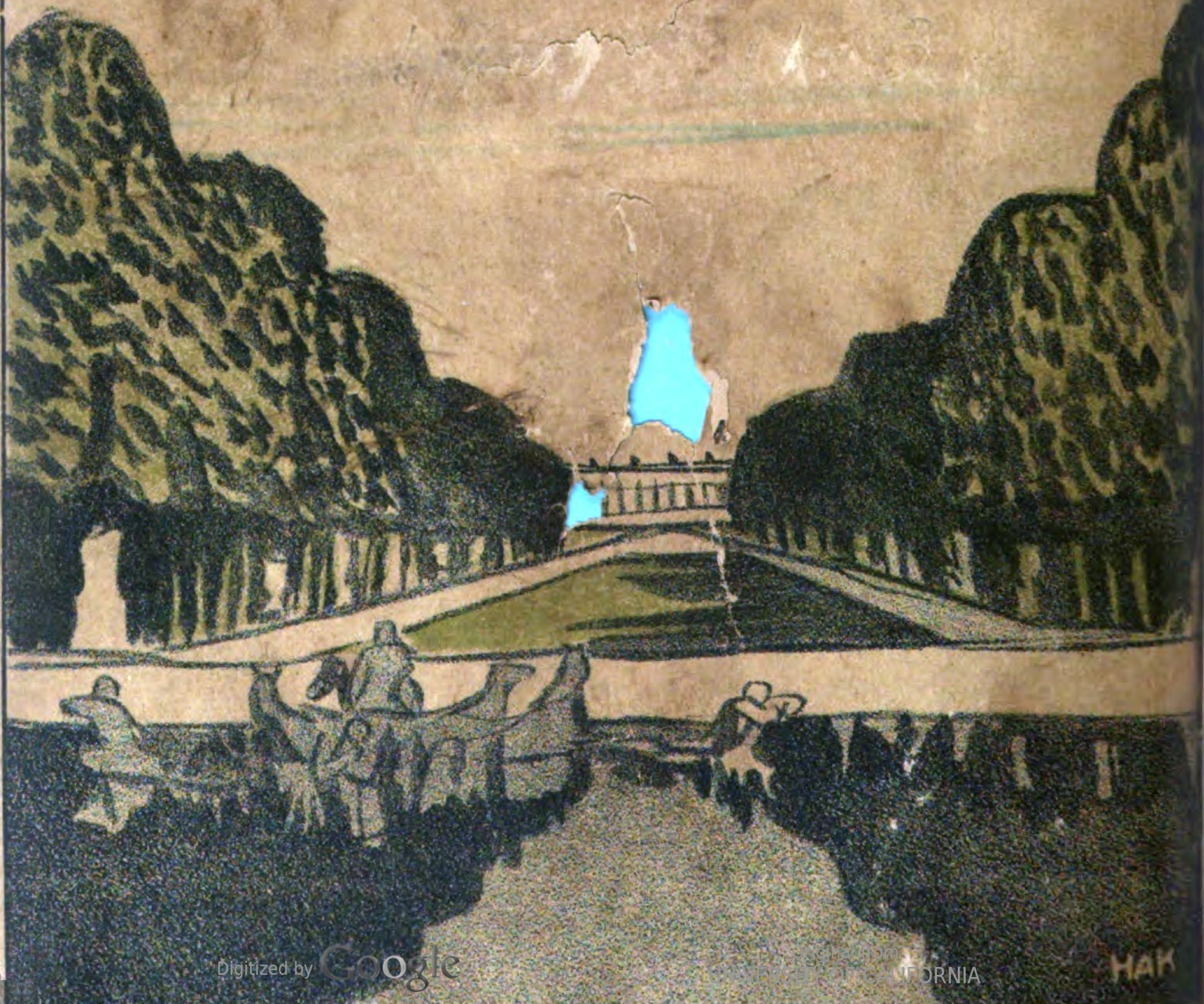
改造

六月號



祝「改造」之創刊

大阪市東區淡路町二丁目

株式會社

浪速銀行

支店	所在地
西支店	大阪市西區立賣堀北通五丁目
南支店	同 南區鹽町通り二丁目
北支店	同 北區老松町三丁目
難波支店	同 南區難波元町二丁目
九條支店	同 西區九條中通り一丁目
天王寺支店	同 南區天王寺椎寺町
玉造支店	同 東區東雲町一丁目
堺支店	堺市熊野町
和歌山支店	和歌山市本町二丁目
東京支店	東京市日本橋區通り三丁目
蠣殼町支店	同 日本橋區蠣殼町一丁目
西宮支店	兵庫縣武庫郡西宮町
神戸支店	神戸市榮町通り三丁目
下關支店	下關市觀音崎町
福岡支店	福岡市麴屋町
熊本支店	熊本市鹽屋町裏二番丁
鹿兒島支店	鹿兒島市築町
川內支店	鹿兒島縣川內向田町



改造第三號目次



國民の處女性と文藝

西宮藤朝

個人の生活にとつても然るが如く、國民にとつても精神的處女性ほど尊いものは無い。人類の知識が發達することは望ましい、よろこばしき事である。又人類の道德的見解が向上するは美しくはたたのもしい事である。而して近代の人類はそれを以て文化の發達と爲し、自らを高うしてゐる。けれども他方に於いて彼等は古代の美しい處女性を失ひつゝあるのに氣が付かないでゐる。

精神的處女性とは何ぞ。私は今此の問題に抽象的説明を試ようとするものではないが、然し簡單に言つて見るならば、私の謂ふ處の處女性とは、唯單に經驗の淺く少ないことをのみ意味するのではない。よし經驗が豐富に積まれてもほんとうの精神的處女性は失はれないものである。之を個人の性格に見ても、人生の經驗を可也積んだと思はれる四十代五十代にも尚處女性のひらめきを見るとの出來る人々がいくらも見當るところである。ほんとうの處女性とは寧ろ經驗を積めば積む程、それを支配して行くものでなければならない。

而して物を如實に觀ること、正面から正直に見ること、然もそれが低き功利的衝動から離れて實在に於いて見ること、其處に精神的處女性の中心的特質が存在するのである。されば精神的處女性を保持する人々は知識や既成概念で事物を觀察しない。飽迄も生れ乍らの赤裸々な心境で刺戟に接して行く。又道德的偏見で生活を取扱はない。外からの規則或は法則によつて支配することを、或はされることを考へないのみか、それを想像だもしない。彼は何事も先づ感情から入つて行く。感情によつて經驗を受け容れて行く。よし知識

的反省を加へるにしても、それは感情にて受け入れてから後の事である。されば彼の受け容れたものには信仰が生れ、確信がひそむ。而して精神的處女性を保持するものは、如何なる虛僞も爲すことが出來ない。

多少明確を缺くとしても、假りに斯う說明することが許されるならば、精神的處女性の凡ての見當はつかないことも無からう。斯うした性情が各個人にとつても必要であるが如く、國民にとつても必要なものである。國民は政治的にも、經濟的にも、敎育的にも、文藝的にも、何等かの創造を企てることによつて、よりよき生活を爲さんと欲するものである。けれども創造するとは、他面に於いて、他のものを受け容れ、刺戟を攝取することを意味するのである。他から隔離して、若くば刺戟を無視して創造は爲し遂げることが出來ない。殊に是れからの世界は、益々相刺戟し合ひ相交涉し合ふやうな狀態になつてゐる。されば國民生活に於ける新しき創造は、さうした世界的刺戟と空氣とを攝取し、それの基礎の上に打立てられなければならない。

此の場合に他の國民の生活や思想を如實に觀察し素直に受け容れるといふことを爲し得なかつたならば、果してほんとうの創造を爲し得るであらうか。此度の平和會議に於ける各國の議論の傳へらるゝところを聞いても、各國委員は口に平和を唱へ、人道を叫び乍らさうした世界を建設する爲めに、他の國の委員乃至國民の主張或は心情を如實に先入觀念無しに素直に受け容れて考へて見るといふところが餘り無ささうである唯めい／＼勝手に自分の事許り考へてゐる。他國の主張をば色眼鏡なしには耳を傾けないといふやうに見える。彼等の心情は是れ迄の國際的外交の惡經驗の爲めに、その精神的處女性を失つてしまつてゐるのであらう。斯うした人々によつて果して新しい人道と平和の世界が創造されるであらうか。それを思ふと聊か失望と悲哀とを感ぜずにゐられない。ほんとうに人道と平和との世界を建設しようとして、それを議するに當つては、輕々しく他を疑ひ、他の心事を惡い意味に忖度するやうな態度であつてはならない。彼等は祕密外交を排斥し乍ら、他の心事に對する祕密忖度を排斥しな

けれぱ何にもならぬ。彼等は此の際、彼等の心情の中に踏みにじられて壓迫されてゐる精神の處女性を再び披瀝し、彼等の間にシンセリテイの空氣を醸成して、此に初めて世界の平和に關する問題を議すべきである。

精神的處女性を保持しつゝ、それによつて生活する國民は、或は初めは損をするかも知れない。初めは他に壓迫され、支配されることがあるかも知れない。けれども彼等にはシンセリテイと眞理に對する直線的な信仰がある。されば結局最後に至つて、ほんとうの勝利が齎らされることが多いのである。

勿論我々の生活は、心性の處女性のみで向上するものではない。生活に對する深き理解と見識と而して鋭き智慧等をも持たなければならない。けれどもそれらの前に先づ少くとも心性の處女性を持ち、それから出發しなかつたならば、生活の上に汚れた惡魔的な影がさして來る場合が多いことを覺悟しなければならぬ。

吾々は理想の光りを前方に望み乍ら生活する。けれども處女性的感情を失つたものは、理想を信仰に迄高めることなく、何かしら其陰に詭計がないか、僞善が潜んでゐないかを疑ひ、時には一時的の方便としてそれを見るといふ風にさへなる。彼の心情にはシンセリテイが失はれて、其代り不眞面目と輕薄と安價な妥協とが生れる。而して遂ひにはヒユウマンチイに根ざした人間的な姿が沒してしまふ。

然るに最近の我が國民の心性を顧るに、此の尊い精神上の處女性が次第に失はれつゝありはしないだらうか。假りに政治的方面を見渡すに、議會や新聞雜誌に於ける政見や政論を見ても、惡い意味の所謂政治家的或は政論家的臭味の紛々たるものがあるのは、私の今更説明する迄もあるまい。此の政治家的或は政論家的臭味は何を意味するか、といふに言ふ迄もなく彼等の處女性、卽ち何樣問題にも虛心坦懷に入つて行き、正直に且つ誠實に深く徹するといふ性情を失なつてゐることに外ならない。今のところ我國では政治家が一番此の處女性を失つてゐるやうに思はれる。

此の外、教育家には教育家のタイプがあり、官吏に

は官吏のタイプがある。此のタイプは要するに彼等が人間としての心性の處女性を失つて其の職業に囚はれてゐることを證明するものである。彼等は他の生活や思想を其のあるがまゝに受け容れ、あるがまゝに理解することが出來ないで、各々自分のタイプの上に立つてそれらを見るのである。

明治時代にはよし一部には頑迷固陋の人々があつたにしても我が國民は概して未だ他を素直に受け容れ、素直にそれを鑑賞するといふ氣風を持つてゐたやうに思ふ。けれども恰度大正時代に入る頃、或は世界大戰爭突發の前後の頃から、國民の謙讓的空氣が消えかゝつて、そうした精神的處女性が失はれやうとして來た。而して物事を安價にきめつけてしまひ、輕薄に取り扱つて、正直過ぎる程に徹底しようともしないで高く止まつてゐるといふ氣風が社會の有ゆる方面に、いくらか宛發生しかけてはゐないだらうか。正直に問題の本質や中心にぶつかつて行かないで、問題の一角に幻影をゑがき、唯單にそれをちらりと一瞥した丈けでそれで其問題が理解され、更に解決されたやうな顔付をする人々が、次第に增加して來たやうではなからうか。

斯うした傾向が眼につくのは、明らかに我國民一般の精神上の處女性が失はれかけて來たことの反證であると見て差支ない。此の傾向が押擴まつて行くことは實に恐しいことである。眞劍な、而して深酷な國民的生活は、遂ひに生れることが出來なくなる。恰かも現在の支那の國民の如く、何等自らの文化も創造することが出來なければ、何等新しい生活も創造することが出來なくなる。國民の衰頽は此の邊から多くは生れやすいものである。

國民の精神的處女性の保持、それは然らば如何にして爲し得べきか。言ふ迄もなく大問題である。決して一二の政策や手段では到底よく支へ得るものではないけれども玆に最も有力なものがあることを忘れてはならない。それは文藝の力である。此の力を最も有效に用ふる時には、他の有ゆる手段よりも優ると信ずるものである。これは決して私の我田引水でも何でもない勿論他の多くの手段も必要に相違ないが、少くとも文藝の力が其の根柢とならなければならぬと思ふ。

今更說く必要もない事乍ら、文藝の力は、人間の持つ有ゆる偏見、固陋等を取り除き、凡ての旣成概念から解放せしめるところにある。而して人間の心性の奥底に潜む原始的なヒユウマニテイの光りを、生活の中心に照し出すのである。之を哲學者の言葉で言へば實在に徹せしむるのである。更に之を前の言葉に飜譯すれば、人間の精神的處女性を發揮せしむるのである。

古代の人々は經驗と知識に乏しかつたから、此の尊い處女性其もの丶力に主として依賴して生きてゐた古代人が近代人よりも宗教或は文藝に感動する力の强かつた所以のものは、主として如上の彼等の生活の然らしむる所である。けれども近代に入つて人類は知識によつて生活するやうになつたので、漸く持つて生れた人間としての精神的處女性を失ふやうになつたのである。之を救ふには何うしても文藝の力に俟つより外に仕方がない。古代にあつては文藝と共に、更に宗教の力によつて生活してゐたのであるが、今日にあつては現實生活を無視する宗教は到底賴むに足らぬ。唯文藝がある丈けである。吾々は吾々の信ずるものに感動を持たなければならぬ。知識は唯信じさせるだけで、感動を與へぬ。又吾々は吾々の感動をして現在の生活を除外したものであつてはならぬ。けれども宗教は唯此の現實の世相に目をつむつて盲ひたる感動を──從つて直ちに突き崩さる丶──與へるだけである。

今日の我國の文藝は未だ充分にそれの本質を發揮する迄には發達してゐないのは勿論であるが、然し乍ら我國の一般國民を偏見、固陋、輕薄、不徹底、妥協的傾向等から解放し、失はれんとする人間としての處女性を或る程度迄恢復せしめるには充分である。否充分過ぎるほどに發達してゐると私は信ずる。殊に小說の如きは最もそれにふさはしく發達してゐる。

私は我國民の敎化問題を思ふ時には、いつも此の文藝的敎化を思はない事がない。然るに敎育家乃至政治家の方面では少しも之を考へてはゐない。寧ろ敎育から文藝的分子を驅逐するやうな傾向のみ多いのが、是れ迄の事實であつた。文藝といへば彼等は眼の上の瘤とでもいつたやうに、「文藝は玆より內に入る可らず」

と教育の校門に立て札をしてゐる有様であつた。彼等の無自覺は眞に嗤ふ可きである。

私は最近『子供の感情教育』といふ一種の文藝教育論を世に問ふた。是れは名前こそ感情教育であるが、内容は文藝を中心要素とした初等教育論であつて、その眞意は前に說いたやうに、國民をして子供の時代から人間としての眞の處女性を保持せしめ、且つそれを發達せしめることを主張したに外ならぬ。私の言はんと欲した點が、讀者に何の位ゐ徹底してゐるかは知らぬが、少くとも斯うした止むに止まれぬ私の熱意を該書に吹込んで置いたつもりである。幸にして此うした問題をほんとうに而して眞面目に考へる人々の一顧を得ば、私は非常なよろこびを感ずるものである。

最近新聞紙上で文藝家と政治家と實業家との各一部の人々が集つて、演劇を初めとして寄席、活動寫眞等の改革運動が起されるといふことが傳へられた。又或る畫家や其他の有志が兒童の美的活動をほんとうに指導しようとする計畫に着手してゐるといふことも傳聞した。之等の運動はいろ／＼な意味に於いて目論まれてゐるのであらうが、しかし結局のところ、私のいふ國民の處女性の保持發揚にあづかつて力あることは斷言することが出來る。而して此の點に於いて私は將來益々斯うした文藝的敎化の運動の盛んにならん事を要望せずにゐられない。

今日の教育家を自覺せしめることも必要であらう。けれども多くの改革運動は外部から、素人の手から刺戟されることが多い。されば我國民生活の將來をほんとうに思念する人々は、先づ彼等教育家よりも前に、此の運動を起す可きである。殊に今日多くの教育家は餘りに無自覺であり、偏狹である。到底彼等の自然の自覺にのみ委するわけには行かぬ。

特に現代社會の要求する文藝

廣い見地から見れば、凡ての文藝は其時代、其社會の何等かの要求によつて生れないものは無いのは言ふ迄もない。けれども此の時代や社會の要求といふとを廣狹の二つに分けて考へられない事はあるまい。

處が此の狹い意味の要求とは如何なる要求であるかを考へて見るに、その文藝は唯其社會や時代に密接に卽してゐる許りでは物足りない。何か斯う或る强い刺戟を與へ、其社會に生をうけた一般民衆が、如何なる生活を求むべきか、如何に生き可きか、といふ生活意志を鼓舞し、且其方向を暗示するところの文藝を意味するのである。從て斯うした要求は、多くは理想主義の文藝に眼を向けられる傾向があるのは自然な行き方であらう。勿論自然主義の文藝とても、それが唯單なる寫實主義的作品でない限りは、矢張りさうした要求を別の意味で幾分充たし得るものとならない事はない。

それは兎に角として然らば特に現代の社會に於いて要求するところの文藝、卽ち狹い意味に於いて要求するところの現代の文藝とは何ぞや、といふ問題が起つて來るであらう。又斯うした社會的方面から文藝への要求を考へて見たからとて決して無理なことではなからうと思ふ。社會が或る秩序と形式的な階段とを保ちて、其運行する歩みが極めて徐々として爲される時然も其中に不正、不義、不幸、禍ひ、等を潜ませてゐる時、――其時には人間は此現實生活は如何に藻掻いても改造すべからざるものといふ憂鬱とあきらめとを感ずるやうになる。時によると人々は現實を廻避する唯美主義或はデカダンの生活を欲するやうにさへなる。

けれども斯うした時代にほんとうに要求する文藝は觀照の文藝である。現實の生活は何處迄悲慘であるか如何なる相（すがた）をしてゐるか、といふことを僞らずに觀照の鏡に映して見せて呉れる文藝である。此の社會に於いても勿論、如何に生活すべきか、如何なる生活を求むべきか、といふことを知らんとする要求を持つてゐるのである。けれどもそれを知る前に社會は、先づ現在の生活の狀態は如何に悲慘であるか、如何に不正であるか、如何に不幸であるかを、徹底的に見詰める必要がある。玆に自然主義の文藝が生れて來るのではあるまいか。自然主義的觀照的藝術の社會的要求に於ける根據は此處にあるのではあるまいか。自然主義の文藝は、唯現實生活は斯くあり――と見せるだけで、之を如何にすべきかといふことを敎へない。

明治末期に生れた我國の自然主義の時代は何うかと

顧るに、當時は我國の社會狀態も略整頓して來て、諸制度が漸進的に秩序立つて來た時代である。然もその陰には不幸な生活を送つてゐる無數の國民が存在してゐて、生活の飛躍が困難になつて來た時代である。人間はその各々の不幸な且つ悲慘な生活を何等かの形式で訴へて見なければ慰むることが出來ないものならば又如何に悲慘な生活であるかを、自らも觀照して見なければ滿足が出來ないものならば、斯うした時代に自然主義の文藝が生れたのは、當然なことである。

　而して當時から進んで來た我國の自然主義の傾向は今日に至つて益々洗練され、益々圓熟して來た。今日の多くの青年が比較的現實生活に對して觀照に長じてゐるのは、實に此の自然主義の文藝に負ふところ極めて多いと思ふ。然し乍ら我國の自然主義の文藝の多くは、然らば如何に生活すべきか、といふことを敎へない。だから彼等は實生活の倫理的方面乃至建設的方面は極めて不得手であるものが多い。

　今日の社會は何うであるか。殊に世界大戰前後の頃から、世界的の社會的變動の空氣を呼吸して、我國の社會も漸く舊態を墨守して安んじてゐられなくなつてゐる。社會は何かしらを求めてゐる、而して漸く『是れではならぬ』と意識しつゝ動き出してゐる。何の方面を見渡しても『今は機會だ』とでもいつたやうにざわめいて、何物をか期待してゐる。

　此の社會が動き出したといふこと、言ひ換へれば餘りに秩序的な階段的な、形式的な而して固定的な社會が眼に見えて動き出したといふことは、極めて重大なことである。斯うした機會は何十年に一度、或は何百年に一度あるか無しのものである。斯うした時代にはあきらめてゐたものも、又光明を取り返へし、空想と思はれてゐたことも、或は實現するかも知れないと期待をかけるやうになるのは人の心である。

　自然主義の文藝は現實生活の如實の觀照にあるのは言ふ迄もないが、之を藝術論的でなく社會的要求の方面から見れば、單にそれのみではなく、さうした現實生活の不正、不幸等を觀照せしめることによつて、人間の心底に『これではならぬ』といふ衝動を刺戟するに

あるとも言へやう。島村抱月氏が嘗て『觀照も亦人生の爲めなり』と言はれたが、右の點に於いて、確かに眞理を談つてゐる言であると思ふ。で自然主義の文藝の社會的任務が若し右の如きものであるとするならば今日我が國の社會が『これではならぬ』と動き出したのは、世界的戰爭といふ大きな事件の影響であるとは言ひ乍ら、他面に於いて自然主義的文藝にとつてもよろこばしい事でなければならぬ。

斯くて社會の動き出した現代に於いては、又新しく特に文藝に對して要求が生れて來るであらう。それは『然らば如何に生活すべきか。如何なる理想に向つて、はた又如何なる方向に向つて生活すべきか』といふ現代人の光明的疑問に對して何等かの滿足を與へ、何等かの暗示をひらめかすところの文藝であると思ふ。されば此の二三年以來、我國に理想主義の文藝が生れるやうになつたのも、決して偶然ではない。

藝術は果して社會生活の建設的方向を指導するものであるか何うか、といふ藝術論的問題は、藝術論者に委して置いてよい。唯今日の社會狀態を考察し、若し社會から文藝の方に要求することが許される場合には今日の我が國の社會——又世界全體も共通してゐるであらう——にあつては、少くとも前に擧げたやうな要求を持たないではゐられない。

然るに我國の文壇の現狀を見るに何うであらう。理想主義の作家が漸く盛んに輩出して來たのであるが、自然主義的作家に比較する時には、餘りに見劣りがし過ぎるやうに見えるのは何うしたことであらう。彼等が文壇に出初めた頃、即ち二三年前にはもつと活氣があつて、華々しかつたのであるが、其中に吾々の期待を裏切つて、動もすれば何となく前途を暗くするやうに思はれないでもない。斯うした悲觀は多少誇張したものであるといふかも知れないが、然し何う公平に見ても今のところは矢張り唯現實生活の觀照を示めす丈けの自然主義的作風の才が勢力を、より多く持つてゐるだらうと思ふ。

今日の理想主義的作品の多くは、餘りに單純で、生一本で、淺い。吾々は彼等から、社會の新しい改造に

痲する意慾を強く鼓舞される氣魄も吹込まれることが出來なければ、社會生活の建設的方向を、複雜な現實的生活の間に暗示されることも充分に出來ない。是れは彼等理想主義的作家の社會生活に對する理解や經驗、彼等の思想問題に對するデリケイトな考察等に多少の遺憾があるからであるか何うかは私は知らない。けれども兎に角此の何物かを求めつゝ動いてゐる現代の社會の要求に滿足を充分に與へるものでないことは事實らしく思はれる。私が今茲で一つ〳〵例を以て示めす迄もない。

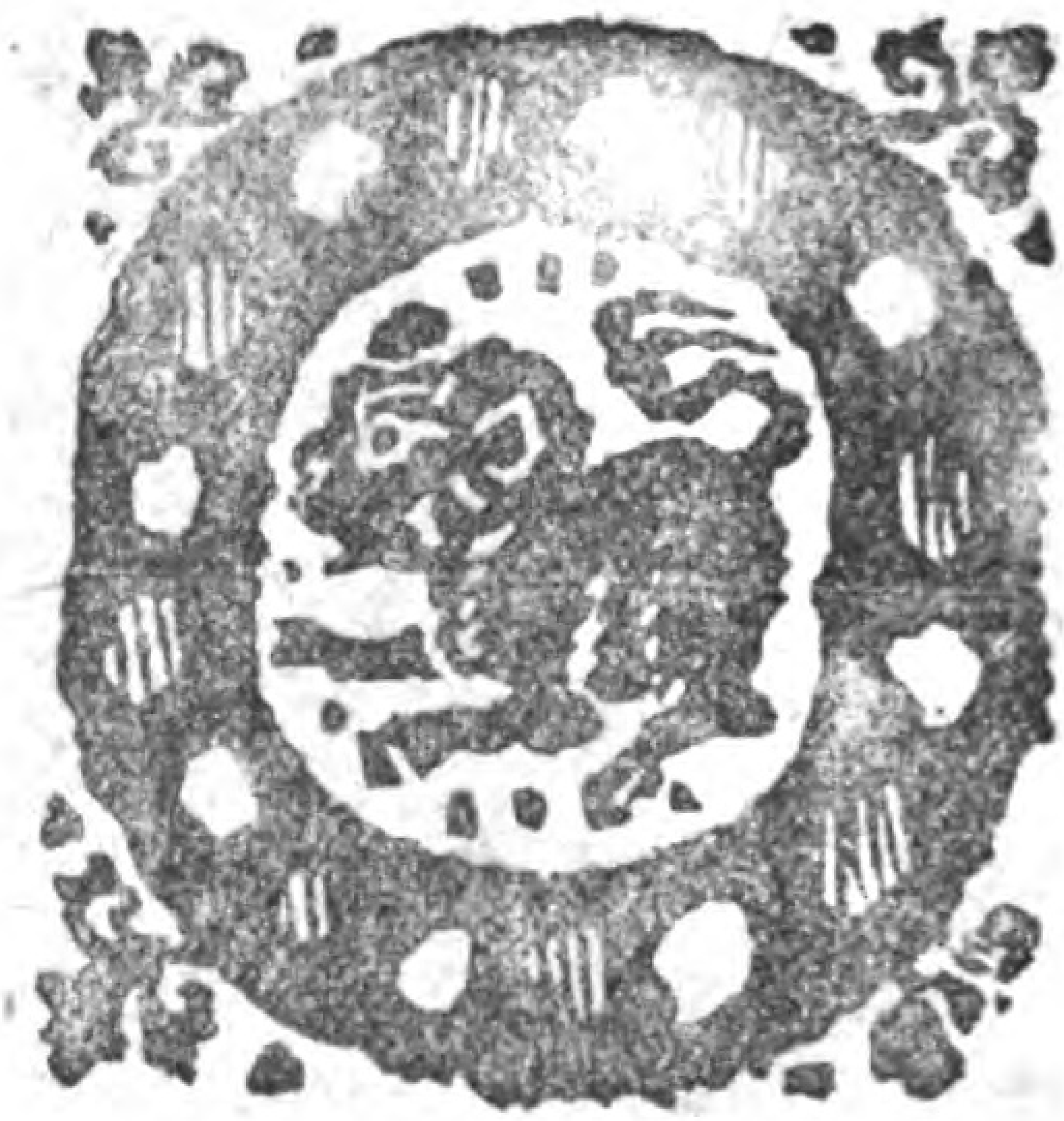
折角此の動き出した社會に生れて來た我が國の理想主義の文藝は、もう少し何うかならないものであらうか。勿論私のいふ意味は、彼の社會改造論的な純談理的な作品たれといふのでは勿論ない。唯斯うした社會的な要求に、もつとしつかりした、もつと力強い建設的暗示を與へるやうにならないものであらうか、何うかといふことである。

社會は常に單なる思想家や理論家や社會的科學者等がよつてのみ動いて行くものではない。民衆の心情を最も力強く支配する何物かの力を俟たなければならぬ而して文藝こそは其力を最も多く蓄へてゐるものでなければならぬ。彼の露西亞の農奴解放といふ最も大なる社會的事件に於けるゴーゴルやツルゲーネフの藝術の貢献を思ふ時、何人も文藝の社會的運行に對する力を信じないものはあるまい。

現代にあつては、世界の有ゆる方面に於て、曾ては空想であり、痴人の夢である、と思ひなされたとが、其實は空想でも夢でもなくて、吾々の生活に希望をつなぎ得るものとして考へ得られるやうになつて來た。今日の我理想主義の作家等は、今日にあつては少し位ゐ空想的なものであつても、それがほんとうの體驗に根ざしてゐるものであるならば、吾々は決して非難しようとは思はない。飽迄も自由に動きつゝある現代の社會に其歩むべき方向を力強く暗示するやうな作品を出して貰はなければならぬ。特に現代の社會の要求する文藝は其處から生れて來るであらう。私は自然主義的作家よりも理想主義的作家の未だ氣息の振はざる現文壇の狀態を思ひ、特に此感想を告白するものである。

デモクラシーの先祖御釋迦様

醍醐恵端



佛陀降誕の月、科學を背景とし、哲理と歴史とを塩梅して、この一編をものして見た。他日の研究と江湖の叱正を俟つ。

一、世界一の偉い者は誰？

世界一の偉らい者は誰と問はれて名乗るも烏滸がましいが、憚乍ら私で御座いと、なんぼ己惚れと梅毒氣はあるといふ、金看板つきの人間も、よも言へまい。幼稚園の小供ならば家の父ちやんは、一番偉らいよ、と自分の家の向嚮を指すもせられやう、又小學校の生徒ならば、ナポレオン、加藤清正などゝ、早速返事は出來やうが、浮世の風に吹かれつくした、頰鬚の跡の青い先生方は、そう容易に世界一の偉人を見出すものでない。

一體、世界一の偉らい人といふ、その標準は何であらふか？つまり、何を標尺（バロメーター）として、世界一といふ比較語を決定するか？これは自分一箇の私見ではあるが、然し、それは、一般に首肯せられ得る條項が三つある、即ちこの三條項に適合した人が世界で一番偉らい人といふことになるのである。

二　偉人の三要素

世界一の偉人の三條項といふのは、

一　世界で一番多くの人々から尊崇せられてゐる人であること。

二　世界で一番長き生命を保持してゐる人であること。

三　世界で一番人類に有益著明なる事業をした人であること。

といふ三點であるが、さて、一の世界で一番多くの人々から尊崇せられてゐるといふのは、唯單に、彼の人は偉かつたといふやうな名のみでない、衷心から、一番多數の人類崇敬の的となるの義であつて、例へば、活動寫眞が流行してから、米國の喜劇役者のチャプリンが、恐らく世界のどんな婢僕幼童の間に於ても知らぬものはないといふやうな、知名高名の意味ではなくして、キリストとか、孔子とかいふ聖人偉人は、知らぬ人もあるが、是を信仰する人は、衷心から敬虔の念を以つて、是を崇拜してゐる、即ちこの意味に於ける高名知名の意であらねばならぬ。この條項に適合する世界の偉人中第一人者を研究すると、先づ、宗教の開祖の誰かを擧げねばならぬ。キリスト、孔子、ムハメッド、釋迦などであるが、さて、その中で、誰の開らいた教の信者が一番多いであらうか、つまり、それで以つて、一番多數の信者を有する宗派の開祖が、一番世界で多數の人々から崇敬せられてゐるといふ決定が出來る譯である。

愈々、世界宗教信者數比較の番附を、トコトン〱天下太平五穀成就の櫓太皷なしで御目にかけ申す。

一、拜火教　十五万人
二、シック教　百二十万人
三、猶太教　七百萬人
四、回々教　一億五千五百万人
五、婆羅門教　一億六千万人
六、基督教　三億二千七百万人
七、佛教　五億人

（リスデヴキツ氏）

是の計算は、元より大體なもので、正確なる宗徒の統計の如きは、あり得べからざるものであるから、扨て先づ是を正しいものとすれば、世界で一番多くの信者を有するものは、佛教で、次がクリスト教であるけれど、その數は半數に位するやうなものである。してみると、佛教の開祖釋迦如來様は、天帝の御息子クリスト様よりも、多くの人々から崇拜せられてゐるといふ譯である。吾人は、多くの人々から崇拜せられてゐるが故に、甲が乙よりも勝れたるもので、乙が甲より劣つてゐるとは斷言せない、又事實に於て、人物そのものから言つた場合には或は小數の人々の崇敬するものが、多數の人々の崇拜する人物以上の實質を有してゐることもあるが、大體に於て、偉らいといふ時は、多數人の崇敬する人が、小數人の崇敬する人より勝つてゐるとせねばならぬ。此點から、釋迦如來は世界一の偉らい人である。そして、佛教の領域は、印度を中心として、東西

各地方に亘り、實に偉大なる感化區域を有してゐる。先人の研究によると、紀元八九世紀以後、印度の本家本元は、婆羅門教が再び恢復して、佛教の跡は漸くなくなつたけれど、それでも本店に皆無といふ譯はなく、錫蘭島、ネパール、ダンジリング、カシミール等には、チヤンと殘つてゐる。それから、印度の東北では、西藏、支那、蒙古、滿洲、朝鮮、日本、等で東南は緬甸、暹邏、安南、から南方になると南洋諸島、かけ離れた處では北米から、世界各國に今では擴がつてゐる。即ち、數に於ても亦、大せに於ても世界一である。そして、佛教は、此點から見ると、實に宇宙文明の最大偉觀を呈してゐると言はねばならぬ。

三　世界で一番長命な人

既に、御釋迦樣は世界一の信者を有し、世界で一番弘大なる土地の所有者であると決定して見ると、この點丈けでも、御釋迦樣は世界で一番秀れた人であることが略々解る。アメリカといふ國は、世界一を稱したがる國であつて、例へば、世界一の共和國は自分の國で御座いと、誇のやうな鼻をうごめかし、世界一の大瀑布は、ナイヤガラであると、ツンと乙に氣取る、世界一の建物、世界一の何、世界の何と、世界一の行列をして媚こんでゐる。若し斯んな意味に於ける世界一番の偉らい人を擧げたならば、此點のみでも釋迦は世界一である。然し。吾人の所謂世界一の偉人といふ標準の第二である、世界で一番長き生命を保壽して見ると、矢張り札は御釋迦樣の頭の上に落ちて來なくてはならぬ。

人生五十と相場が決つてゐる、七十は古來稀なりとか、支那の先生が言つて御座るが、百年を長壽とせば人間程果無きものはあらじで、實に悠久なる宇宙に比して、人間の壽命は朝露如電亦如泡の御經の文句通り、それで、この短い命の人間の中で、一番長い生命の人は誰れど、統計比較して見たところが餘り結構なものではない。浦島太郎は三千年、東望朔は八十歲、武内宿禰が三百五十歲、百二十五歲の主張者が大隈侯等で、百歲以上の人は、ブルガリヤの國民以外には尠い、大概六七十歲を以つて普通とするのである。故に世界一の長壽といつた處が、器が知れてゐる。若し人の壽命で世界一の偉らい人を物色して見ると、釋迦の人壽八十歲であるといふから、世間八十歲の人はザラにある。

今言ふ所の壽命といふ意味は、阿彌陀の無量壽とか、法華の

久遠とかいふ意味と同じで、抽象的意味から云ふのである。即ちその人の人格の時間的勢力を指したもので、此點から言ふと、吾が御釋迦樣は確かに世界一の壽命があるに違ひない。何故ならば、基督でも孔子でも、マホメットでも、其生命は限りがある、一定の限度があることはその聖典に於て證據立て得るが、御釋迦樣丈けは九十六億七千萬年の未來迄は大丈夫と、チヤーンと保證が這入つてゐる、畢竟、地熱が無なつた後迄であつて、孔子や基督やなどの名が、既に煙滅に歸した後迄も、御釋迦樣の名は殘る譯であるから、是程人間で長壽長命な人は外にあるまい。世界一の長命者は御釋迦樣である。

四　不老不死の靈藥製造者

さて、吾人は既に二大條件に於て、釋迦如來が世界一の偉人であることを決定した。此先述した處の二大條件といふのは即ち、空間的方面と時間的方面との二點から論じたので、他の語で言へば人間の二大慾求である時間的存續の要求（生命）と、空間的擴大の要求の二者に於て、御釋迦樣は世界一であることは先述の如くである。次に第三の條項である、世界で一番人類に有益著明なる事業をした人を物色すると、何が人類に一番有益で、何が人類の仕事で著明であるかといふ問題になる。さうなると、人類は何を一番望み、何を人類出世の目的とするかといふ事から決めねばならぬ。即ち人間の要求は何であるかといふに、生の要求である、生き度いといふのが、生物としての人間の根本慾である。されば、何が人間に最も有益だといふて、生命を與ふる程有益で著明な事はあるまい。腹がふくれるから、家がどうの、着物が慾しいのと勝手な熱を吐くけれど、危急存亡、生の瀬戸際となつて、着物が何んだ、家屋が何んだ、御召大島の千百枚も、金殿玉樓も、壽命には替へられぬ。さうなると、何よりも壽命が大事である。漢の高祖は不老不死の仙藥を得むが爲めに、除福といふ先生を日本に寄越したさうぢやが、御苦勞千萬此上なしで、斯んな馬鹿氣た話は又外にあるまい。生あるものの死あるは天下の常道、生者必滅會者定離、祇園精舍の鐘の音が假令叩いても鳴らぬことがあつても、是計りは天に二日なきが如く、幾何學の公理のやうに、説明を要せないものである。然し、若しそこにこの不老不死の藥を發見したとしたならば、丁度、ギリシア神話のエスキユピアスかなどのやうに、事實人間に不死無量壽を授與する人があつたならば、恐らく此人は世界人類並に生物の上に、最大最高の大功業をした

人と言はねばなるまい。此點に於て御釋迦樣は、一切衆生に不老不死の生命を與ふる精神藥の發明者であつたから、畢竟、世界で一番偉らい人と言はねばならぬ。或る唐人は、御釋迦樣はそんな事を發明したのかと辭り顏で問ふけれど、御釋迦の教理は、「一切衆生悉有佛性」といふのがその詮要キリ〲の結着點であるから、佛性とは、御互生物本來具有の自性それ自身の異名山は高く谷は低く、花は紅、柳は綠と、本源自性その儘の天地の自然の本質が、即佛なんだ。であるから一切衆生、牛も馬もかく言ふ醍醐も山本氏も高須氏も甲も乙も御互人間面して、やれ人間性の、天賦の性質のと小怜悧そうに喋舌つてゐるが、佛樣なんだ。佛樣は形に於いて、色身に於て生滅を免れないが、佛の自性、本源の佛自體は常住不變である、是を法身無相の堺といつて、佛教の教理の極致で、阿彌陀宗では、阿彌陀一佛を無量壽無礙光と稱し、法華中心の宗派では、久遠成實の法華といふのである、是を通佛教の語では三世實有法體恒有といふし、法身無相といふのである、佛ともいひ神ともいふのである。畢竟、一切生物は、この佛教の教理でいふと、不生不滅の本心本性を有するものである、といふ極印が捺されてゐるのである、その佛教の開祖は御釋迦樣であるから、人類並に生物一切草木國土悉皆は、御釋迦樣發明の佛教といふ仙藥で、不老不滅の保證を得てゐることになる、なんと、世の中にこれ位い有難い保證、これ位い有難い藥が又とあらふか。全く世界一の發見は、佛教の發見といふべきであるまいか、世界生物に一番有益で著明な仕事といへば是れに勝るものが他にあらうか、即ち佛教は世界に於ける最大發見の隨一で、人文現象中の最大事實であるから、御釋迦樣は、勢、世界一の偉らい人といふ結論を言ひ得るのである。

五　御釋迦樣の戸籍簿

さて、世界一の御釋迦樣の相場が決つたら、この御釋迦樣の戸籍調べをする必要がある。

本籍地。中印度迦毘羅伐窣堵國（Kapilavastu）
（王族。（Kṣatriya）佛教發見者。
本人　釋迦牟尼佛（Sākyamuni-Buddha）
幼名悉達。壽八十歲
拘利城主善覺王ノ娘（Supra）　妻　耶輸陀羅（Yaśodharā）
妾　鹿養女（Mṛgaja）
仝　鹿野女（Mṛgadāva）
（妾其ノ他多シ）
長男　羅睺羅多（Rāhula）

庶子		保婆摩耶
仝		善星
異母弟		難陀(Nanda)
異母姉		盧波難陀(Rūpananda)
實父	師子頬王長男	首頭檀那(Suddhodana-Marhiaja.)
實母	拘利城主無能王娘	摩訶摩耶(Mahāmāyādevi)

この世界第一の偉人釋迦の系統は、戸籍面の通り、印度の王族で迦毘維城にゐた、其祖先は閻耶遲那(Iyusena)といひ、その子、師子頬王(Siniinhanu)に七人の子があつて長男が首圖駄那で即ちこれが御釋迦様の御父様である。御釋迦様の御母さんの系圖は祖先を拘利城主提婆施訶(Devadaha)といつた、その子が阿兎釋迦(Anusakya)といひ、その子に一男三女がある、男は須婆佛陀(Suprabuddha)、三女といふのは一番姉様が檀陀波膩(Dandapāni)次女が摩耶(Māyā)三女が波闍波提(Prajāpati)でその第二女摩耶が世界一の偉人を生むだ人である。釋迦も達磨もヒョイ〳〵と生む女の中の代表者である。

御父さんが四十五の時に、御母さんの腹の中にこの御釋迦様が出來た。そして人間普に十ケ月腹の中にゐて、四月八日嵐毗尼園(Lumbini)の無憂樹(Tumesin-asoka)の蔭で誕生した。即ち摩耶夫人は伽毗羅城から親元の拘利城に歸つて産をしやうと、ここまで出かけると途中で産氣附いたので御供が驚ろいて樹の下に御つれ申し、玆で産の緒を解いた譯であるが、傳説に依ると左の膝腹から生れて、直ちに周行七歩にして、指を天に一指を地に指しつゝ「天上天下唯我獨尊」と獅子吼した處、天上から龍が降つて口から甘露雨を降らして産湯の代りにしたといふ。(西域記)これは釋迦の奇蹟傳説の初歩で、人間以上に價値づけやうとした荒誕無稽の言でとるに足らぬ、膝腹から生れたり、木の股から生れたりする人間は世の中に化け物の外あるものでない。生れた赤ん坊がヨチ〳〵歩きで周行七歩は、老子が白髪を生して生れたといふ傳説と同様、チト承知ならない、オギアと泣く代りに天上天下唯我獨尊と唸つたら大變である。(西域記卷六、因果經第一、太子瑞應本起經卷上等參照)處が産後の肥立で、御母さんは死むだので、母の姉で第二夫人の摩訶波闍婆提(Maha-prajapati)が乳養した、哀れ末代の教主も母のない身の上であつた。

然し、一向そんな事には御構なく御釋迦様は甘茶で育つて行く。先づ、七日に名づけられて、喬答摩(或は瞿曇)(Gautama)といひ、又悉達多(Sarvarthasiddha 或は(Siddhartha)といつた。(無量壽經私記)日本で言へば前者は最勝王といひ後者は悉成王といふ義である。即ち本名は喬答摩悉達多(Gautama-Siddha-

tra）といふので、普通御釋迦牟尼といふが、（本行集經參照）是は悉達王子出家成道後に印度で敬稱したもので、釋迦（Sakya）は、この太子の出生した種族の名稱であつて、牟尼は梵語の（Muni）で智者の意である、即ち釋迦牟尼とは釋迦種族中の偉らい先生といふ意味である。

この後年の御釋迦樣の惡戯のひどいの何のつて、何しろ生れ乍ら七歩周行するやら、大聲で天下天下と怒鳴るやらだから仕末が惡るい。流石父の淨飯王も困つて、婆羅門の學者で占の上手な阿私陀（Asita）といふ者に人相を見せると「此兒若し出家せば人天の大導師となり、若し在家ならば國威を八紘に輝すべし、恨むらくは吾れ壽短にして此兒の將來を見る能はざるを」と（大佛頂經）いつたので、父王はホク〱もの、獨り子であつて而もこの通り吉相とは、此奴惡戯されても金屏風の十や二十は何んでもないと、精株をつけて教導に任じ、跋陀羅尼（Bhadrmui）といふ家庭教師をつけたり、毗奢蜜多羅（Visvamitra）といふ武術の先生を傭ふたり、立てば歩め、歩めば走れ、丸であめを引延す心地で育てた。

六　御釋迦樣の花嫁御選

その後益々成長するに從つて聰明睿智、目から鼻にぬけるやうな怜悧な資質、そこで家庭教師に於ても伽算提々婆（Ksant-ideva）といふ釋迦族中の一番偉らい大學者で大武術家を先生に御願して教養した。處が、この玉の太子樣は非常に多感性でともすれば出家しそうである。耶蘇が家庭の常に悲觀の材料に滿されてゐたことやら、孔子樣が世路に呻吟してゐた事やらとは全然趣を異にし、彼御釋迦樣は、富貴自在な王太子の家に生れ何物も悲觀の材料はないに拘らず、天資の多感性は、事々物々をして世態無常、衆生可愍の痛嘆の種たらしめた。金殿の御遊も、玉樓の盛宴も何等の興を添えなかつた、しかも一粒種で天下一の英資萬一出家でもせられては大變と、御父陛の御心配さぞや如何ばかり、そこで、何より年頃の青年に適當したものをと、衆評一決したところが結婚問題であつた。

三國一の花嫁御選は、同じ釋迦種族の拘利城主須婆提（Suprabuddha）の娘さんの耶輸陀羅（Yasodhara）といふ中印度一の別嬪で賢夫人であつた。（因果經）いくら好きな牡丹餅でも、何時も同じものでは厭が來てはと御妾やら御部屋樣やら、女官の園へでも來たやうな仕掛にして、太子の心を引立やうとした。

即ち正妻には耶輸陀羅であつたが、その他御妾さんが幾人も

あつた。鹿養女、(Mrgaja)鹿野女(Mrgadava)、摩奴陀羅(Manodhara)牛護(Gopa)青鉢羅那(Utpalavarna)などは、十二遊經や本行集經や因果經や乃至佛所行讃經、修行本起經などに於て御姿さんとして名の出た人々である。後世の御坊様が、佛様として崇め奉つて清淨してゐる御本尊の御釋迦様に、斯んた澤山の御姿があつたと言つたらサゾ青い頭に葛のつるのやうな紫色のすじを立てゝ怒るであらうが事實だから仕方ない。

婦あれば子ありとは、一は二より小にして三角形の二邊の和は他の一邊より大なりといふ定理と同様な公理である。正妻の御腹から羅睺羅が出來た。佛様の子である、丁度、觀音様や地藏様の申子のやうなもので、有難い御子である。其他鹿野女の腹から善星王(Sukitara)が出來、(涅槃經)憍曇彌の腹から優婆摩耶(Upamiya)が出來てゐる(枳橋易土集)。

然し、恩愛の妻子も、富貴思の儲の四周も、彼の心を慰するに足らず、二十九歳の一夜、「三界無レ怙、唯道可レ恃」と歎じて俄に愛馬犍陟(Kanthaka)に騎り、車匿(Channa)に御せしめつゝ東方藍摩國(Rama)に向つた。向ふは雪の山、跡は霧に包む王城。傳へいふ、十二月八日、夜妃嬪の熟睡の間を宮殿を出しと、途方もない寢ぼけ者も世の中にあればあつたものだ、大事な殿様の御出奔を知らぬで寢てゐた姿達の寢様のさぞ苦しかつたであらう、御釋迦様は、是を「外爲二革嚢一中盛二臭穢一無二一可一レ愛」。と愛想づかしを言つて御座る。

御釋迦出世の動機は、四諦四門の觀である、手短に言へば無常の觀念であつた。朝に紅顔ありて世路に誇り、夕に白骨となつて荒原に朽つと、白骨の御文章通り、無常迅速の世の中に永久不變の常住の樂を求ねたのだ、三界無要、唯道のみ恃むべしといつた彼の出門の一言は、明瞭に出家の動機を物語つてゐる。物質上の快樂は、武帝の文句通りに「歡樂極兮哀情多。」で贅澤の仕方第で厭が來た、そこへ、波羅門的の教養を經た怜悧なる彼の頭には、哲理的な精神的満足を得やうといふ心が起きたのである。

七　二十九歳で夜逃げ

朝歌夜絃の金殿から、荒らい星を打眺め出た御釋迦様は二十九歳であつた。(増一阿含經等參照)

迦毘羅城からドン〱東南に藍摩城(Rama)を經て阿代彌河(R. Anomi)を渡り、ここで、丁度鹽原太助が愛馬青に別れたやうに、白馬犍陟に別れ、初めて髮を剃り袈裟をつけ、是から

太子は一の沙門となり、哲理の研究に先輩を歷任に尋ねたのである。第一が跋伽婆（Bhagava）であつたが、一日にして眞哲理の意に満ざると知つて北、阿羅邏迦蘭（Alara Kalama）の處に行つた。（本行集經）

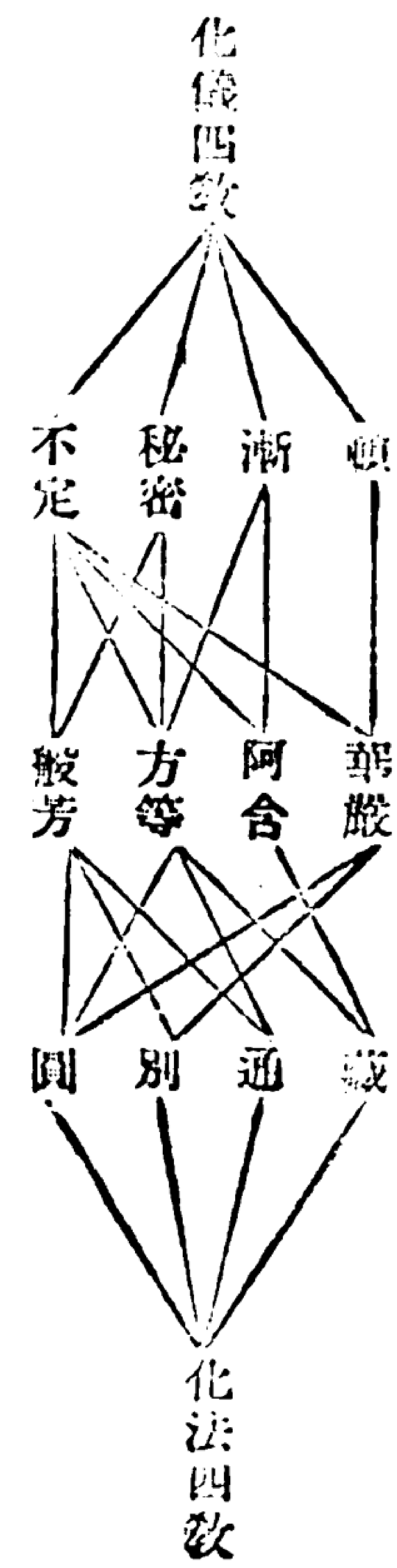
イヤ太子出家後の迦毗羅城は大騒ぎ、掌中の珠を失つたやうに喪神の態なる淨飯王、大臣大夫の驚駭、妻女の歎き。その中に車匿は泣乍ら犍陟を引いて歸つたので是に問ふと、出家し給ひて云云との事、ソレと國王も大臣も馳けつけたは跋伽婆仙の處、その一遲く彼時早く、太子は阿羅邏伽藍仙人の處に往つてゐたので、又候ここに馳せ來ると、太子は堅く執つて歸らうにもないので、阿說示（Asvajit）憍陳如（Kaundinya）跋提（Bhadrika）婆敷（Vaspa）摩訶男（Mahanama）等五人を随從せしめて、諦らめた。御釋迦樣は、厄介者を擲つた淸々した顏で、阿羅邏伽藍と問答したが、矢張り賴りない彼等の思想に不滿足で、水の冷暖は自知するのみと、自分で自分と大事を究明するが一番と、恒沙を渡り、摩伽陀國（Magadha）から王舍城（Rajagrha）を經て槃荼婆山（Pandava-mount）の樹下石上に端坐凝思した。更らに尼連禪河（Nairanjana）を渡つて、優爲（Uruvilva）那提（Nadi）竭夷（Gaya）の諸仙を破し、更らに又、宇陀羅々摩子（Udraka Ramaputra）に會へど遂に得ず、（佛本行集經）再び、愈々尼連禪河の東岸、伽闍山（Mt. Gajasirsa）の林間に、六年の苦行を實行した。御苦勞にも阿若憍陳如等の五人も御主人の通りに實行した。が然し、苦業は眞正の道を求むるの道でなかつた、六年の垢は愈々尼連禪河で洗はれ、牛乳でも飲むで精をつけ、更らに自己の眞面目に沈入した。處が五人の侍者達、この苦行を放擲した若主人を見て、正法の精神退轉せりと見て、遂に捨て去つたので、御釋迦樣は獨りぼつちで、結句氣樂なりと、佛陀伽耶（Buddhagaya）に往き、畢波羅樹（Pippala）下の金剛坐に、此道を成せずんば動かじと不動の精神を堅めて坐禪した。

四十九日の端坐に、惡念妄想はサラリと西の海に流されて、四十九日目の丁度二月八日、三十五歳の春淺き曉天、彼は明星の燦たるを見て大悟徹底して曰く「奇哉一切衆生皆具有如來智惠德相」と。これが世界一の偉らい人となつた御釋迦樣の第一の獅子吼であつた。（因果經、修行本起經、佛本行集經）

八　御釋迦樣が私生兒

是から、五十年の間、橫說縱說、說いたの喋舌つたのつて、一生涯は唯是れ舌。八萬四千の自由の法門、御蔭で出來た御經

が一句經。末世の小僧の血の涙の種で御座る。五時八教がその説明の階段で、阿含部以下最後の説法の須跋陀羅を教化せらるるまで、幾萬人の弟子信者が出來た。



非頓漸秘密不定 ― 法華涅槃 ― 開顯圓。

最初の説法が婆羅奈國鹿野苑（Mrgadāva）であつた、（因果經）次が摩伽陀國の杖林（Yastivana）であつた。前に始めて、頻毘婆羅王、釋迦の爲に王舍城中の竹園（Venuvana）を獻じ、竹林精舍（Sanghārāma）を別建せられた、是が御寺様の最初のものである。この頃から、四方の婆羅門の教戰を挑むもの多くなり、舍利弗（Sāriputra）、目犍連、摩訶迦葉（Mahākāsyapa）等千二百五十餘人の弟子が出來て來た。

　それから、御釋迦様は故郷に歸つた。英雄は故郷に敬せられずで、キリストがナザレに歸つた時も、ムハメツドがメツカに歸つた時も、同じやうに釋迦さんも、故舊知己は顧もせなかつた然し度すべき時が來た。父も妻も共に子と夫との門に入つた。阿難（Nanda）といふ異母弟も弟子になつた。（法句經等參照）羅睺羅も頭を剃つた。そして重病の父王首圖馱那は病死したので前に茶毘に附して追善の供養を行ひ、それから優婆離、（Upali）阿㝹樓陀（Anuruddha）提婆達多（Devadatta）等を度し、再び王舍城に歸つて、四方に化を布き舍衛城に行つた。並處で祇陀園（Tetavana）の寄進をうけ、祇園精舍（Tetavana vihara）を建てた。此頃は印度の豪商などで、例へば、阿那他擯茶掲なども信者となり、阿闍世父に、婆斯匿王等の外護があつて、日一日と彼の教は盛大になる。

　好事に魔多し、色々の迫害があり、中には、チンチ（Cinci）といふ妖女は、祇園精舍の祇堂で、御釋迦様の爲に子が出來たと叫むで、この御釋迦様を陷入れむとしたが、そんな事は、光明立法眞言の御釋迦様は御存知ない事であつた。釋迦に提婆は附もの、忠臣伊達安藝に惡人小栗美作、丸で中國の國づくしのやうに、善惡巴と入散れて飛ぶは世の常、成道後五六年は御釋迦様の發展の基礎であると共に、亦非常に苦しい時代であつた。

　成道四十五年の雨安居を毗舍離城外の波梨婆（Beluva）に送つた八十の御釋迦様は、既に老病と共に又疼痛に罹られた。既

に餘命は短くたつた、御弟子は心配の雲に包まれたが、釋迦は常の如く、毗舍離城から、拘尸城(Kusinagara)に赴き、市中の金銀師職純陀(Cunda)といふものの庭前で休憩したところ、純陀は大に喜び豕肉を中食の照心とした。ところが、この豕肉が悪かつたか、釋迦は一層の重態となり、非常に苦むだが、又漸く歩むで跋提河(Hiranyavati)に到り、水浴したりなどしたが、既に病重く、日暮に婆羅國(Sala)に到り、最早再び起てなくなつたので、阿難に命じて、婆羅雙樹の間に床をとらしめ北首して臥した。そして御弟子達は最後に近い師の四周に泣いてゐる、中夜寂然として聲さへない。その時、須跋陀羅(Subhadra)といふ老婆羅門は、八正道の最後の説法を聞いた、そして釋迦の入滅は近づいた。啼泣悲涙の聲は高くなつた時、釋迦は目をひらき、

「汝等比丘、吾滅後に於て正に波羅提木叉を尊重し珍敬すべし、暗に明に遇ひ、貧人の寶を得るが如し、吾若し世に住するとも是に異ることなけん。」(佛遺教經。)

と。この時、一切の天衆人間生物は悉く入涅槃と泣いたのが、今の涅槃像の起源で、阿難阿㝹樓陀は七日の通夜をなし、拘尸城外にて荼毘に附した。かくて世界一の偉らい御釋迦様も、一炊の煙となられたが、今の今の世も、尚ほ世のあらん限り、そして世は滅しても、不滅の御釋迦さんは活きゐてらるゝのである。(大般涅槃經卷下)

九　デモクラシーの御先祖

御釋迦出世の本懐は、何であつたといはば、先づ個人の健全なる權利の伸展であつた。釋迦出生當時の印度は、四姓の階級的差別があつたので、所謂、第一婆羅門(Brahmana)第二に刹帝利(Ksatriya)第三に毘舍(Vaisya)第四に戍陀羅(Sudra)のその階級的區別は嚴然として、婆羅門以外は丸で犬か猫のやうに思はれてゐた。この一例を言ふと戍陀羅で無禮なる罵言を言へば舌を絶て、若しその上族の名と姓を擧げて輕侮したならば、十指の長さに等しき鐵の鍼を赤く燒いて口へ銜き込め、若し婆羅門に何か命令でもしたらば、その口と耳とに熱油を灑げと、しかも仰々しく經典に記してゐる程でも略々想像が出來る。羅婆門が一度怒つたときは、二十一回も刹帝利族を鏖滅さして、湖も爲に血となつたと史傳にある。職業の自由も、信教の自由も享樂の自由も、一切の個人の權威は無視せられた。そして釋迦は出世の第一歩に於て、衆生一切悉有佛性と高く一切の個人權

利自由を絶叫したのは、人類一切の權威を認識したもので、他の意味からは法身の佛身のといふが、現代語で言へば、即ち凡ての人類の上に無上の法門を開放したもので、デモクラシーの世界最初の力說者である、人種平等の宇宙の第一の絶叫者である。三千年前に吾が御釋迦樣が現代で漸くデモクラシーと、外國語でなければ通ぜぬやうな、生溫るい人間共が騷ぎ廻る說を、チャンと高唱してゐられるとなると、ヘエン、矢張り世界一の偉らい人であるといつても、毛唐崇拜で、坊主は憎い袈裟迄も憎いと、譯の解らぬ青瓢箪共も、一本參つたことであらう。

(拙著佛敎戶籍調152―153參照)

尙ほ、この崇敬すべき御釋迦樣を唯で呼ぶの尤躰なひとてか色々な肩書がある。俗でいふと博士とか、勳何等とか伯爵とかいふやうなものである。第一が佛樣(Buddha)で是は印度の通稱であるが第二には如來樣だ。如來といへば、すぐ阿彌陀樣を想像するが、何も阿彌陀先生一人に限つたものぢやない、よい方の名では、黃面老師と譯書などに出る、何も病氣で顏が黃くなつたものでもあるまいが、釋迦の佛像は、顏を黃金色に塗るからである、又紫磨黃金佛ともいふ。釋迦如來は釋迦種族中の大先生で釋迦牟尼といふと同樣である。獅子法王ともいふが、獅子は百獸の王の如く、御釋迦樣は人中の王といふ意味だそうぢや、薩婆若、薩婆若提婆、婆伽婆、修伽陀、達摩羅闍、耆那、菩薩、路伽那達、轉輪王、舍羅摩拏、摩訶毗羅、摩訶高樓洲、日梭王、提婆底提婆、河羅訶、應供、正徧智、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、世尊、など、大した肩書で、前の法性寺入道大政大臣等いふ名より、一寸ばかり長ふ御座る。

十　飛行機や手品の發明者

さて御釋迦樣の說敎の中には、當底人間知識で解せぬ樣な事件が多い。千里眼のやうに、現在から過去未來まで、チャンと知つてゐられる。一種の仙術とでも言へやう、誇大妄想狂とでもいへやうけれど、淺い凡夫が狹い範圍の知識でとやかくいふのが間違か知らん。例へば、五十六億七千萬年以前に、毗婆斯佛(Vipasyi)といふのがゐて、その種族は刹帝利の憍陳如姓で父が槃頭摩多母が槃頭摩底といひ、子が方膺とて、槃頭摩那城の人であるそうだ、そして婆羅樹下で大悟大徹して多くの弟子を得、中に騫茶、薩河といふ大弟子が出來てゐたと、丸で現在の戶籍役場が原簿を調べるやうに、見てゐるやうに述べたてる。そう

かと思ふと、五十六億七千萬年の後に、彌勒菩薩といふ人が出て、自分釋迦の佛法を布くべく、兜卒天に待つてゐられるそうぢや。然し時代の科學の天地から計算すると、五十六億七千萬年する迄もなく、現世界は冷却して、丁度月の世界と同様に人間が居なくなり、五十六億七千萬年以前は、誠に未だ混沌未分以前であつた。御釋迦様の統計化學は妙な人間離がしてゐるでないか。

殊に面白いのは、御自分の前世があるそうでそれがサモ眞實らしく記してある。大智致論といふのは、釋迦如來の前身は中印度波羅奈斯國の山中にゐた牡鹿と仙人との間に出來た處の、額に一角があり、是が鹿に似た、所謂一角仙人(Ek slingo)といふのであつたそうぢや。

その他この方には、妙な幻覺作用が臆面もなく、そして巧妙に物語り得られる能力が附與せられてゐた。地球の上に三十三天があつて、兜卒天といふのがあるとか、又は西方十萬億土に極樂淨土といふ處があるとか、それが、家が水晶で出來てゐて、柱が黄金で、白金(プラチナ)の瓦が布かれ、七寶の飾りがしてあるのが牛が何匹で猫が何匹、と釜の下に灰が何升あるまで、丸で手に取る如く、現實見て來た様に言はれる、殊に、極樂世界なぞの様には、阿彌陀經にチヤンと明記してあるが寔によくもコンナ事が知れたものだと感心する程であるが然し、御釋迦様は、世界一の偉らい方であるから、平々凡々なる吾々の肉眼で見えぬ世界の裏居まで知つてゐられるらしいから、萬更、嘘だとは押切つて言へぬ、現に空中飛行器なども、三千年前にこの釋迦様はチヤンと言つてゐられるから、自己の狭量な智見と想像の範回から、一概には申し兼ねるが、でも、井の中の蛙で、吾々は變な氣持で釋迦様の御説法拜聽することがある。かく申しては末世の毗丘、死して地獄に眞逆様、オゝ恐ろしや、南無歸命釋迦牟尼佛(大正八年四月九日了畢)



こころ

與謝野晶子

わたつみの高き波より恐るべしわれ自らの思ひなれども

戀をする心は獅子の猛なるも極樂鳥のめでたきも蓄ふ

夏のかぜ羽弱き蛾の白きをば美くしむとて行き戻りする

何ごとも假の如しと微笑みぬ二なく執する人も見ながら

ここちよくおのれに嗅ぎぬ初夏の土の匂ひと水のにほひと

白き罌粟われを親み紅き罌粟われを憎むと歎きてそすれ

祭日の次の朝かと淋しさをよそへて思ふわれのこのごろ

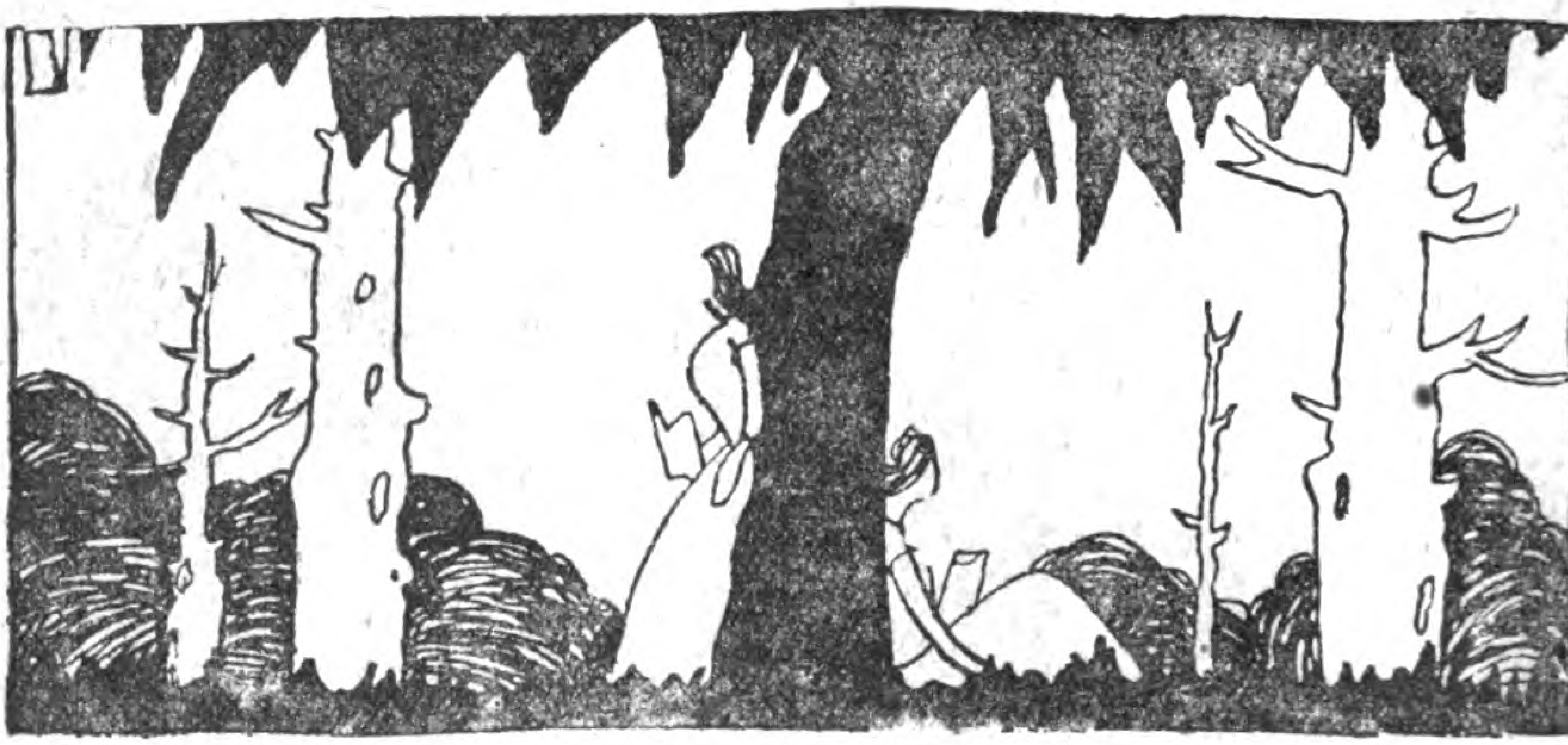
屋根の草やや大きなる葉のうらを返して物を思ふ朝かな

ひとところダリヤ色すのこころをば唯だおほらかに眺むればわれ

わが心病ならまし朝に次ぎことわりなくも夜中の來る

人としておのれを證けるこの世をば悲しきばかり愛づるなりけり

なみすべし今日の心は行く雲の影のみうつす野の中の池



目白挿話

悲戀悲歌

滋野行人

自分の今度の旅には別に何の目的があつた譯ではない。學校を出ると直ぐ記者生活に入つて、所謂社會人となつてからは、病氣とか轉勤とかの外には、五日と休息の日を持たなかつた自分である。それが今年の春、やつと長い記者生活から足を洗つて、自由な身になつたのだが、その後も何や彼やと用事に追はれて、依然として蒼忙な日を送つてゐた。此頃漸く少しの暇を得たので、それで漸うして出かけた旅なのである。

久しく憧れてゐた京大阪に行つて見ようと云ふのが、今度の自分の旅の目的といへば目的であつた。それには中央線で始めに名古屋に行かうと豫定したものだから、飯田町の停車場に來て見た所が、ふとこの旅の振り出しに信州の松本に寄つて見ようと思ひ立つたのである。

こゝで自分が突然松本を選んだといふのにも、格別の理由がある譯ではない。唯こゝに今から數年前、二年程自分は矢張り記者生活を送つた事があつた。別にその爲に懷しいといふ程ではないのだが、自分の長い記者生活中で、こゝに過した二年間は比較的悪い思出を持つてゐなかつたのが一つ。二つには、まるで見ず知らずの土地よりは、多少馴染の土地の方に心を引かれるといふ、誰にもある風情から、何氣なく自分はそこに足を向けたのである。

だが、汽車が松本に着くと共に、自分は何だか餘り知つた人の多い土地を、この久し振りの旅の振り出し地に選んだ事が後悔され始めた。その近邊(あたり)の見るべき舊跡や名所は、大抵知り盡してゐる自分だ。何の爲にわざわざこんな田舍に寄道する氣になつたかと、自分ながら腹立たしくなつて來た。自分は出來るものなら引返して、直ぐ名古屋に行かうと思つた。が、その日の中に都合のよい汽車がなかつたので、止むを得ず一晩だけ其處に泊つて行く事にした。

と、自分が乘りつけた旅館の、自分の室の受持の女中と顏を見合した時、早速、

「おや、あなたは？……まあ、お珍しい」

「や、君は……」

と云ふ挨拶を交はさねばならなかつた。その女中はお鶴といつて、以前自分がこの町にゐた頃によく行つた事のある、料理屋の女中なのである、晩食の給仕に來た時、お鶴は

「岩井さんはどうしてゐらつしやいます？　お遇ひになつて？」

と訊いた。

「いゝや、一二度年賀狀の遣り取りをした位で、一寸も遇はないよ」

「ぢやあ、あの方にも？　ほら、あの岩井さんとよく御一所にいらしつた、あの子爵夫人とか云ふ方にも？」

「うむ、遇はないよ」

その翌日、自分が名古屋に向ふべく、松本の停車場の一二等待合室の一隅に腰かけてゐると、發車の丁度五分前頃に、慌しく驅け込んで來た一人の洋服姿の男があつた。自分が彼を認め、彼が自分を認めたのは同時であつた。

「やあ！」

「やあ！」

と云つて、双方で近附いて行つた。

「いつ此地(こちら)へ？」と彼は訊いた。

「昨日。」

「これから何方(どちら)へ？」と彼は訊いた。

「名古屋へ」と自分は答へた。

「ぢや、一所に……私は木曾まで行きますから」

この男は、自分が以前こゝで勤めてゐたＳ――新聞社での同僚なのである。一寸泊りに寄つただけの時間に、自分は昨夜と云ひ、今と云ひ、二人迄も知つた人に遇つた譯だ。これだから、馴染の田舍町などへ來るんぢやあなかつたと、自分は心の

中で思つた。

「岩井君はどうしてるでせう?」と汽車に乘つてから、昔の同僚は自分に昨夜の旅館の女中と同じ質問をした。

「僕も一寸も消息を知らないよ。さう云へば、田丸女史はどうしてるかな? もう目白にも居ないと云ふ事だが……」

「あの子爵夫人ですか?——田丸繁子さん——あの人は今名古屋にゐるさうですよ」と相手は答へた。「あそこに森山男爵の經營してゐる、有名な××孤兒院つて云ふのがあるでせう。そこにゐるさうですよ。名古屋にお出でになるなら、是非尋ねて御覽になつてはどうです?」

——自分が旅の振り出しに、偶然松本に寄つて、偶然顏を合はした舊知の、二人が二人とも口から出た、岩井某と、子爵夫人或は田丸繁子といふ名前。そこで自分の旅の振り出しが、偶然にこの物語の振り出しとなるのである。卽ちこの二人の名前がこの物語の主人公である。

一

數年前の事である。自分は信州松本のS——新聞に編輯主任として入社した。岩井佐介はその時の編輯部の記者で、謂はゞ自分の下役なのであつた。もつとも彼の方が自分よりも社內としては古參であつた。それに彼と自分とは同い年でもあつた。さういふ關係から、自分は入社すると間もなく、社內の誰よりも彼と最も親密になつた。

岩井は社內で有名な無口な男であつた。社外でも大抵の場合無口な方であつたが、唯時々自分と二人きりで職業以外の、例へば文學とか、藝術などの話をする時、どうかするとひどく興奮して、雄辯になる事はあつた。顏色のどちらかと云ふと蒼白い、快活と云ふよりは沈鬱な表情をした男で、おしやれではなかつたが、取繕ろはない中に、何處か詩人らしい風丰をしてゐた。

信州と云ふ國は人も知る如く、文學の大變盛んな國で、S——新聞でも、田舍新聞ではあるが、その幾段かを占めてゐる文學欄は、一部の讀者に隨分歡迎されてゐた。自分がこの編輯部主任の椅子に着く前からの習慣通り、その文藝欄の方はすべて岩井の擔任であつた。彼は並々ならぬ熱心さで編輯の餘暇を以つて、その欄の爲に骨折つてゐた。彼は每日そこに自作の短歌などを載せてゐた。そして自分などにも時々歌を作らないかと勸めた。歌は終に作らなかつたが、彼の勸誘の熱心にほだされて、後には時々自分も小品文などを作つて載せたものである。

彼はこの沈鬱な表情にも拘らず、何處かに大變若々しさを持つてゐた。さう云ふ性質の人にあり勝な、世間馴れない、初々しい所が自分を引きつけたのでもある。彼は何でもない事にでも直ぐ顏を赤くする癖があつた。自分は自分自身から推して、彼も無論獨身者であると、さう長い間思ひ込んでゐた。

自分と知合になつてから二三ケ月後には、彼は社が退けてから、屢々自分の下宿に遊びに來る樣になつた。が、自分の方からは一度も彼を尋ねた事がなかつた。彼も決して彼の家には來いとは云つた事がない樣に記憶してゐる。その癖、二人で町を散歩して別れる時に、彼は「僕の家は直ぐこの横町なんです」と云つた事などもあつた。さう云へば、よく二人で例のお鶴のゐる料理屋へ、飲めない酒を飲みに行つたのもその頃だつた。

が、或日到頭自分は彼の家を訪問しなければならぬ事になつた。何でも至急を要する社の用事か何かだつた。どういふ用事だつたか忘れたが、その時自分は始めて自宅に於ける彼を見たわけだ。多分それは自分がS——社に這入つてから六ケ月位後だつたかと思ふ。自分も彼同樣無口な方だつたから、彼に就て外の同僚達から何も聞く機會を持たなかつたからでもあるが、その時始めて自分は彼に妻もあり、二人も子供迄ある事を知つたのだ。

それは夕飯後の取散らした中だつたからでもあらうが、二間か三間しかない狹い家の中で、彼と比べると可成り醜い彼の妻君と、又彼の平常の服裝に比べると、彼自身も妻君も二人の子供も、隨分みぢめな風をしてゐるのを見出した時、自分は何とも云へない氣の毒な感に打たれた。彼は又それが大變惡い事でもある樣に、顏を赤めて、ひどく恐縮らしく自分をもてなした。いつも彼と話すと、長くなる癖の自分も、その日はそこ〳〵にして辭して歸つた事を覺えてゐる。

翌日、彼と社で遇つた時にも、彼はまだ恥しさうな顏をしてゐた。その夜、いつもの樣に社の歸りに彼は自分の下宿に遊びに來た。而して色々と雜談の末に、始めて彼は幾度も顏を赤めながら、やつとの事で話した所に依ると、以前彼が下宿をしてゐた時分に、その下宿の女中だつた女が今の彼の妻君である事、二人の間にいつの間にか二人の子まで出來て、今ではどうしようもない事、從つてこの世で彼にとつて家庭ほど慘めなものはない事。さう云ふ事を彼獨特の雄辯で話した。

それから自分達は二人で長い間夜の町を散歩した。彼は道々さう云ふ家庭にてなかつたら、今頃はどんなに貧乏を忍んでも、

東京に出て文學をやつてゐるのだがと云ふ樣な事を云つた。さう云ひながら、彼は泣いてゐるのではないかとさへ思はれた。その時から自分は彼と一層親密になつたのである。

二

自分が松本に來てから、一年程たつてからの事である。自分等のS──新聞社に東京から一人の婦人記者が來る事になつた。女氣のない社内ではその婦人の來る數日前から、その話で持ち切りであつた。自分も内々どんな女だらう位ゐの好奇心を抱いてゐたのは事實である。だが、外の騷々しい記者連中の如何にも卑しい好奇心に動かされた調子で話してゐるのを耳にすると、自分は到底その仲間に這入つて一所に騷ぐ氣になれなかつた。岩井も自分と同じ心らしかつた。だが、二人で社が退けて歸る道などで、二人は矢張りその婦人に就ての話にいつの間にか這入つてゐるのを見出した。

人々の噂では、その婦人記者は何でも華族女學校出で、一度嫁づいたが、夫に死に別れてから女子大學に這入つて、そこを卒業後そこの寮舍の寮監をしてゐたとか、そこで教鞭を取つてゐたとか云ふ事であつた。何故そんな立派な經歷の人がこんな田舍新聞の記者になつて來るかといふ事は、誰の疑問にも上らなかつた。又その婦人に就て誰云ふとなく、その婦人が華族女學校を出て嫁いた先は、子爵家だと云ふ事であつた。即ち彼女は今でも子爵未亡人だと云ふのだ。

かと思ふと、「いや、それは華族女學校の出身といふ事から憶測された虛構ぢやないか」と反對する者もあつた。何にしても、さういふ婦人が微々たる田舍新聞の記者となつて來ると云ふ事だけで、人々の驚嘆に値したのは確かだつた。無論、彼女は「端然とした、貴族らしい美人だよ」と、見て來た樣に云ふ者がある一方には、「いや、貴族には違ひないが、餘り縹緻が惡いので、さう云ふ境遇に陷ちたんだ」と、誠しやかに語る者もあつた。

が、愈よ彼女が松本に來て、S──新聞社の編輯室に姿を現はすと共に、彼女は更に一層人々の注目の中心になつた。彼女は名を田丸繁子と云つた。前に人々の噂がなくても、さうかと點頭かれる程、端然とした貴族的な容貌の持主であつた。背のすらりとした、色の白い、眉と眉、眉と眼との間の離れた、鼻筋の通つた、一々の特長を上げると、悉く美人の資格になる樣な、さう云ふ種類の美人であつた。謂はば愛嬌の薄い、近寄り難い感じのすると云ふ型(タイプ)の婦人である。

云ふ迄もなく、彼女の出現は獨りS——新聞社の社内だけではなく、狹い松本市中の注目となつた。彼女がその職掌柄訪問したり、出入りしたりする愛國婦人會員や、赤十字社員や、松本聯隊將校婦人會員などの、數多の婦人達の間でも、一頻り問題の女となつた。それ等の暇な婦人達の間には、新聞社内でよりも一層彼女は色々と取沙汰されたに違ひない。或る者は多少の嫉妬を以て彼女を見たであらう。而して「貴族出の人が、どうして新聞記者になどなるものか」と歯をむいて云ふ。が、又一見したよりも話して見ると、割合に愛嬌があつて、禮儀正しい彼女に感心して、確かに華族女學校位ゐは出た人に違ひない。何か深い理由があつて、斯う云ふ田舍に來たのだらうと、同情を以て見る者もある。

　それ等は兎に角として、彼女の入社以來、S——新聞に「かもめ」と云ふ署名の下に、毎日現はれる家庭記事や、婦人に關した社會問題の研究が、知識階級の婦人達に、大變歡迎されたのは事實であつた。

　然し乍ら、私の見る所では、彼女はそれ程人々の噂の的になり、又彼女の書く記事が人々に持てはやされてゐながら、彼女には女に有勝な誇らしい氣振りが少しもないのみか、却つてそれとは全く反對な、何物にも紛らす事の出來ない、或る悲しさを懷いてゐる樣に見えた。物を云ひかけても、一二分間返事がなくて、聞えないのかと思つてゐると、暫らくしてから突然その答へをしたりする事が珍らしくなかつた。そんな風だから、口數の少ないのは云ふ迄もない。それでゐて、何處かに不思議な愛嬌を持つてゐたには違ひなかつた。その證據に、權威振つてゐる樣だが、誰も彼女が威張つてゐるから好かないと云ふ者はなかつた。一口に云ふと、愛されると云ふよりは、寧ろ尊敬されると云ふ種類の婦人だが、それと共に確かに女らしい優しさをも充分に具へてゐた。

三

　彼女にとつてはどんなにか孤獨であつたに違ひない。社内を見渡したところ、何を云ふにも田舍新聞の事だ。軟派硬派を合して十人餘りの記者の中で、彼女がこれはと思ふ樣な人は一人もゐなかつたであらう。村役場の書記を十年餘もしてから、その後縁あつてS——社に入社して、今ではそこで二十年間勤續といふ名の下に、甘んじて退屈な一生を送つてゐる、眞山と云ふ六十歲の老人がある。かと思ふと、田舍の中學を出たばかり

で、傍ら東京の文章雜誌に投書などをしてゐると云ふ氣障な文學青年。(これが始めに話した自分が今度の旅の振り出しに停車場で遇つた男である。)さては明けても暮れても、やれ政友會がどうしたの、憲政會がどうしたのと、腕まくりをして騒いでゐる政治記者。……

さう云ふ中で、自分は東京の者だと云ふのと、餘り外廻りなどをしない、編輯主任と云ふ比較的下品でない役目なのとに、多少彼女の敬意に値したのだらう。中で、比較的彼女と親しく交際した一人であつた。

自分に接近する事は又同時に彼、岩井佐介に接近する事になつた。自分は既に三十歳で、それに年よりもずつと老けて見える方で、獨身ではあつたが、彼女が交際しても他所目から見て、危つ氣がなく見えたに違ひない。少なくとも、却つて妻や子はあるが、年の若い美男の岩井と直接交際するよりは、人の注意を引かなかつたのは確かだ。殊に彼女も亦以前の自分と同じく、岩井には妻子があるとは知らなかつたであらうから。

だから、無論、同じ社に勤めてゐるのだから、岩井と田丸女史とは一通り相識の仲ではあるが、本當に友達になつたのは自分を通じてであつた。彼女も歌を作つた。だから、岩井にとつては、彼の愛する文藝欄が賑かになつて來たと云ふだけでも、嬉しかつたに違ひない。彼等はよく自分の下宿で落合つた。今から思へば、落合ふ樣に自分をだしにして訪問して來たのかも知れない。その時分、田丸女史は自分の下宿の直ぐ近くの、或る素人家に間借りしてゐた。

或る時、彼女は自分に「何處かもう少し靜かな所へ引越したいのですが、お心當りはございませんでせうか?」と聞いた。だが、自分はこの町の樣子には充分通じてゐない者だから、それを岩井に相談した。すると岩井はそれから二三日後、彼の友達で、寺の住職をしてゐる者がある。その寺の一室を貸してくれるさうだからとの返事を持つて來た。彼女は早速其處へ引越して行く事になつた。今から思へば、それも屹度彼等の豫定の行動であつたかも知れなかつた。

彼女の引越して行つた寺は青蓮寺と云つた。彼女が青蓮寺に行つてからは、自分を訪れて來る事が稀になつたばかりでなく、岩井も滅多に顏を見せなくなつた。或る晩、自分が散歩のついでにふと彼女を訪問して見る氣になつて、青蓮寺に行くと、「どうぞお上り下さい」と云ふ彼女の態度が、變にそは〳〵してゐた。岩井が來てゐたのだつた。「よくいらつしやいました。

岩井さんが來ていらつしやいます」と云へば自然であるのに、彼女は妙に取亂してゐた。岩井も自分の顏を見ると、彼の癖だが、赤くなつて挨拶した。自分はその時始めて變だなとはつきり思つた。

　間もなく岩井とかもめ女史との事がぽつぽつと社内の人々の口の端に上り出した。或る晩、自分は久し振りで岩井の訪問を受けた。長い間、二人で取止めのない雜談をしてゐたが、岩井が何となく云ひたい事が云へないと云ふ風で、もぢ〳〵してゐるのに自分は氣が付いた。彼はそんな風で十二時近くまで坐り込んでゐた。が、到頭彼はその晩かもめ女史との戀を自分にうち明けたのである。

　自分は聞かなくても略察してはゐたが、さうしてはつきりと當時者の口から聞かされると、改めて輕い驚きに打たれない譯に行かなかつた。自分はやがてこんな事を訊いた。

「それにしても君に妻子がある事をあの人は何と思つてるんでせう？」

「あの、その事はまだ私の口から何にも話してないんですが……」と岩井は答へた。

「ぢやあ、まだ知らないんですか？」

「えゝ、多分……」

「それは……」と自分は云ひかけて止めた。「それは餘りひどい」と云はうと思つたのだ。然し考へ直して見ると、誰だつて十人の八人迄は、岩井の位置に立つたら、多少妻子のある事を隱す氣にもならうし、又始めからそんな事を打ち明けて、甘い戀に水をさす樣な事はしないものだ。賞めた話ではないが、それも仕樣のない事だ。惡意ではなく、氣の弱さからの事だ。その代り、その事だけで、神樣の罰として、最も苦しむ者はその男自身に違ひない。斯う思つて、自分はそれ以上突込んで訊かなかつた。

　それから、彼は時々自分を訪問して。彼等の戀を、（主として戀の苦しみを）訴へた。無論間もなく彼に妻子のある事を彼女も知つたのだ。それと共に彼女の過去の經歷を彼は知つた。

　彼女の過去。それは或日岩井の口を通して自分は聞いたのであるが、驚くべき變化を極めたものであつた。

四

　彼女、田丸繁子は福島縣田丸郡の××寺に生れた。××寺は由緒の深い門閥の寺であつた。が、新時代の娘を養育するには、

寺より里へ、里より都へと云ふのが彼女の父の考へであつた。だから彼女は幼い時に東京に送られて、目白の女子大學附屬の幼稚園、それから小學校の課程を了へると、再び女子大學の附屬高等女學校と云つた風に、少女時代の大部分を東京目白の寮舍に過した。彼女の少女時代は幸福であつた。のみならず、その幸福は果なく續くかとさへ思はれた。

十八歳で女學校を卒業した彼女は、卒業と共に、一つには舊藩の關係と、二つには云ふ迄もなくその才色兼備の器量を望まれて、芝區田丸町の田丸子爵家に嫁した。先に自分が屢々彼女のことを「子爵夫人」と書いたのは僞ではなかつたのである。幸福な少女時代。次には子爵夫人。彼女が同窓の人々の羨望の的になつたのも無理ではない。

然し乍ら、彼女の榮華の夢はその醒め際が餘りに早かつた。彼女は嫁いて一年餘を經ない中に、その夫子爵と死に別れたのであつた。夫の死と共に、彼女の周圍は忽ち今迄の榮華と幸福に變るに、寂寥と孤獨の住居となつた。若い子爵未亡人は涙と共に北の國なる實家に歸つた。實家とは云ひながら、少女時代を殆ど他所で過した彼女には、少しも我家に歸つた樣な氣がしなかつた。がらんとした廣い本堂の、何十年何百年前からあるとも知れぬ古い佛像の前に、手を合して祈るには彼女は餘りに若かつた。二十歳の彼女には前途に迎へるべき多數の春秋がなければならない。

新しい緣談の申込も少なくはなかつた。けれども、それはもう決して子爵でも男爵でもない、第一の結婚を考へると、彼女には恐く物足りなかつたに違ひなかつた。まして草深い田舍に埋もれて了ふには尙忍びなかつたであらう。その頃の事である。社會の一方に婦人獨立の聲が聞え初めたのは、そして彼女はそこに遙かな未來の道を行からうと決心したのであつた。後にして思へば、それが彼女の人生の行路の第二の間違だつたのだ。が、その時はそれが彼女にとつて唯一の輝いた希望だつた。彼女は上京した。而して母校の大學部に入學した。

女子大學の家政科に入學した若き子爵未亡人は、始めの一年二年は夢中で與へられた學科を悉く勉强した。だが、いつとなく彼女はそれが彼女の未來の生活に對して、どれ程の價値のあるものかに思ひ及ばない譯には行かなかつた。それは一つの學問とするには餘りに漠然としたものであつた。と云つて、それを實際に當嵌める樣な、大きな一家の主婦になると云ふ事は？さう云ふ事が再び彼女にあるだらうか？　若しあるにしても

——と彼女は考へた。今や彼女の目指す方向は家庭ではない。若くて浪漫的だつた彼女は夢の様に婦人の獨立と云ふ思想に燃えてゐた。三越や帝劇の代りに、學問——輝いた名聲と云ふ虚榮が彼女の心を占めてゐた。

田丸家を去る時、彼女はその生涯を保證するだけの資産を與へられてゐた。從つて彼女は普通の婦人の獨立を口にする女達と違つて、所謂生活と云ふことを考へる必要がなかつた。だから、家政學を治めても、家政學科の教員の免狀を授けられても、それを生活の爲にする必要がなかつた。そこで彼女が學校で習ふてゐる數多の科目の中で、特に力を入れて學究的に研究しようと選ばれたものは、生理學と衛生學とであつた。そんな譯で始めはこれと云ふ程の動機も理由もなかつたのだが、いつとなくやつてゐる中に興味を覺えて來て、彼女は段々とそれ等の學科に熱中し沒頭する様になつた。

その頃、今もさうであるが、目白で衛生學の講座を擔任してゐたのは三並醫學博士で、生理學は太田博士であつた。繁子はこの兩博士の下で勉强したのである。秀才であつた彼女は特に兩博士から愛された。彼女も亦その治める學問と共に、兩博士に私淑した。彼女は卒業してからも、兩博士の助手として、母校に止まる事になつた。彼女の熱心が益々厚くなつたのは云ふ迄もない。彼女は心窃かに行く行くは洋行しようとさへ決心した。而してその事をそれとなく兩博士に洩らしさへした。さういふ異常な熱心は、彼女と兩博士とを益々近づけて、學校の教室のみならず、後には屢々兩博士の私邸にも彼女は出入する様になつた。

五

三並博士も太田博士も共に帝國醫科大學の教授であつた。醫科大學にも學生は多いが。特に生理や衛生の研究に專心して、繁子の様に講堂以外に教授の私邸に伺候する者は稀でなければならない。多くは卒業後、或は軍醫となり、開業醫となり、或は病院附となつて、實際に働かうとする人々の中に、當時醫科大學の三年生に仲井進と云ふ秀才があつた。彼は實際的な方面よりも、學者として世に立たうとする希望を以つてゐた。その研究科目は生理衛生であつた。從つて彼はこの兩博士に特に親しくしてゐた。

自然、兩博士の私邸で繁子は始終彼と顔を合した譯であつた。尤も、男女の別こそあれ、彼等は共に同じ師を師とし、同じ

學問を學問する點に於て一致してゐた。彼等が知己となつたのは怪しむに足らないのである。

だが、それがやがて知己以上の關係にまで進んだのである。

——それに就いて人は色々に云ふ。「進は決して繁子を戀したのではない。當時既に將來の洋行費に就いて頭を惱ましてゐた彼は、繁子の財産に目をくれたのだ、斯う後の彼等の戀の結果から推して云ふ者もある。「否、彼が今日の著書『人性論』や『文藝と科學の間』などを見ても分る通り、彼はその專門の學問にも拘らず、一方に深く文藝を愛する士である。明哲な理智と共に優美な感情の持主である。まして長い間色氣のない學問と學生生活の間に育つて來たのだ。若き美しき、而も同じ趣味に生きる子爵未亡人に戀しない理由があらうか？」斯う或る者は云ふ。

目白の鬼子母神の境内に「つばめ」と云ふ貸席を兼ねた小料理屋がある。丁度東京市内からの散歩に程よき場所であるのと、名物の燒鳥とに散歩好きな青年間に知られてゐる。と云つても、月に一度の祭日とか春秋の日曜の外には、さう千客萬來と云ふ程の繁昌な家ではない。殊に夜などは附近の若者連が尺八などを吹きながら、通り掛りに立寄るか、稀に酒を飲みに來るか位ゐで、普段は寂しい程閑靜な所だ。或日進と繁子とは此邊を散歩して此家に立ち寄つたのが始まりで、そこがその後の彼等のあひびきの場所と定められた。たとひ助手をしてゐるとは云ひながら、男禁制の寮舍に度々男が訪れる事は憚られるので、さう云ふあひびきの自由な場所を得たと云ふ事は、その後の二人の出逢ひの數を一層多くしたのは事實であつた。

彼等はその中に其家の女主人とも懇意になると共に、益々そこの敷居が越えよくなつたので、終には毎土曜の晩から日曜にかけて、必ずそこの離座敷に姿を見せる樣にさへなつた。

女性なる繁子が、夫子爵に死別れて、一旦實家に歸つて、再び上京した時の晴々しい希望と決心とを、一朝にして戀人の爲に捨てて了つたと云つて、何も批難される事はない。何故なら女はその全身の血を上げてそそぐべきものは、學問にであらうか、戀にであるべきだらうか？　それと共に、進が一方に繁子の熱い戀を受けながら、常に他方に戀よりも學問を忘れなかつたと云つて、責めらるべきものだらうか？　男子の生命は戀かそれとも他のものか？

二人が浮世離れた目白の奧の料亭に、土曜日毎に交した睦言がどんなことであつたか、自分は知る由もない。兎に角、そこで繁子は男との戀のために已れの洋行の計畫を思ひ止り、その

代り進が繁子からの仕送りを受けて、卒業後獨逸に留學する事に話が定つたのは確かだらう。その洋行費は全部ではなかつたにせよ、その大部分が彼女からであると云ふ噂は嘘ではない。

繁子は彼の洋行後も、今迄通り母校で生理學と衛生學の講座に立つて、敬愛する恩師の下に助手として勵んでゐた。思へば兩博士は彼女の學問の師であると共に、識らず知らずの中に戀の仲介者ともなつた譯だ。彼女の姿は昔のまゝであつたが、心は昔のまゝではなかつた。今や、彼女の學問は未來の夫たるべき人と同じものだといふ事と、その夫が歸朝迄の暇つぶしだと云ふ事とに過ぎなかつた。彼女の學問は彼女の想夫戀の山に過ぎなかつた、

六

やがて三年の月日が經つたのであつた。

彼女にとつて何と長い三年の月日であつたらう？ けれども待ち甲斐あつて、進は恙なくその專門の學問を了つて歸つて來た。彼の專攻する學問は前にも述べた衛生學と云ふ、日本には當時まだ類の少ない學課であつたので、更でも彼は新歸朝者新智識者として歡迎された。三年前の一無名醫學士は忽ちにして學界の若い明星と仰がるゝに至つた。繁子の喜びは云ふまでもなかつた。

ところが進が學者としての地位が日に增し社會的に認められて來るに連れて、彼の繁子に對する態度が段々と冷淡になつて行つた。けれども繁子は彼を信じ切つてゐた。無理はない。彼女はその愛する學問さへ捨てゝ、それのみかその全生涯を保證する、田丸子爵家から與へられた財產の大部分をも彼の爲に貢いだのだ。彼の今日の榮達は半以上を彼女は負うてゐると云つても、決して過言ではない。どうして彼女は彼を信じないでゐられよう？ 時として彼の冷淡さが、信じ切つてゐる彼女にも氣付く樣な事もありはしたが、彼女は努めてそれを打消さうとした。彼女は默つた未來の幸福の日を待つてゐた。

その中に段々進は明ら樣に繁子と逢ふ事を避ける樣にさへなつた。彼はそれを或は研究にかこつけ、或は學者間の交際を口實にした。彼女はそれをも信じて、何事も彼が出世の階段と考へて忍んでゐた。且つ愼み深い彼女はその愼みと恥しさとの爲に、心の底を打け明け兼ねて、斯くて半年の月日の空しく逝くのを見送つたのであつた。

月日は空しく過ぎ行く。が、進は忘れたかの樣に嘗ての彼女

との約束に就ては一言も口にしなかつた。さすがの繁子も今は堪り兼ねて或る土曜日の夜、例の鬼子母神の「つばめ」の離座敷で、波打つ胸を抑えながら、結婚の話を切り出した。それに對する進の答は、長い間抑えてゐた彼女の胸の疑を充分確にした。彼は諾（イエス）とも否（ノー）とも答へなかつたのだ。

　その夜から彼女ははつきりと進の心を疑ひ始めた。もう今迄の様に我と我心の疑ひを抑える事が出來なくなつた。併し、それが遂に彼等の別れにならうとは誰が知らう？　が、事實はさうなのであつた。彼女からの幾度の手紙にも進は一度も返事をしなかつた。そして二ケ月が過ぎた。昨日のやうに又一ケ月前の様に、三年前の様に、彼女は助手として母校の教室にその姿を見せた。が、彼女の結ぼほれた思ひは人目にもつく程、その擧動に現れた。彼女は出來るだけの力を以て忍び且つ忍んだ。それには弱い女の心として、まだしも頼み難ない頼みに細い希望を托してもゐたのだ。

　斯くて戀ひに暮れ戀ひに明けた或る朝、繁子は何氣なく披いた新聞の記事を見た時、辛うじてその身の倒れる事を避け得た程の驚きに出遭つた。進の結婚を報ずる記事が新夫婦の寫眞と共に掲載されてゐたのである。而もその新婦は？　それは彼女のクラスメートの畠山春子と云ふ、在學中は二人の才媛として、二人の美人として、並び稱された間柄の親友なのであつた。繁子は色を失つて、新聞の手から滑り落ちるのさへ知らなかつた。

　その翌朝、彼女は一封の辭職屆を淺田學監の手元に途中から郵送して、その愛する母校から忽然と姿を消したのである。

　――以上が彼女の松本に現れる迄の過去の略歴なのである。「何と云ふ薄命な女であらう？」自分はこの話を岩井の口から聞いた時思はない譯には行かなかつた。何故と云つて、今彼女はさうした深い失戀の經驗の後、再度の戀を得は得たとは云へ、その相手の岩井は妻子のある男である。されば彼女の戀はいつまで幸福に續く戀であらう？

七

　一時の出來心から一所になつた妻と、二人の子との犠牲になつてゐる岩井。一度夫に別れ、次に得た愛人に捨てられた繁子。さうした二人の前途に何の光明を望み得よう？　例へばそれは人生の行路に早くも傷つき疲れた二人の旅人が、計らずもその旅の宿に一夜を同病相憐れむの情に慰め合つたと云ふ程の

喜びに過ぎない。明日は再び西と東に別れるべきが與へられた二人の運命ではなからうか？

　彼等は醒め易き夢の過ぎるのを恐るゝが如く、貪る樣に甘き日を樂しんだ。彼女の他の半分を形造る、文學の木が花開いたのはその頃である。思ふに半夜夢さめて、子爵夫人のその昔や、若き醫學士との歡樂の日や、さては愛人に見捨てられた果敢なき歎きの時や——僅か數年の間に變轉として彼女に現はれた喜びと悲しみの繪卷が彼女の心の鏡に映る時、昔を思ひ今を省みて、そこに彼女の數々の悲歌が出來たのであらう。それが彼女の新しき愛人岩井の悲戀の歌と共にＳ——新聞の文藝欄を賑はした。彼等は兎も角幸福であつた。

　彼女が岩井の周旋に依つて借りてゐた寺の一室、その持主なる寺の住職は岩井との歌の友達であつた。歌を解する住職は彼等の間の戀を理解した、だから彼等は其處で甘い囁きを交すのに遠慮がいらなかつた。當時自分も時々招かれてその寺を訪れたものだつた。いつの間にか彼等は自分の前でも晴れた夫婦の樣に振舞ふ樣になつた。その頃の事である。この物語の始めに話した、自分が今度の旅の旅館で遇つたお鶴といふ女中のゐた料理屋に、三人でよく飲食に行つたりしたのは。

けれどもさう云ふ二人の關係が、いつ迄も人に知れずにゐる筈がなかつた。いつとなく社内で誰一人知らぬ者はなくなつた。遂には閑散な松本の市中に迄、それが段々と廣まつて行つた。噂は決してよくは云はれなかつた。妻子のあるのに浮氣する男。妻子のある男に身をまかす女。果はそれ等の香ばしからぬ噂が、あるかなしかの微かなＳ——社の威信にさへ影響するやうになつた。遂に公然と二人を排斥する火の手が、永年Ｓ——社で校正をしてゐる或る老漢學者に依つて擧げられた。二人は遂に辭表を出さねばならなくなつた。

　岩井は仕樣がないので妻子を連れて一先づ盛岡に歸る事になつた。その妻子の手前、彼女は彼と同伴するは愚か、心ゆくばかり名殘りを惜む事さへ出來なかつた。さう云ふ二人が果敢ない別れをしたのは自分の下宿であつた。彼女の住んでゐた寺の住職は、この不始末を知らない筈がない。それを知りながら許したと云ふのでひどく町の人々に攻撃された。岩井が故郷に發つた翌々日、果敢ない戀の追憶を又一つ抱いて、彼女は獨り寂しく東京へ歸つて行つた。その時停車場に送つて行つたのは自分と、かの寺の住職とだけであつた。

　自分も彼等が退社してから、一ケ月程後に退社した。一つは自

分も多少彼等の關係に責任がある樣な氣がされて居難くなつたのと、その矢先に東京の某新聞に口があるからと云ふ或人の勸めに應じたのである。

八

自分がその後の彼等の消息を少しも知らなかつたのは始めに書いた通りである。のみならず蒼忙な自分の生活は、いつとなく彼等に就いての記憶さへ微かにしてしまつた。而して今偶然な旅の途中に、偶然な思ひつきで立ち寄つた松本の町で、久し振りで人の口から彼等に就いて聞いたのだ。尤も自分とても、時々彼等を思ひ出す事はあつたが、思ひ出しても東京ではそれに就て人と話す機會がない。併し今旅の途中、松本に寄らうと思ひついた汽車の中では、無論彼等の記憶を思ひ浮べてゐたのだつた。

元より用事のない旅であつたから、自分は名古屋に着くと共に、その翌日、かのS——新聞の記者に聞いた、森山男爵の經營してゐる××孤兒院と云ふのを早速尋ねて見た。

××孤兒院は音に聞えた有數の孤兒院だけあつて、その敷地の廣さや設備の完全さは、門外漢の自分をも驚かすに充分であつた。自分は門から續いてゐる新綠の並木道を通つて、玄關に立つて刺を通じた。自分はやがて小ざつぱりした應接間に通された。其處の窓からは廣い運動場が一目に見渡された。初夏の日光が窓の外に並んでゐる樹木の青葉を通じて、室內にちらちらと洩れて來るのが眩しかつた。

そこに現れた繁子は、自分の姿を見ると、案外狼狽する風もなく、落着いて挨拶した。別れてからさう長い年月が經つた譯ではないが、明らかに彼女はその年月の二倍は年をとつた樣に見えた。けれども昔の美しさは決して失はれてはゐなかつた。

彼女は窓に射し込む木洩れ日を避ける爲に、或は室の明るさを避ける爲に、窓のカーテンを引いて、淑やかに席に戻つた。自分はそこで彼女の口から靜かに物語られる、その後の彼女の生活を聞いたのであつた。

——彼女は再度の苦い失戀の胸を抱いて、東京に歸ると再び目白なる母校の門をくゞつたのであつた。彼女には實家よりも目白の寮舍の方が懷しい故鄕の樣な氣がしたのであらう。彼女に取つて、その生れた家は、其處に住んでゐた年月から云つても、目白の寮舍の三分の一、四分の一にも當らなかつた。それに寺であるその家に歸る事は、松本での生活を思ひ起して、彼

女には堪えられなかつたのであらう。

溫良な淺田學監は旅から歸つて來た子を迎へる樣に彼女を迎へた。彼女はもう昔の樣にそこで學問に沒頭する氣にもならなかつた。彼女は淺田學監の好意で××寮の寮監になる事になつた。それは校庭の櫻も旣に散り果てて、やがて杜鵑の聲も聞かれやうと云ふ新綠の頃であつた。

彼女の外には尙十數人の古參の學監がゐた。それ等の人々の中にあつて、彼女は當時漸く二十五歲の春を迎へたばかりではあつたが、質素な扮裝と、悲戀の離みと、生れ附きの氣品とで、その年よりも老けては見えたが、却つてそれが寮監としての落着を現してゐた。それに彼女の縹緻の美しさ、樣子の優しさなどが、外の數多の寮監の人々に越えて、人目を引いたに違ひなかつた。

花が咲き、鳥が歌つても、こゝの寮監達には決して人世の春は訪れなかつた。彼等は一寮の女生徒達の監督と云ふ役目の爲に、女流教育家と云ふ名の爲に、花と共に笑ひ小鳥と共に歌ふ事を許されなかつた。人として、女としての諸々の感情を彼女等は强ひても抑えなければならなかつた。さうして彼女等は各々自らを僞る事にいつとなく馴れてゐた。だから彼女等は妙に陰欝で生氣を缺いてゐた。

さう云ふ人々の中にあつて、絮子はその美貌からばかりではなく、勝れて異彩を放つてゐた。何故なら、彼女はその落着いた樣子にも拘らず、何處となく小娘の樣に始終そはそはしてゐた。急に陰氣になる事はあつても、その底には何となく浮々した調子があるのが現れないではゐなかつた。が、幸か不幸か、戀を知らない他の寮監達は、彼女のさう云ふ樣子に唯眼を見張るばかりで、何の故とも解する事が出來なかつた。

毎日、彼女は桃風會の一日の勤めを了へて、已が受持の寮舍の生徒達と共に食堂で夕食を濟すと、いそ〳〵として自分の部屋に歸つて行く。八疊の間の片隅に置かれた彼女の机の上には、いつも其處に判で押した樣に郵送された新聞が帶封のまゝ置かれてあつた。彼女は机の前に坐る間ももどかしげにそれを取り上げて、先づその帶封の文字に眺め入る、微笑む。而して靜かに文字の上を破らない樣に封を切つて、それを接吻して机の引出しに納めてから、嬉しいものを見る樣に新聞を開くのが常であつた。

「岩手新聞」と云ふのがその名である。說明する迄もなくそれは彼女の戀人の故鄕の新聞で、彼は今そこでその新聞の記者を

してゐるのだ。而して彼の手で毎日それが彼女に送られるのである。それの文藝欄には曾ての日松本のS——新聞での様に、彼、岩井と彼女との歌が載せられてゐた。今は誰を憚る者があらう？ 彼女は心ゆくばかり熱い戀の思を歌にした。それがそこに彼女の戀人の懐しい戀の歌と共に載せられあるのだつた。

心ゆくばかりその新聞を見終ると、彼女はそれを丁寧に疊んで傍の本箱の引出しに収める。その時必ずこれも毎日の規則の様にその引出しの奥から一冊の小形の書物を取り出す。それは「さすらひ」と云ふ歌集である。岩井佐介と田丸繁子とがその著者である。彼女は斯うして毎日の宵々をその愛人との共著の戀の歌集を人知れず繙いては、夢の様な喜びに醉ふのだつた。まるで十七八の乙女の様に。

歌集「さすらひ」は岩井がS——新聞で彼女と共に發表した歌を集めて、歸國後出版したものであつた。恐らく岩井も毎日の夜々を飽く事なく、「さすらひ」を開いては讀み、閉ぢては思ひしてゐる事であらう。妻子のある彼にしてさうだとすれば、まして獨り身の彼女はその倍も三倍も、宵々を「さすらひ」一卷を抱いては讀み且つ思ふ事であつたらう。それが彼女には無上の幸福に違ひなかつた。

さうして又半年の月日が流れる。

九

「ところがその岩手新聞が突然來なくなりましたんです」と××孤兒院の應接室で繁子は靜かな話をつゞけた。

「それから三日目でしたかの夕方、取次の番の生徒が東京のY——新聞の肩書のある、知らない人の名刺を持つて、この方がお目に掛りたいと云つて居られますと云ふんでせう。はツと思ひましたが、さあらぬ體で應接室にお通し申す様にと云ひつけて急いで行つて見ますと、案の定それが岩井でしたの。」

——岩井は一時間餘りも應接室で彼女と盡きぬ話をした。彼も亦彼女に劣らぬ程の熱い思ひを焦して、心も空に故郷にゐたが、遇ひたさに堪らなくなつて、妻子にも無斷で突然出京したのだとの事だつた。場所が場所でなかつたら、繁子は思ふ様彼の胸に寄つて嬉し泣きに泣いたかも知れなかつた。

心の堅くなつた舍監達よりも、さすがに年若い生徒達は敏感であつた。その日岩井が來た時に取次に出た一人は舍監が名刺を見ると一瞬間はツと顏色を變へたのを見逃さなかつた。尋ね

て來たのはどんな人なの？」と若い生徒達が我先にと訊くのに對して、取次いだ女は

「三十五六のね。色の白い、背の高い東北辯ですが、それや奇麗な人よ。」と答へた

生徒達はその言葉に一齊に顔を見合したけれども誰も何にも云はなかつた。

その後も岩井は屢々彼女を訪れた。生徒達は寮監が朝からいそ〱と應接室を飾り立て、床の花などを生けかへる日の夕方には、屹度かの新聞記者が訪れて來ると云ふ事を見逃さなかつた。彼女等の敏感は更に敏感を生んで、後には寮監の一擧一動に依つて、かの男の來訪を豫知する樣にさへなつた。

その頃から、寮監になつて以來一度も外泊などをした例のない繁子が、時々外出したまゝ歸らぬ事があつた。さう云ふ彼女は屹度先から據ん所ない用事で外出する旨を電報を打つて、寄宿生達の好奇の眼を見張らした。始めはそれと口にする事を遠慮してゐた寄宿生達も、やがては一人云ひ二人應じする樣になつて、段々寮監の噂をし合ふ樣になつた。その事は終には繁子にもそれと感じられる樣になつた。

繁子はどうかして生徒達の口に上らせない樣にと日夜心をくだいた。藪から棒に生徒達を呼んでそれ等の噂が無根であるなどと宣言する譯にも行かない。それは寧ろ藪を突ついて蛇を出す樣なものだ。色々と考へた末、ふと女らしい技巧を思ひついて、或る雨の夜の事彼女は同じ寮舍内の生徒達の中で最も勢力のある一人を自分の室に呼んだ。繁子は彼女を寮監室に迎へて、出來るだけ親しげに茶や菓子の用意迄してもてなしてから、ふと思ひ立つた樣にして、傍の本箱の中から、帛紗に包んだ三寸四方許りの小箱を取り出して、靜かにその蓋を開いた。

箱の中には小指程の大きさの白骨が入つてゐた。それを彼女は恭々しく箱のまゝ膝の上に乘せて、急に打ち濕つた調子で、それが彼女の亡き子供の遺骨である事を物語つた。それをきつかけにして彼女はそれからそれと、懷しさうに亡き子供の世にある頃の事や子供の死後の彼女の悲みに就いて物語つた。——無論、その頃の寮舍内の生徒達の間に立つてゐる噂を消す爲に、打つたお芝居に外ならなかつた。

繁子がさう云ふ人生の裏路を辿つてゐる間に、一方彼女と曾て戀中であつた仲井進の學界に於ける地位は、日一日と高まりつゝあつた。彼は既に其頃は醫學博士の稱號を與へられて、帝國大學教授の位置を占めてゐた。

彼女の第一の愛人の斃けるに引きかへて、その第二の、而して現在の愛人なる岩井はその日の糊口にさへ窮してゐた。彼は何の用意もなしに上京したので、その後樣々と就職口を探してゐたのであるが、容易に思はしい事もなく、空しい月日を僅かに繁子との果敢ない戀に慰められて送つてゐた。彼が上京して始めて繁子を尋ねた日に××寮の取次に渡したY——新聞の名刺は、友人のものを借りたのである。

斯うして空しい月日を送る岩井のその頃の生活費は、六分繁子から支送つてゐたのであつた。その中に彼女は容易に彼に思はしい就職口のないのを知ると、その最後の貯へを抛つて、其頃新たに創立された千代田印刷株式會社の相當な株主となつて、岩井をそこの役員に世話した。が、不幸にして、その會社は缺損續きの結果、間もなく解散と云ふ悲境に陷つた。それと共に、彼女はその生涯を保證されてゐた、子爵家から贈られた財産の全部を失くした譯である。彼女は生れて始めて生活に對する不安を感じ出した。

一〇

それ迄の彼女はたとへ新聞記者をしても、金を得る事がその目的ではなかつた。今や、彼女は金を得る事を目的とする仕事を求めねばならなくなつた。悧巧な彼女は、ふと其頃まだ日本に生理學の適當な女學校用の教科書のないのに着目して、その原稿をこしらへに掛つた。而してそれを岩井の手で整理させて恩師三宅博士の名を借りて出版した。それは出版後幾何もなくして文部省の檢定にも通つた。それは彼女の見込通り數版又數版を重ねた。今日でも尚全國の高等女學校でそれを教科書に採用してゐる所が尠くない。彼女はそれから得た收入を、總て當時下宿生活をしてゐた岩井に貢いだのであつた。

話が又仲井進の事になるが、一方に繁子が數奇な運命の波に漂はされてゐるのを他所にして、文字通り彼の生活は追手に帆を上げる樣な順調な路を進んでゐた。けれども如何なる人の人生にも常に晴れた日が續く譯には行かない。進だけがその數に洩れる事が出來る筈がない。而してそれが博士夫人として、社交界に時めいてゐた彼の妻で、又繁子のクラスメートだつた春子の死に依つて破られた。

春子の突然の死は久しくその消息の絶えてゐた繁子にも傳へられた、彼女にとつて死だ舊友は憎むべき戀の敵ではあつたが、死んだ人を最早や怨む事はなかつた。が、生きてゐるその

夫、彼女の薄情な愛人に彼女は迷ふに忍びなかつた。彼女にとつて、彼は倶に天を戴くさへ許し難き存在であつた。が、女子大學の寮監と云ふ位置からだけでも、彼女は春子の葬式に列しない譯には行かない。先年彼女が進と別れてから、再び彼の顏を見るのはその時が始めてゞあつた。が、無論、彼女は彼と言葉を交す機會を避けた。彼女は全く形式だけの會葬を濟して古い思ひ出に胸を締められる樣な日を、湧き起る思ひを消し消し寮舍に歸つて來た。

所が、思ひの外の事が起つた。春子の葬式の日から二ケ月程後の事である。或る日思ひ掛なく繁子は進から結婚の申込を受けた。仲に立つた某は、彼等の昔の關係を知らないものだから、盛に彼の學識、社界的の地位、品行、さては人格を賞揚して、彼女にこの結婚が彼女の將來にどれ程の幸福であるかと云ふ事を、所謂仲人口を以て力說した。

「私は自分の口からあの人の事を惡く云ひ度くは御座いませんけども……」と背柴に輝く窓のカーテンの光をさへ厭ひながら、繁子はその長い物語を續けた。

「世の中に厚顏無恥と云つて、これ程の厚顏無恥が御座いませうか？　その時迄は私は未だ人に何と仲井の事を惡く云はうとも、又私自身時々堪らなくあの人を怨めしくなる時もあるにはありましたが、決してあの人を心の底から憎んだ事はありません。無論あの人が善い事をしたとは思へませんけど、私だつて男で、あの人の場合になつたとすると、ふと魔がさす樣な氣持から、あの人の樣に心變りをしないとも限らないと思ふ事が御座いますもの。まして一部の人が仰言の樣に、始めから私の多少の財産に目をくれて、それを利用するだけの計畫で私に取り入つたとは、私には思はれません。けども、けども……」

斯う云つて彼女は目をしばたたいた。

「けども、其時許りは私は心の底の底からあの人を輕蔑しました。元より私は傷のついた身體です。私の樣な者が春子さんの後添ひとして仲井醫學博士の妻になるのは、表面上から云つたら願つてもない幸福かも知れません。屹度仲井でなく、私の知らない外のあゝ云ふ位置の人で、私の知らない外の奧樣の亡くなられた後で、結婚の申込を受けたのなら、私は喜んで承諾したかも知れません。しかし、外でもないあの人の家へ、外でもない春子さんの後へ……私は今思ひ出しても堪りません、堪りません……」

此邊を語る時、流石に靜かに續けられて來た繁子の話も、時

としては呼吸急しく、又荒々しくなるのを自分は感じた。而して仲介人の再三の交渉にも拘らず、繁子は斷然進の結婚申込を謝絶したのだつた。

二

一方、岩井と繁子との關係は益々深味に陷つて行つた。それに連れて、いつか二人の噂は獨り××寮だけに止まらず、廣く全校内に廣がつて行つた。彼女はいつかの白骨の事を手始めに。色んな手段を盡してそれ等の噂を取消さうと努めたがさうする一方に、戀の盲目になつてゐる彼女は、段々と持前の落着きを失なつて、人々の目に餘る程になつて行つた。終には彼女の監督の下にある寄宿生達が、彼女を寮監として戴く事を厭ひ始める樣にさへ立ち到つた。彼女はよもやそれ程にはと氣が付かなかつたのであつたが、生徒達は一人語らひ二人語らひして、段々と密かな中に彼女の排斥運動を準備したのだつた。

それが軈て淺田學監の耳に迄とどかないではゐなかつた。すると、學校側でも捨てて置けないので、密かに且つ嚴重にその噂の實否を確かめて見た。其結果は定つてゐた。さういふ者を寮監として、寄宿生の監督を委ねて置く譯には行かないと云ふので、それとは云はないで學監から彼女に辭職させる事にした。然し又、一方學校として、その秀れた卒業生の一人である彼女の才と識とを捨て兼ねた。で、桃風會の事業にだけは彼女に今迄通り關係する事を許した。桃風會と云ふのは女子大學の卒業生の組織してゐる同窓會の一種で、學校の構内にその本部を置いた、色々の研究や事業や兼ねて出版などする機關である。

寮監を辭した繁子は、校外にその住居を定めなければならなかつた。それには同時に桃風會に通勤する便宜の爲に、成るべく學校から程遠くない所をと探した結果、小石川の大塚に小やかな一戸を構へる事になつた。岩井はその時もまだ就職してゐなかつた。彼女に多少の財産の殘されてゐた頃ならば、無論こんな事は何の問題でもなくそれどころか機會の與へた不意の同棲を二人は喜んだかも知れなかつた。が、今は彼等の目の前に、恐るべき生活に對する不安が口を開いてゐた。彼女が毎月桃風會から與へられる僅かな手當は二人の生活を支へるだけが充分ではなかつた。繁子は生れて始めて、生活難と云ふものに面接しなければならなかつた。

だが、それさへ未だ彼女の悲境の絶頂ではなかつたのだ。更に慘酷な運命が彼女を待つてゐた。と云ふのはその時迄も、尙

學校に對しては、噂は噂として岩井との關係を斷然否認して來た彼女の、天の最後の審判が加へられたのであつた。それは女として避け難い、母となるべき出來事が彼女に起つたのだ。

が、それも隱し了せられるだけは隱した。生活上の餘儀ない必要から、桃風會に通はねばならなかつたから。けれどもそれがいつ迄續けられるものではなかつた。遂にどうしても人の前に出られない身體になつて了つた。病氣欠席の屆書と共に、彼女は或る日から再び懷しき、心の故鄉なる目白の校門をくぐらなくなつた。

「其後はお話申し上げる迄も御座いません」と繁子は云つた。「私が働けなくなると共に、私達は本當にその日に困り出しました。岩井は國に歸りました。けれども私はどんな顏して、國へ歸つて行けませう？　子爵家から貰つた財産はすつかり失くしてしまひ、その上に子供までこしらへて……私はそれでも背に腹はかへられなくて、三日三晩思案しました末、到頭一切の事を淺田先生に打ち明けた手紙を出しました。此處へ來る樣になつたのは先生のお世話なのです……私の生れた子供ですか？　女の子です。此處で孤兒たちと一緒に育てて居ります。」

と、それでもこの長い、哀れな物語を、彼女は終に一滴の淚をも見せないで語り終つた。

その時、遙かな運動場の向ふから、二三十人の子供の唱歌を合唱する聲が起つて來た。丁度彼女も語り終り、自分も慰める言葉もなくて、二人が一頻り向ひ合つて沈默してゐた時であつた。幼ない歌の言葉が單純なリズムに依つて、初夏の靜かな日の下を流れて來るのだ。それは如何なる人にも子守唄の樣な、優しい幼ない日の追憶を、心に呼び起すものだ。それは如何なる惡人にも、大人にも、次第々々に歌のリズムと共に、彼等の心を單純な幼ない者の心に復すものだ。

二人は默つて長い間それに耳傾けた。餘り長い間默つてゐるのが間が惡くなつたので、

「可愛いものですね」と云つて、自分は立ち上つた。實は淚が出さうになつて來たので、自分は譯もなくさうして立ち上つて、窓の傍に行つて、カーテンを少し開けて見た。自分は繁子を見るに忍びなかつたのだ。

「えゝ」と云つた彼女の聲は震へてゐた。彼女は椅子に寄つたままで何故か立上らなかつた。恐らく彼女はその時こそ泣いてゐたのに違ひない。

自分はその哀れな彼女と岩井の子に遇ふ機會を持たなかつた。その日の夜、早々に名古屋を立つて京都に向つた。この走り書は京都で認めたのである。

（完）



いろ〱の事

里見弴

○

今後の文壇は、どういふ方面に進んで行くだらうか、とか、何か新しい氣運が動いて來るだらうか、とか、いふ質問を時々受ける。

けれども私は考へる、——文壇といふ壇は、有るやうで無いのだ、政界とか財界とかいふ言葉が限る程、明瞭した『界』は無いのだ……。

素より根本に這入つていふならば、一見世界的波動に依つて支配されて居るやうに見えても、その實總ての社會的作業は、結局一個人の思想感情に迄還元され得るのだけれども、兎に角——例令ば政界にしても金融界にしても、一個人の思想感情を以て如何ともすることの出來ない大勢があり、傾向がある。そういふ意味合から、文壇にも何か明瞭した大勢とか、傾向とかが現はれて來て、それを歴々と指摘することが出來るものゝやうに考へてゐる人が、かなり多い。が、事實は、文藝の仕事といふものは、有ゆる社會的作業の中に就ても最も個人的なものであつて、時には或一ツの主義の下に數人の作家が一團となつて仕事を爲る場合も無いではないが、普通の場合には、類似の傾向を持つた數人の作家を、おせつかいな批評家といふものが便宜上一括して甲主義の作家、乙主義の作家抔と、勝手に命名するので、決して作家各個の與り知つたことではないのだ。昔て自然主義勃興當時の文壇は、有ゆる作家が擧つて其主義に趨つたやうな觀も無いではなかつたが、それは時好に阿る雜誌經營者が、その主義の作家の創作ばかりを歡迎して、傾向を異にした作家の作品には、殆んど發表の機關を與へなかつた態が有

つたからで、そこに他の傾向が無かつたわけではない、決して文壇を擧げて自然主義に趨つたわけではない。

だから最初に言つたやうな質問を受けた場合に、いつも私は一寸返答に困る。例令ば世間一般がデモクラチツクに成つて來たといふやうなことを頭に置いて、『文壇も何かそういふ氣運に影響されて新しい進路を開展しそうなものだ、それが無いとすれば、あまりに實社會とは沒交渉な、閑人のありのすさびではないか』――そういつた心持で、何か新しい傾向は、と尋ねられてゐるやうに思はれることが屢々ある。勿論我々の心にも世界の大勢、思潮は響いて來る、併し我々はそれに則つて直ちに以て自分等の仕事を進める指針にしやうとは思はない。世界の大勢、思潮が我々の心を通つて、我々自身の個人的色調を帶びて、作品の上に現はれる場合はあるだろう、が、必ず個人的の濾過を通さずに成される事は無いのだ、あつてはならないのだ。かういふ意味合から私は答へる――『それは要するに個人の問題です、文壇に、どういふ新傾向があるかといふことは、取りも直さず今どういふ新傾向を持つた作家が有るかといふ事になる、それだと一日がかりて喋つてもおツつきません。私は一人一人に就いて喋らなければならないんですから』、かう言つて笑ふより外はない……。

○

品ものの善惡(よしあし)は致方がないが、マヤカシものや、コシラへものが本物らしく通用してゐるのは如何にも苦々しいことだ。我々(日本人といふ意味での我々)は、もつと腹藏なく自分をムキ出しにして生活しなければいけないと近頃もツクヾヽ思つた。品ものの善惡は仕方がない、が、マヤカそうとは爲まい、コシラへやうとは爲まい。間(ま)が抜けて居ても、グラシがなくても、それが性來ならば良いではないか。何處迄も有りの儘の自分で押し通す、そういふ氣風が此の大戰後に我々の間に生れて來てよさそうなものだと思ふ。どんなに表面(うはべ)を飾つてコチンと見かけよく拵らへて居た處で、結局歸する處は實力だけだといふことは、今度の戰爭の有樣や講和會議の進行を見ても、歴然と證據だてられてゐるではないか。假面を脫(と)つて、赤裸(あかはだか)々に成つて、誠實一つで自分を投げ出すより國民各個の覺悟として大なるはないと信ずる。品ものの善惡は仕方がない。此の意味に於て最近文壇で私は、岩野泡鳴氏の意氣を壯とするものである。

○

藝術の天地は併し又有ゆる功利的、社會的關心から離れた、悠々の境地であらねばならない。玆では第一に品ものの善いことが要求される、百人の鈍才が銘々の額に蓴菜のやうな靑筋を立てゝ、眞赤になつて力むよりも、一人の天才が寢轉がつて夢現にうとうとと考へたことの方が偉大で、そうして立派であり得るのだ。幾ら世を擧げてデモクラチックに成つても、此意味に於て藝術の境地は遂にアリストクラチックである。我々（文壇の人々）は努力を惜しむ、ヅボラな、天來の與ばかり待つて居る、實社會には風馬牛な、そして得手勝手な熱を吹いてゐる穀つぶしのやうに世間から思はれ勝ちだ。その點に對する釋辯として私が藝術の境地を或る特別な別天地の樣にいふのでは決して無い。玆にも殆んど額に靑筋を立てゝ顏を眞赤にするやうな腕力的といつてもよい程の努力も要るし、又臍と臍とを合はせて談ずる樣な意氣も要る。併しどんな努力でも意氣でも追つ付かない最も大切な要素が必須であると云ふ意味からいつて、大分他の方面と趣を異にしてゐるのだ。品ものゝ善惡が玆では第一の問題だ。高貴なる魂が玆では第一の問題だ。名玉は砕かれた破片にもそれだけの値打（金錢づくで云ふ値打ではなく）がある。それは功利的な目的などを持つた相對の値打では全然なくて、質そのものゝ絕對の値打だ。例令ばそこらで賣つて居る十枚何錢の皿は、壞はれて、物を盛るといふ目的に敵はなくなると同時に、其値打の全部を失ふ、卽ち掃溜へ棄てられる。之に反して、例令ば柿右衞門といふやうな名工の造つた皿は、バラバラに壞はれても――物を盛るといふ目的は失はれても、尙且破片の一ツ一ツに値打がある。問題は目的になくて質其物にあるからだ。それでは其質の善さは何から生れて來るか。高貴な魂からだ。高貴な魂――それは言葉に現して、說き得る塲のものではない……。

俳句

上げ汐に川水戻る遅日かな　蝶衣
浚渫機日永の港轟かし　同
避暑の戸や松のむらたち月出づる　余子
藤原の盛衰讀むや避暑の宿　同
春水や矢走の歸帆けふも遅き　春雨
杯盤にわきて春惜む一句かな　同
枕して長々と見るや螢籠　喜舟
蕗の葉の戰ぐ風雨や家古し　同
おとつひは無き苗を今日は持ちにけり　枚々
枝蛙つきゐる木戸をあけにけり　同
苗賣をつれて戻りし主かな　斷腸花
草の家のもの皆春に徂かれけり　同
干し浴衣照り曇る日に眞白なる　戊子
淵の面の百合かき消して急雨かな　同

いと古き歌もて判や草合　松古堂
燕や雨隔てゐる驛と湖　同
大名のむかしの庭や杜若　快風
薫風や帆桁まはりて舳傾く　同
一風や若葉に起り裾を吹く　光亂射
日々通る谷の若葉や日々の色　同
坊が妻古き日傘をさしにけり　青舟
笠ぬぎし額に風す若葉かな　同
行春や花に芥に水逡巡　秋刀魚
苗賣の見えゐて遅し路の垣　同
初夏や緑爭ふ岬と島　晨朗
亂れ髮韋駄天のせし競馬かな　同
板橋を螢に渡り我が家かな　迷堂
山里に尚遠山の四月かな　同
短夜や谷底橋の山かつら　東洋城
初袷昨日や市に芝居見し　同



青磁色の女

谷崎潤一郎

それは或る年の秋の末つ方、東京○○新聞の特派員として長らく北京に逗まつて居た私が、或る用務を帯びて久し振りに上海の方へ一箇月ほど出張を命ぜられた時の事であつた。十一月の、——何日であつたかはハツキリと覺えて居ないが、ちやうど杭州の西湖へ着いて二日目の晩が美しい滿月の夜であつたから、上海を立つたのは舊暦の十三日か四日の午後であつたらう。杭州へ廻つたのは別段用件があつた譯ではない。實は此の前一度上海へ來た時分に、蘇州楊州南京の附近は一と通り見て歩いたにも拘らず、杭州へは是非行きたい行きたいと思ひながら、つひに暇がなくて機會を逸してしまつたので、今度の出張を幸ひに見物して置かうと思つたのである。

秋の末と云つた所で南支那ではまだそんなに寒くはない。贅澤を云つたら此の地方の遊びは春に越した事はないのだけれど、よしや高青邱の詩に謂はゆる、

渡水復渡水　看花還看花　春風江上路　不覺到君家

といふやうな南國特有の行樂を恣まゝにする譯には行かないにしても、路傍の柳の葉はまだ青々と繁つて居るし、冬服だと日中は汗を搔くくらゐで、たゞ朝夕の空氣が冷え冷えと、それも寧ろ快い肌觸を覺えさせる程度に、身に泌み渡るほどの季候である。花はなくても紅葉はちやうど見ごろであるし、空は毎日カラカラに晴れて居るし、おまけに其の日が滿月にあたつて居るとすれば、西湖の景色は可なり遊子の心を唆るに足るのである。そんな譯で、私は午後二時半に上海の北站から杭州行の列車に投じたのであつた。

「杭州へ行かうと思ふのですが、彼處では何と云ふ宿屋が一番いゝのでせう。無論西洋人や日本人の宿屋はありますまいな。」

覺束ない上海語で斯う云ひながら、隣りの紳士を顧ると、

「左樣」

と、象牙のパイプで紙卷のウエストミンスタアを薫ゆらして居た男は、老大に肥滿した顏の中にある眠れぼつたい眼を慵げに瞬きながら、

「西洋人のホテルはないが、支那人の旅館なら清潔で立派なのが澤山あります。西洋のホテルのやうに出來て居るから、上海から來る西洋人もみんな泊ります。近頃西湖の畔に新しく出來た新々旅館、それから清泰旅館、此の二つが中でも一番いゝでせう。新々旅館の方が家も大きいし見晴らしもいゝのだけれど、停車場から遠いのが不便だらうな。」

と云つて、不愛想な眼つきでぢろりと私に一瞥をくれた後、又悠々と煙草を吸つて居る。人と話をするのが如何にも大儀だと云ふ風に見える。

「あなたは何處までお出でゞすか。」

と、私が無遠慮に追究すると、彼はもう一遍ぢろりと此方へ流眄を與へて、

「嘉興まで」

と云つたきり、すうつと窓の方を向いてしまつた。

多分此の男は嘉興の商人なのだらう。でつぷりした大柄な體につやつやしい黑繻子の服を纏うた風采が、やゝ傲慢に見えるくらゐ堂々として居て、薄鬚の生へた口元や顔の輪廓が何處となく前大總統の黎元洪氏に髣髴として居る。私の向ひ側には五十恰好の品のいゝ瘦せた紳士が、隣りに腰かけた夫人を相手に茶をがぶがぶと啜りながら何か頻りにぺらぺら話し合つて居る。話の合間に夫人は眞鍮の煙管からガボガボと鈍い音を立てゝ水煙草を吸ふ。亭主も茶を飲んでは煙草を吸ひ、煙草を吸つてはカーアッと喉を鳴らして床の上へ痰を吐き散らす。それから又ぺちやくちやと話が始まる、此の夫婦の娘と見えて、夫人の側に十八九と十五六になる女の兒が向ひ合つて坐を占めて居る。十八九の方は黃疸のやうな血の氣の失せた顔色をした女だけれど、しかし其の目鼻立ちは木彫の如く堅くキッチリと整つて居る。四つか五つ位になる幼兒を抱いて居るのだが、その兒の服裝は眼が醒めるやうにケバケバしい。眞紅な繻子に青い絲で龍だか麒麟だかの刺繡を施した上衣の下へ、蜥蜴のやうにぎらぎらと光る濃い草色のヅボンを穿いて居るのである。十五六の娘の方は手に菊の造花を持つて、それを振りながら幼兒をあやして居る。派手な

棠地の、紋綸子かと思はれる上衣に共色の帽子を被つてゐる彼女の容貌は、姉娘とは反對にふつくらとした樽柿のやうな色つやをした圓顔である。さうして其の柔かさうな豐頰から長い頸の周りを、眞白な羊の毛皮の裏の着いた上衣の襟に包んでゐるのが、何とも云へず優雅に見える。私と共に以上六人の人數が一つのテエブルに向ひ合つて居るのだから、(斷つて置くが支那の汽車にはベンチとベンチとの間にテエブルを据ゑてあるのが多い。)椅子はぎつしりと身動きもならない程に詰まつて居るのである。勿論私たちの席ばかりでなく、車内は何處も彼處も滿員であつた。此のくらゐなら一等へ乘れば好かつたけれど、二等でなければ斯うまで支那人のいろ〳〵な風俗を觀察する便宜はなかつたかも知れない。何しろ此の車内に溢れてゐる客の樣子を見たゞけでも、南方が北方に比べて如何に富んでゐるかと云ふ事は明かである。京奉線や京漢線の二等室を見馴れた眼で見ると、ベンチの蓐に張つてあるアンペラの色なども汚れ目がなく、ボーイの身なりにしても、テエブル、クロースにしても、萬事が小ざつぱりして居て、室内の掃除がよく行き屆いて居るらしい。それに、土曜日とは云へ二等室がこんなに混雜して居る樣子では、此の近邊の中流階級は一般に景氣がいゝのだらう。第一北方の汽車などゝは、まるで客種が違つて居る。此の邊の二等室のお客は、北方なら一等室でなければ出遇はないやうな立派な服裝をした連中ばかりである。のみならず婦人の乘客が多いと云ふことも、たしかに顯著な現象である。北方では女の外出歩きは稀であるのに、南へ來ると歌妓は勿論夫人でも令孃でも男と手を携へて盛んに遊び歩いて居る。恐らく上海と云ふ歐羅巴風の大都會を控へて居る影響なのだらう。私が先刻この室内へ足を運び込んだ時にも、何より先に感じたのは乘客の色彩が非常に花やかであると云ふ一事であつた。日本ならば四月頃のうら

うらうらとした日光が、ひろびろと窓外に打ち展けて居る江蘇の沃野を照らして、その强い反射が室内をパッと明るくして居るせゐもあらうけれど、坐席の半分以上を占めて居る婦人や小兒の派手な衣裳が、此處の空氣を一層きらびやかにして居る事は爭ふを用ゐない。云ふまでもなく彼等の服裝も亦北方に比べれば濃厚で絢爛である。金魚が游いで居るやうな、と云ふ形容詞はよく聞く言葉だが、彼等の服裝は全く金魚だ。金魚がぎらぎらと鱗を水に光らせつゝ游いで居るのだ。おまけに支那では體格の小柄な女を貴しとする風があつて、婦人は一體に唐子人形の如くチョコチョコした小さいのが多いのだから、尙更金魚と云ふ形容が當てはまる譯だ。ずつと果てから果てを見渡したところ、中には隨分美人のお客も交つて居るらしい。江蘇浙江は古來美人の產地と歌はれて居る位だから、大概の女は十人並の顏立ちを持つて居るけれど、ちやうど私の席から三側ばかり隔つた前方の椅子に、後ろ向きに腰かけて居る令孃風の女の橫顏は、一と際目立つて美しく感ぜられる。背丈は外の女より少し高いやうだが、私の趣味から云へば却つて此のくらゐの方がすつきりと華奢な姿に見える。さうして服裝の好みが馬鹿に氣持ちがいい、毒々しく燃え立つやうな衣裳の中に、その女だけはたつた一人瀟洒とした薄い靑磁色の上衣を着けて、白繻子の靴を穿いて居るのが、金魚の中に變り色の緋鯉が一尾交つたやうなすがすがしい感じを與へる。皮膚は手の先でも頰の上でも西洋紙のやうにすべすべと目が詰んで居て、やゝ卵黃色を帶びた冷めたい靑白い色をして居る。合の子などに屢々あるやうな肌の色だと私は思つた。日本の女の指に比較すると、支那の女の指は一層デリケエトであるけれど、分けても此の女の指は纖細を極めて居る。しかし中指と藥指とに篏めて居る金の指環は、日本の女に批評させたら或ひは太過ぎると云ふかも知れない。

太いばかりでなく、その指環には可愛い可愛い豆粒よりも小さいくらゐな黄金の鈴が五六箇も附いて居て、指を動かす度毎にチャラチャラと揺れてぶら下つて居るのである。餘計な事を云ふやうだが一體日本の女の裝飾品に對する趣味は、あまりに島國的にコセコセといぢけて居るやうである。このくらいなデリケエトな指には、寧ろ此の程度の毒々しさを持つ指環の方が配合がいゝやうに考へられる。それからもう一人、彼女と差し向ひに色の淺黑い圓顏の女が腰かけて居る。此れも相當の美人で、背は小さいが前の令孃よりも二つか三つ年嵩の、髮の結ひ方から察するのに大方好い所の奥樣であらう。金の鎖の端にハート形の翡翠の下つた耳環を附けて、黑繻子の服を纏つて、テエブルに肘をつきながら毛絲の編物をして居る。して居ると云ふよりは、ピカピカと銀色に光る二本の長い針を弄びながら、編物をいぢくつて居ると云つた方が適當かも知れない。笑はうとして笑はずに居るやうな、妙な媚びと愛嬌が目元と口元に漂うて居る。以前の令孃は折々肘をくの字なりに突つ張つて、上衣の下から紫の絹のハンケチを摘まみ出してそれを鼻先へ持つて行つたり兩手で顏の前へ幕を張つたり、何と云ふ事もなく伊達に玩具にして居るらしい。或はハンケチに滲み込ませてあるヴィオレットかヘリオトロープの香水の匂でも嗅いで居るのだらう。彼女の薄い掌はその紫の絹のハンケチと輕さを爭ふやうに柔くひらひらして居る。

松江の鐵橋にさしかゝつた時、首を出して見ると水は琅玕のやうに青く青く澄んで透き徹つて居た。支那へ來てからこんな綺麗な川の水に遇つたのは今日が始めてである。濁つて居るので有名な黄河は云はずもがな、白河にしても揚子江にしても支那の川と云ふ川は皆泥溝のやうに汚い。南方の蘇州の運河はそれほど汚くはないけれど、とても此の松江の水とは比較にならない。いつぞや汽車で朝鮮を通つた時、

あの近邊の川の水は悉く淸冽だと思つたが、此れなら朝鮮の川に比べても劣りはしなからう。兎に角南支那と北支那とは川の水からして既に斯くの如く違つて居るのである。蘇州の水は南京の水よりも淸らかに、杭州の水は更に蘇州の水よりも淸らかに、南へ南へと行くに從つて支那はだん／＼美しくなるのではあるまいか。現に窓外に連なつて居る豐饒な田園の趣にしても、直隸河南あたりの蕭殺たる原野の風物とは雲泥の相違である。絶え間なく打ち續く綠の桑畑や、桃の林や、楊柳の並樹や、その間を點綴する水溜まりには數十羽の鵞が群つて泳いで居るかと思ふと、忽ちにして夥しい薄の穗が日にきら／＼と輝いて居る丘陵がある、丘陵の蔭から高い塔が聳えて來たり、町の城壁の古びた煉瓦塀が蜒蜿とうねつて現はれたりする。此の景色を前にして、停車場ごとに出たり這入つたりする美しい女たちの風俗を眺めて居ると、私の夢はひとりでに楊鐵崖や高靑邱や王漁洋の詩の世界に迷ひ込んで行くやうな心地になる。……

ちやりん、ちやりんと銀貨を轉がす音がするので、振り返へつて見ると今しも松江の停車場から乘り込んだ四五人づれの紳士の一團が、とあるテエブルに陣取るや否や、トランプで賭博を始めたのである。明治初年の一圓銀貨よりも大きいくらいな大洋(ターヤン)の銀貨をざらりざらりと卓上に掻き集めながら、汽車に乘つた事も打ち忘れた如く、いづれも熱心に手の中の骨牌を睨み詰めて居る。其のまん中に居るのは色の白い口の大きい、金緣の眼鏡をかけた、だゞつ兒のやうな圓い顔をした、三十五六のだらしのない眼つきの男で、何んとなく親分株のやうに見える。車內で御開張をするのはちと亂暴のやうだけれど、誰も何とも言ふ者はない。だゞつ兒先生以外の男は、大抵四十から五十恰好の分別盛りの顔つきをした、品の好い身なりの連中であるが、人前を恥ぢる様子もなく夢中になつて大聲を出したり錢の取り遣りをやつ

太いばかりでなく、その指環には可愛い可愛い豆粒よりも小さいくらゐな黄金の鈴が五六箇も附いて居て、指を動かす度毎にチャラチャラと搖れてぶら下つて居るのである。餘計な事を云ふやうだが一體日本の女の裝飾品に對する趣味は、あまりに島國的にコセコセといぢけて居るやうである。このくらゐなデリケエトな指には、寧ろ此の程度の毒々しさを持つ指環の方が配合がいゝやうに考へられる。それからもう一人、彼女と差し向ひに色の淺黑い圓顏の女が腰かけて居る。此れも相當の美人で、背は小さいが前の令孃よりも二つか三つ年嵩の、髮の結ひ方から察するのに大方好い所の奧樣であらう。金の鎖の端にハート形の翡翠の下つた耳環を附けて、黑繻子の服を纏つて、テエブルに肘をつきながら毛絲の編物をして居る。して居ると云ふよりは、ピカピカと銀色に光る二本の長い針を弄びながら、編物をいぢくつて居ると云つた方が適當かも知れない。笑はうとして笑はずに居るやうな、妙な媚びと愛嬌が目元と口元に漂うて居る。以前の令孃は折々肘をくの字なりに突つ張つて、上衣の下から紫の絹のハンケチを摘まみ出してそれを鼻先へ持つて行つたり兩手で顏の前へ幕を張つたり、何と云ふ事もなく伊達に玩具にして居るらしい。或はハンケチに滲み込ませてあるヴィオレットかヘリオトロープの香水の匂でも嗅いて居るのだらう。彼女の薄い掌はその紫の絹のハンケチと輕さを爭ふやうに柔くひらひらして居る。

松江の鐵橋にさしかゝつた時、首を出して見ると水は琅玕のやうに青く青く澄んで透き徹つて居た。支那へ來てからこんな綺麗な川の水に遇つたのは今日が始めてである。濁つて居るので有名な黃河は云ふはずもがな、白河にしても揚子江にしても支那の川と云ふ川は皆泥溝のやうに汚い。南方の蘇州の運河はそれほど汚くはないけれど、どても此の松江の水とは比較にならない。いつぞや汽車で朝鮮を通つた時、

あの近邊の川の水は悉く淸冽だと思つたが、此れなら朝鮮の川に比べても劣りはしなからう。兎に角南支那と北支那とは川の水からして既に斯くの如く違つて居るのである。蘇州の水は南京の水よりも淸らかに、杭州の水は更に蘇州の水よりも淸らかに、南へ南へと行くに從つて支那はだんだん美しくなるのではあるまいか。現に窓外に連なつて居る豐饒な田園の趣にしても、直隷河南あたりの蕭殺たる原野の風物とは雲泥の相違である。絶え間なく打ち續く綠の桑畑や、桃の林や、楊柳の並樹や、その間を點綴する水溜まりには數十羽の鵞が群つて泳いで居るかと思ふと、忽ちにして夥しい薄の穗が日にきらきらと輝いて居る丘陵がある、丘陵の蔭から高い塔が聳えて來たり、町の城壁の古びた煉瓦塀が蜿蜒とうねつて現はれたりする。此の景色を前にして、停車場ごとに出たり這入つたりする美しい女たちの風俗を眺めて居ると、私の夢はひとりでに楊鐵崖や高靑邱や王漁洋の詩の世界に迷ひ込んで行くやうな心地になる。……

ちやりん、ちやりんと銀貨を轉がす音がするので、振り返つて見ると今しも松江の停車場から乘り込んだ四五人づれの紳士の一團が、とあるテエブルに陣取るや否や、トランプで賭博を始めたのである。明治初年の一圓銀貨よりも大きいくらいな大洋(ダアヤン)の銀貨をざらりざらりと卓上に掻き集めながら、汽車に乘つた事も打ち忘れた如く、いづれも熱心に手の中の骨牌を睨み詰めて居る。其のまん中に居るのは色の白い口の大きい、金縁の眼鏡をかけた、だゞつ兒のやうな圓い顏をした、三十五六のだらしのない眼つきの男で、何んとなく親分株のやうに見える。車內で御開張をするのはちと亂暴のやうだけれど、誰も何とも言ふ者はない。だゞつ兒先生以外の男は、大抵四十から五十恰好の分別盛りの顏つきをした、品の好い身なりの連中であるが、人前を恥ぢる樣子もなく夢中になつて大聲を出したり錢の取り遣りをやつ

て居る。蓋しこんなのが支那のデカダンの標本なのだらう。

松江と云へば元末の詩人揚鐵崖が嘗て亂を此の地に避けて居た事を憶ひ出す。草枝、柳枝、桃枝、杏花と呼ぶ四人の妾を從へて、彼が日夕書舫の遊びを恣まゝにしたのは、思ふに私の汽車が今通り過ぎつゝある此の近邊なのであらう。近代支那の詩人墨客が多く南から踊出したのも、斯うして此の土地の風光や習俗に接すれば、あながち偶然ではないのだと頷かれる。私の大好きな淸の戯曲家李笠翁なども、浙江の生れであると云ふから、あの十種曲の中に現れて來る場面や人物は、此の窓の外を走つて居る山や川や都會や街道や、此の室内に坐を占めて居るやうな佳人才子の間から、さまざまな生きた材料を得た事であらうと想像される。實際、かう云ふ美しい國土と住民との間に生れゝば、笠翁の詩劇にあるやうな漂渺とした空想が育まれるのも無理はあるまい。十種曲の中にある蜃中樓傳奇を讀むと、東海の濱邊へ遊びに行つた柳士肩と云ふ青年が、海上の蜃氣樓へ渡つて靑龍王の娘の舜華と婚約をする怪しい物語が書かれて居るが、そのロオマンスの舞台となつた東海と云ふのは、恐らく此の附近、——江蘇浙江あたりの海岸であつたらうかと推測される。それから又女優の劉貌姑と稀世の才人の譚楚玉とが相抱いて川へ身を投げた後、可憐な二匹の比目魚と化して嚴陵地方へ流れて行つたと言ふ比目魚傳奇の物語も、日常お伽噺のやうな山水や樓閣や人物を目にして居るうちに、自然と笠翁の頭の中に釀された幻想の一つではないだらうか。——かう考へて來ると、南支那の此の地方に生れた人間は誰でも詩人にならずには居られないやうに感ぜられる。日本を東洋の詩の國だなどと己惚れて居る人たちに、私は一と目でも此の附近の風景なり人情なりを見せてやりだいくらゐに思つた。

汽車が嘉興を過ぎたのは夕方の五時時分であつたらう。食堂車のまづい洋食で飢を凌いで、しよざいなさに携へて來た石印の西湖佳話を讀んで居るうちに、戸外は眞暗になつてしまつた。黒い窓ガラスに私の顏がぼんやりと、その向うには例の婦人たちの赤や青や淡い黄色の派手な服裝が、ちらちらと映つて居る。そのぼやけた輪廓を見るともなしに眺め續けて居たら、何だか斯う遠い昔の夢にでも出遇つたやうな心地になつた。私は急に、一昨年の夏以來歸らずに居る故鄕のこと、東京の小石川の家庭のことなどを想ひ出した。知らぬ外國の土地へ來て、たつた一人で夜汽車に搖られて居る時ぐらゐ、物悲しい、うら淋しい氣分に襲はれることはあるまい。………

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ゆふべはおそく西湖の水に臨んだ亭子灣内のホテルへやつて來た。汽車が杭州へ着いたのは七時少し過ぎだつたから、ステエシヨン前のホテルに泊まればよかつたものを、私は是非とも西湖のほとりまで行きたかつたので、不案内の土地を俥に乘つて、湧金門外の淸泰（チンタイ）第二ホテルまで走らせたのである。ホテルまで二十錢と云ふ約束で乘つたところが、車夫がたちの惡い奴だつたと見えて、城内の淋しい横町へ俥を挽き込むや否や、そこでぴたりと止めてしまつて「もう十錢增してくれなければ御免蒙る。」と云ふ。ぐづぐづすれば脅迫もしかねまじき樣子である。暫くの間押し問答をしたけれど、荷物はあるし、道は分らないし、此處で放り出されたら動きが取れないので、仕方なしに承知をすると、今度は、「前金でよこせ。」と云ふ。忌ま忌ましいには違ひないが、上海の車夫などは追ひ剝ぎを働くくらゐだから、此奴も

惡くするとどんな惡黨かも知れないと思つて、云ふなり次第に金を渡してやつた。幸ひ月夜だつたからいゝやうなものゝ、暗い晩だつたら或はあれだけでは濟まなかつたかも知れない。そんな出來事の爲めに暇を潰して、宿屋の門を潜つたのは九時半頃であつた。西湖を見るのは始めてゞも湖畔の地理は詩や小說で度々お馴染みになつて居るから、大凡そ見當が付かない事はない。ホテルの建つて居る場所は湧金路の左側にあつて、表門は西湖鳳舞臺と云ふ劇場に向ひ合つて居る。その裏門の方は卽ち渺茫たる月下の湖水に面して居るのであつた。ヱランダに立つて眺めると、遠く湖の彼方に吳山の山影が、空の色よりは幾分か濃いくらゐな程度に、ほんのりと靄の如く棚引いて居た。有名な雷峰塔は多分その少し右の方に見えなければならない筈であるが、いかに冴え返つた月夜でもさすが其れだけは夜霧の底に隱れて居るかして、殘念ながら眼には止まらなかつた。が、遙かな湖の果ての方に、向う岸に淡く連なつて居る山よりは稍くつきりと水面に黑い樹立ちの群がつて居るのが、かね〴〵憧れて居た三潭印月か湖心亭の島陰であらうと思つた時、私は何だか戀人にでも逢つたやうな嬉しさを感じた。白樂天が築いたと云ふ傳說のある白公隄や、孤山の麓にあると云ふ林和靖の放鶴亭や、文世高と秀英小姐との戀物語で名高い斷橋の情蹟や、寶石山の保叔塔などはつひ此ホテルの後ろに近くあるのだらうけれど、ヱランダからはまるきり望む事は出來なかつた。今夜のうちに船を出して蘇東坡の六橋のあたりまで行つて見たいとは思つたが、何分時刻が遲いので、明日の晩ゆつくりと月を賞しながら畫舫を浮べることにきめた。

汽車の中の商人が敎へてくれた通り、支那人の經營して居る旅館にしては万事淸潔で氣が利いて居る。建物も全部西洋風で、ヱランダの片側に列んで居る十ばかりの客室の入口には、一つ一つ鉢植ゑの菊

が飾つてあつて、室内の裝置も整つて居るし、寢台の工合などはなか〳〵氣持が好い。ボーイも先の車夫とは反對に人の好ささうな男で、片言まじりの英語を心得て居る。たゞ一つ困つた事には、浴室の設備がない。仕方がないからぶらりと戸外へ出て、迎紫路の角にある錢湯に漬つた後、ついでに近所の料理屋へ上つて晩飯を喰つた。料理の中に東坡肉と云ふのがあつた。昔西湖の山水を愛惜して長く杭州に逗まつて居た蘇東坡が、好んで作らせた料理であるが故に東坡肉と云ふのださうな。西洋料理にシヤトオブリアンがあるのと正に好一對である。ねつとりとしたセピア色の油つこいソップで、豆腐のやうに柔かい豚の白味を煮込んだもので、蘇東坡と云ふと何だかひどく脱俗超凡の詩人のやうに聞えるけれど、あの濃厚な肉を肴に酒を飲みながら、朝な夕なお氣に入りの妾の朝雲を相手に船遊びをして居たのかと思ふと、支那人の趣味と云ふものが大概分るやうな心地がする。晩飯を濟ましてホテルへ歸つて來たのは十時半ごろであつた。あまり月が美しいので暫くヹランダの籐椅子に凭れつゝ湖面の景色を眺めて居た私は、その時ふと、隣りの部屋のドーアの前に、二人の女がテエブルに相對して腰かけて居るのに心づいた。欄杆の影が鮮やかに落ちて居る廊下の板の間には、青白い明るさが霜のやうに冴えて居るので、二人の服裝や顏だちは朧ろげながら判ぜられる。彼等は紛ふべくもなく汽車の中で見覺えのある美人の令孃と其の姉らしい夫人とであつた。大方私と同じやうに上海から西湖見物に來たのであらう。それにしても女二人きりなのは變であるが、或ひは部屋の中に連れの男が居るのかも知れない。などゝ考へて居るうちに、二人は私に遠慮をしたのか、こそこそとドオアの中へ這入つてしまつた。

今朝八時ごろに床を離れて、朝飯の代りに杭州名産の火腿をおかづにして炒餅を喰つてから、ヹラン

ダを行つたり來たりして居ると、隣室のドオアが明け放しになつて居る樣子である。何と云ふ事もなく昨夜の女たちが氣にかゝつたので、そつと其の前を通り過ぎながら私は部屋の中を覗いて見た。果して二人の外にもう一人の男の連れがある。姉の夫人の亭主なのであらう、三十前後の、面長な、背のひよろ長い瘦せた紳士である。女たちは今しも起きて顔を洗つたばかりの所らしく、鏡に向つて腰かけて居る令孃の後ろに立つて、姉は妹の髮を梳つてやつて居る。間もなく三人はヹランダへ出て來て、ゆふべと同じ場所のテエブルを圍みながら雜談に耽り始めたが、夫人は相變らず例の毛絲の編物を手から放さない。紳士の容貌と令孃のそれとが似通つて居る點から推し測るのに、彼女は彼の實の妹であつて、夫人は嫂の關係にあるのかも知れないと、私は其の折考へたのであつた。令孃の顔が、きのふ汽車の中で見た時より一層美しく感ぜられたのも事實である。それは或は、欄杆の外に練絹のやうな柔かい波を顫はせて居る淺黄色の西湖の水と、爽かな秋の朝の外氣とが、あるエッフエクトを其の容貌の上に加へて居たせゐでもあらう。彼女の着けて居る青磁色の上衣とヅボンとは、斯う云ふ時と所とにいかにもふさはしい好みであつて彼女はことさら自分の姿を湖山の風光の畫面の中へ容れんが爲に、數ある衣裳のうちから此の一揃ひを擇り拔いて、身に纏うて來たのかとも疑はれる。その地質は下品でない底光りを持つた、猫柳のやうにつやつやとした繻子で、昨日は氣が付かなかつたけれど、青磁の面には孔雀の尾にある斑紋の如き模樣が同じ色で飛び／＼に織り出されて居る。さうして上衣とヅボンの緣は、薄い石竹色の絹糸でへりを取つてある。一體に支那の女の脛と足とは西洋の婦人に比べても劣らないほどすつきりとして居るが、椅子に腰かけてテエブルの横木の上へ出して居る彼女の兩脚の線は、ヅボンの先から淡いクリーム色の襪にな

るに從ひ、次第に細く細く、踝のあたりで殆んど骨ばかりかと思はれる樣に狹まつた後、再びなだらかに肉を盛り上げて、その尖端に、やつと爪先が隱れるくらゐな淺い白繻子の靴を穿つて居るのである。何となく鹿の脚のやうな、優雅な楚々とした感じがある。勿論脚ばかりでなく、金の腕時計を嵌めて居る左右の手頸なども、それと同じやうにきやしやであつた。どちらからと云へば稍面長の、希臘風の秀でた鼻と小さく切れた肉の厚い唇を持つた、それで居て何處やらに子供らしいぼんやりさを備へた顏だちには、高貴の家の生れではないかと推せられるやうな上品さがある代りに、その表情には病人じみた、元氣の昂らない、ぐつたりと疲れたやうな趣のある事も否まれなかつた。黑眼がちの大きな瞳にも生き生きとした潤ほひがないし、紅かるべき唇も茶色を帶びてくすんで居る。血色も青白いと云ふよりは、青さが濃いためで少し黑ずんで居るくらゐで、木目の細かい肌が玉のやうな冷え冷えとした堅さを持ち、ちよいと見たところでは玲瓏と澄み切つて居ながら、底の方を掻き廻すと澱んだ濁り水がぶくぶくと湧き上つて來る古沼のやうな感じを與へる。にも拘らず、此の令孃の風情が昨日にも增して私の心を惹いたのは、大方其の全身に現はれて居る病的な美の爲めであつたのだらう。尤も西洋婦人崇拜の私の眼から見ればこそ病的ともなるのだが、女と云へば神韻漂渺として風に吹かれて消えてしまひさうな、弱々しい柳腰花顏の姿態を有難がる支那人に見せたら、或はこんなのが眞の東洋的、——支那式美人の典型かも分らない。前にも云つたやうに支那婦人は凡べて小柄で童顏なのが多いから、夫人と云はず娘と云はず年齡を中てるのはなかなかむづかしいが、此の令孃などは若し其の髮を娘風に結つて居なかつたら、さうして目鼻立ちの或る部分にぼうつとしたあどけなさがなかつたら、彫刻的な均齊を持つた立派な容貌の爲めに、

實際よりはずつと大人に見られるかも知られない。先づ若くて十六七、取つて居てもよもや十九にはならないだらうと私は想像した。

一週間ほど滯在する豫定であつたから、細かい名所舊蹟はいづれゆつくり見て廻る積りで、先づ大體の地勢を捜るべく朝から輿を雇つて湖畔をぐるりと一と周りした私は、くたびれ切つて夕方の四時過ぎにホテルへ歸つて來た。今夜は湖上で心ゆくばかり月夜の景色を眺めようと思つて、ゆふべのうちに畫舫を頼んで置いたやうなものゝ、あまりくたびれたせゐか體を動かす勇氣がない。又ぞろヹランダの籐椅子に凭れながら暫くの間茫然と黃昏の湖山の風致に見惚れる。ゆふべは夜ではつきりと分らなかつたけれど、ヹランダの下は庭になつて居て、蓮池の周圍に柳、椿、楓などが植わつて居る。汀にさゝやかな六角の亭がある。亭の階段から石甃の床の上に夥しい菊の鉢が列べてある。庭を圍つて居る白壁の土塀には蔦が一面に絡み着いて居る。塀外の往來に群集がうようよと寄つて人垣を作つて居るので、何かと思つたら大道藝人が劍を振つて居合拔のやうな事をやつて居るらしい。水滸傳中に豪傑どもが町のまん中で棒を使つたり槍を振つたりする光景が描かれて居るのは、蓋しかう云ふ先生たちをモデルにしたものかも知れない。其處は延齡路の廣い四つ辻で、そゞろ歩きの連中が可なり賑やかに往き來して居る。生の甘蔗を賣り歩く商人なども交つて居る。此の邊では甘蔗が駄菓子の役を勤めて居て、大人でも子供でも其れを買つてはガリガリと嚙るのである。四つ辻の右の方は湖水に面する石垣で、岸邊の碼頭には數艘の畫舫が繫がり、銀の鈴に赤い房を垂らした美しい轎が其の傍に五六臺憩うて居る。

町の向うの湖へ眼を轉じると、夕日は今や吳山の後ろに迤邐として連なつて居る慧日峰と秦望山との

間に、眠い眼瞼を閉づるが如く靜かに安らかに沈みかゝつて居るのであつた。きのふ見る事の出來なかつた雷峰塔は、吳山からものゝ一尺ばかり離れたあたりに、こんもりとした南屛山の翠嵐を抽んでゝ聳えて居る。今から千年近くも前の、遠い五代の世に建てられたと云ふ塔は、幾何的の直線がぼろぼろに壞れて玉蜀黍の頭のやうになつて居ながら、それでも煉瓦の色だけは未だ悉くは褪せてしまはずに、斜陽を浴びて一層あかあかと反射して居る。私は此處で圖らずも西湖十景の一つに數へられて居る「雷峰夕照」を見たのである。塔より更に右へ寄つた遙かな湖上の島際は、ゆふべ推察した通り三潭印月であつた。島の東側の綠樹の間に白い物がちらちらするのは、恐らく退省庵の壁であらう。湖心亭のある小島は其れから又ずつと右の方の、私の眼界が限られるあたりのひろびろと擴がつた湖の中央に、漫々たる波に包まれて捨てられた如く置かれて居るのである。ふと見ると、一艘の輕舸が、杭州城の淸波門のほとりにある楊柳の影から、一直線に雷峰塔の下を目がけて漕いで行く。水の面があまり穩やかに船があまり小さいので、疊の上を一匹の蛾が這つて行くやうにも見える。直ぐ眼の前の亭子灣からも一艘の扁舟が仙樂園の岬の方へ漕ぎ出した樣子である。その船にはたつた一人の船頭が中央に腰をかけて、手と足とで二挺の櫓を動かしながら進んで行くらしい。いつの間にやら日は全く沈んでしまつた。が、西の山の端の後ろの空は、暗くなるよりは寧ろ明るく、次第々々に紅の色に燃え上つて、遂には湖の半面が赤いインキを流したやうに染まつて行つた。

　例の美人の姉妹たちは見物に出かけたきりまだ歸つて來ないのだらう。今朝彼女たちが占領して居たヱランダのテエブルには、荒い辨慶縞の羅紗の上衣をどてらのやうにだぶだぶに着込んで居る太つた西

洋人の女が、獨りぽつ然と頰杖をついて居る。何の氣なしに私が其の前を通りかゝると、

「あなた東京から來ましたか。」

と、突然彼女は日本語で話しかけた。

「いや、東京からではない、北京から來たんです。あなたは東京に居たことがあるのですか。」

「えゝ、東京にも、大阪にも、コオビ(神戶)にも居ました。そして日本語を少し覺えました。」

きつと上海あたりから張りに來た淫賣だらうと思つたので、

「どうです、あなた一人なら私と散歩に出かけませんか。」

かう云つて誘ひをかけると、

「いゝえ、私一人ではありません。旦那と一緒に來て居るのです。」

と云ふ。旦那が一緒ではどうも仕方がない。據んどころなく此方も一人で、今夜も亦迎紫路の錢湯へ這入りに出かける。

* * * * * *

夕食を濟ませた後、ホテルの後ろの碼頭から畫舫に乘つて出たのは其の晩の九時ごろであつたらう。東岸に沿うて湧金門から柳浪聞鶯の方へ漕いで行かせながら、私は舳に坐を占めて一點の曇りもない大空の月の光を滿身に浴びて居た。いかに隈なく晴れ渡つた宵であつたかと云ふ事は、湖を取り卷いて居る四方の山々や、汀に近く女の洗髮のやうに項垂れて居る楊柳や、稀には岸邊の樓閣などまでが、一つ一つ其

影を水面に落して居たのでも大凡そ想像することが出來るだらう。嘗て潯陽江邊の甘棠湖の月を觀た時に、雄大な廬山の山容が水にくつきりと映つて居るのを眺めた覺えはあるけれど、今夜の月はあの時にも増して朗かである上に、湖の廣さも亦甘棠湖よりは遙かに大きい。水の面と云ふものは其れでなくても斯う云ふ晩には實際よりひろびろと見えるものだが、船がだんだん陸を離れるにつれて、私の行く手に湛へられて居る湖の水は腹が膨らがるやうに底の方から盛り上つて來て、次第に岸を遠くの方へ追ひやつてしまふのである。こゝでちよいと斷つて置きたいのは、西湖の風景が美しいのは主として其の湖水の面積が、洞庭湖や鄱陽湖のやうな馬鹿々々しい大きさでなく、一と目で見渡される範圍に於いて蒼茫とした廣さを持ち、優しい姿をした周圍の山や丘陵と極めて適當な調和を保つて居る點にあるのだと思ふ。雄大だと思へば雄大なやうにも見え、箱庭のやうだと思へば箱庭のやうにも見え、その間に入江があり、長堤があり、島嶼があり、鼓橋があつて、變化はありながら一枚の繪を擴げた如く凡べてが同時に双の眸に這入つて來るのが、此の湖の特長である。今夜にしても船が進むに隨つて、無限に大きく大きく開いて行くやうに覺えながらも、陸は決して地平線の向うへは隱れてしまはない。が、その實岸邊の山だの森だのは、地平線より却てずつと遠くにあるものゝやうに感ぜられる。首を擧げて四方の陸をぐるりと眺め廻した後、今度はそろそろと眼を下の方に向けると、私の視野に這入るものはやがてたゞ一面の波ばかりになつてしまつて、何だか船が水の上を渡つて居るのではなく、水の底に沈みつゝあるやうな心地がする。もし人間がほんたうに斯う云ふやうな心持ちで、靜かに靜かに船に搖られながら、うとうとと水の底へ沈んで行く事が出來たなら、溺れて死ぬのも苦しくはなからうし、身を投げるのも

悲しくはあるまい。おまけに此の湖の水は、月明りのせゐもあらうけれど、さながら深い山奥の靈泉のやうに透き徹つて居るので、鏡にも似た其の表面に船の影が倒まに映つてゐなかつたら、殆んど何處から空氣の世界になり何處から水の世界になるのだか區別が付かないほど、底の方まではつきりと見えて居るのである。吃水の淺い、草履のやうに薄つぺらな船の上に横はつて、水と空氣との相觸れる平面を滑らかに進んで行く私の體は、たゞ濡れて居ないのが不思議なだけで、時には全く水の世界に潜入したと云つてもいゝくらゐである。舷に顔を出して底を視極めると、深さは漸う二三尺か四五尺よりない。林和靖が「疎影横斜水清淺」と云つたのは恐らく此の湖のことであらうが、「水清淺」の意味と美しさとは、かうして此の底を眺める時に、始めて明かに會得することが出來る。私は先、深山の靈泉のやうに透き徹つて居ると云つたけれども、たゞ其れだけでは、到底此の時の感じを云ひ現はすには物足りない。なぜかと云ふのに、此處に湛へられて居る三四尺の深さの水は、靈泉の如く清冽なばかりでなく、一種異様な、例へばとろゝのやうな重みのある滑かさと飴のやうな粘りとを持つて居るからである。此の水の數滴を掌に掬んで暫く空中に曝して置いたなら、冷やかな月の光を受け留めて水晶の如く凝り固まつてしまふだらう。私の船の櫓は、そのねつとりした重い水を、すらりすらりと切つて進むのではなく、ぬらぬらと捏ね返すやうにして操られて行くのである。をりをり櫓が水面を離れると、水は青白く光りながら、一枚の羅衣のやうに其れへべつたりと纏はり着く。水に纖維があると云つてはおかしいけれど、全く此の湖の水は、蜘蛛の絲よりも更に微かな、さうして妙に執拗な彈力のある纖維から成り立つて居るやうにも感ぜられる、兎に角にも綺麗に澄んだ水ではあるが、輕快ではなく寧ろ鈍重な氣分を含んだ水な

のである。そんな感じがするのは、一つには其の水底に蒼苔のやうな細かい藻草が密生して居て、柔かい天鵞絨の床の如く暗緑色の光澤を反射して居るせゐでもあらう。實際其れは、非常に精巧な、驚くほど美しいつやと潤ほひとを持つた天鵞絨と云ふより外に適當な言葉を知らない。さうして大空の月の女神は其の天鵞絨の地質を一層つやつやと光らせる爲めに、無數の長い銀の絲で蛇のうねりの如き波紋を一面に縫ひ取つて居るのである。こんな美しい織物が人間の世界にあつたなら、東京に居る私の大好きな女優のB子の肌に着せてやりたいと思つたくらゐだつた。若し此の湖に仙女が居るならば、彼女の纏ふべきマントの色は、必ず此の天鵞絨であるに違ひない。底が餘りに淺い爲めに、どうかすると櫓は心なくも其の天鵞絨の面を掻き亂す。ぱつと砂埃が風に舞ひ上るやうに、濁つた泥が圓い輪を描いて煙の如く水中に浮び上る。

柳浪聞鶯の前を通り過ぎた船は、今度は進路を西に取つて湖の中心へ漕いで行つた。左岸に黒くかたまつて居る背の低い一とむらの林は、恐らく桑畑か何かであらう。右岸はと見ると、——船が私の知らぬ間にぐるりと方向を一轉したので、何だか斯う、急に眼が廻るやうに周圍が濶然と打ち開け、寶石山の保叔塔が波に沒しかゝつた帆柱のやうに、遙かな空にぼうッと夢の如く淡く霞んで居る。その左の葛嶺の山の裾に、灯がちらちらと瞬たいて居るのは新々旅館だらう。此處から眺め渡した樣子では、向う岸までは非常に遙かで、西湖は海の如くひろがつて居る。しかし海にしては水面が穩やかに過ぎて殆んど波らしいものは眼に止まらない。私の體が虫けらのやうな小さなもので、偉大な大理石の圓盤の中に置かれて居るのかとも想像される。子供の時分に、野原のまん中などで、眼を潰つてぐるぐると廻つた後

で又ぱつと眼を開くと、よくこんなひろびろとした、氣が遠くなるやうな天地の大いさを感じた覺えがある。だが其れよりも尙不思議なのは、そんなに廣々として居ながら、何處まで行つても水は依然として二三尺の、――或はせいぜい人間の胸のあたりまで漬かるくらゐな深さしかない。西湖は湖ではなくて恐ろしく大きな池であるかの如くに、その時しみじみと感ぜられたのであつた。巨人が箱庭を作るとしたらきつと此の西湖のやうなものが出來るに違ひない。此の湖が此のやうに靜かなのは、さうして其の面にあらゆる物象が鮮かな影を印して居るのは、畢竟水底が斯くの如く淺い爲めに波らしい波が立たない結果なのであらう。盥の中にも山の影は映るやうに、たとへ二三尺の深さでも水はやつぱり水である。正面に鬱蒼と堆く聳り上つて居る孤山の翠嵐を始めとして、その左に低く長く、女性的な優雅な曲線を起伏させて居る天竺山、棲霞嶺、南高峯、北高峯の山々が、月の光に融けてしまひさうに朦朧と消えかゝりながらも、猶その影を一つ一つ倒まに映して居る莊嚴な姿に接した時、どうして此の湖の水底(みなそこ)の淺さに考へ及ぶ餘裕があらう。

「おい、暫く此處で船を停めてくれ。」

ちやうど湖心亭から七八丁手前まで漕いで來た折に、私は不意に斯う云つたのである。船頭は何の譯やら分らずに操つて居た櫓を措いて、艫の方に腰をおろす。畫舫は舵を失つた捨小舟も同然に、湖上に綴漫な圈を描きながら波のまにまに放ちやられて漂うて居る。左舷に近く、雷峰塔の長い形が水に落ちて鰻の如くゆら〳〵と搖(ゆ)れて居る。その外に動いて居る物は一つもない。若しあつたとすれば、其れは塔の左側の高い空から少しづゝ右の方へ移りつゝあるまんまるな月の影だけであつたらう。遙かな孤山の麓、

の、文瀾閣のあたりかと思はれる方角で篝火を焚いて居るのが赤くちらちらと見える。ぢいッと耳を澄まして居ると、死んだやうな寂寞の底に、何處からともなく笛の音が微かに微かに聞えて居る。

彼方、月は小山の上に肱つきて
水の上ゆくわが舟の靜さに聽入りつ……
新しく折りて來し大百合の花三つわが脱ぎすてし上衣の上にてしほれゆくなり。

おゝ、色青ざめし樂欲の夜よ、汝が居の方へ。
忍び倚るは百合の精なるか、はたわが魂なるか？
銀の夜の黑髮は長き葦の葉と垂れかかる……

水の面の月のごと
波間を滑る櫂のごと
わが心嗚咽となりて散りかかる！

（堀口大學氏譯）

私はふつと、サマンの詩の數節を想ひ出した。さうして再び項を垂れて水の面に眺め入つた。どう云ふ加減か、あれ程はつきり透き徹つて居た水底は、表面がガラスのやうに光つてゐるのでもう見えなくなつて居る。が、猶も一心に瞳を凝らして視詰めると、そよとの風も吹かないのに、恰も溜り水が地震で搖れて居るやうな工合に、湖上にはちりめんの如き細かな波が極めて神經質にあたふたと打ち顫へて居るのであつた。

私の船が再びゆるゆると動き出したのは、其れから三十分ばかり過ぎた時分であつたらう。湖心亭と三潭印月との間を通り、阮公墩の小さな島を右に見て、湖を東西に中斷して居る蘇堤の方へ漕ぎ寄せる。長い長い堤の上にはところどころに桑畑があり、その間を點綴する楊柳の並木が、びつしよりと濡れたやうなまめかしい枝を繁らせて居る。蘇東坡が築いたと傳へられる所謂蘇堤の六橋のうち、左から數へて第一の映波橋と第二の鎖瀾橋とは樹蔭に隱れて居るけれども、第三の望山橋と第四の壓堤橋とは私の船の行く手にあたつて弓の如く反つて居るのである。

「おい、あの望山橋の下をくゞつて向う側の湖水へ漕いで行つてくれ。」

「彼方へ行つたつて何も見る物はありません。それに向う側は水が淺くつて底の方に草が一杯生へて居るので、船を入れるには都合が惡いんです。」

船頭はちよいと當惑したやうな顏つきをする。

「都合が惡くつても構はない。まあ行けるところまで行つて見てくれ。」

私がかう云つて促すと、彼は不承無精に舳を望山橋の方角に向ける。

蔦かつらの絡み着いた古い石造の鼓橋が、圓い弧の形を其のまゝ水面に映して居るので、船は完き環の中を貫いて行くのである。橋の下を半ば潛り抜けたかと思ふ頃、俄かに船底がガサガサと騒々しい音を立て始める。成る程船頭が云つた通り、其の邊には長い藻がどつさり繁茂して居て。風に揉まれる薄のやうにゆら〳〵と靡きながら、船の底を熊手で掻るやうに荒々しく引掻いて居るのである。が、ものゝ十間も漕いで行くと藻はだんだん疎らになつて水が又少し深くなつたやうであつた。ちやうど其の時、私の船から五六尺離れた水中に何か白い物がふわふわして居るらしいので、側近く漕ぎ寄せて行くと、其處には一箇の女の屍骸が藻を蓐にして横はつて居た。仰向けに寢て居る顔の上には、ガラスよりも薄いくらゐな淺い水がひたひたと打ち寄せては居るものゝ、月の光は其れを射徹して却つて空氣の中よりも明かに、若々しい屍骸の容貌に焦點を作つて居るのである。女は昨日以來汽車の中で、清泰ホテルのエランダで、度び度び會つた事のある美しい令孃に紛れもない。兩眼を閉ぢて、兩手を胸の上に組んで、安らかに身を横へて居る様子から判斷するのに、恐らくは覺悟の自殺であらう。それにしても其の表情に微塵も苦悶の痕を留めて居ないのは、どう云ふ死に方をしたのであらうか？　ひよつとしたら死んだのではなく、すやすやと眠つて居るのかと思はれるほど、その顔は穩やかに且生々しく輝いて居る。私は舷から出來るだけ外へ半身を乘り出して、屍骸の首の上へ自分の顔を持つて行つた。彼女の高い鼻は殆んど水面と擦れ擦れになり、何だか息が私の襟元へ懸るやうにも感ぜられる。あまりに彫刻的で堅過ぎる憾みがあつた其の輪廓は、濡れて浸つて居る爲めに却つて人間らしい柔かみを持ち、黒味がゝつて居るほど青かつた血色さへも、垢を洗ひ落したやうに白く冴え返つて居る。さうして、上衣の繻子の青磁色は、朗々

とした月の光に其の青みを奪ひ取られて、鱸の鱗の如く銀色に光つて居たのである。

ふと氣が付くと、胸の上に載つて居る彼女の左の手頸には、今朝も私の眼についたあの小さな金の腕時計が、十時三十一分を示しつゝ未だに生きて時を刻んで居た。そのさゝやかな微かな針のチヨキチヨキと動いて行くのが、水の中に際やかに見えたくらゐだから、どんなに晴れ渡つた月夜であつたかは讀者にも想像が出來るであらう。……

(をはり)



巴西俠

江口渙

張鎚は鐙にかけた兩足を心持踏ん張つてぐいと大きくのびをすると一緒に、一つ嚔をした。どうも腰のあたりがうすら寒い。

「今日も亦これで日が暮れるのか」

かう思ふと一寸心細さが湧いて來たが、彼はそれを無理にも拂ひ落すやうに、二度ほど強く頭を振つた。そして、思ひ出したやうにぴしりと鞭を馬の尻に加へた。

朝からもう何里來たか知れない。然し途は昨日と同じく、又、一昨日と同じく、矢張斧で深く切り込んだやうな嶮しい峽谷の間を、唯、無闇に右から左へ左から右へと縫つてゐるばかりである。途と云つてもほんの鼬道同樣で、どうやらかうから一頭の馬を通じることが出來るに過ぎない。

溪を挾んでゐる兩側の山々は、見上るばかりに聳え立つてゐる斷崖を鋭く相迫らせながら、何處までも何處までも續いてゐる。溪が迂餘曲折するに從つて、その山々はいろいろ形を變へはするが矢張飽くまで迂曲を追つて走つてゐ

るのが、見やうによつてはこれほど美しい溪をどうしても自分達の袖の中から放したくないと云つた風である。然かもどうかすると思ひ切り大きな山の襞が、あまり鋭く溪の眞中へ喰ひ込んでゐる場合などには、それに遮られた途は止むなく虹のやうな棧道となつて斜に高く懸崖を攀ぢるのである。

涎が最初の棧道を渡つてからもう四十餘日にもなる。然し途は何時まで經つても同じやうな峽谷を縫つて、同じやうな岨道と棧道とを行くのである。そしてこれから先きもそれがまだまだ幾日か續くらしい。涎はもう少なからず飽き飽きした。

涎はそれまで何年かの間、盧溪にある一衙門の衙卒の長を勤めてゐた。ところがこのたびたまたま母の喪に會つたので官から一ヶ年の賜暇を得て、久し振りに鄕里に向つて歸るのである。涎の鄕里は蜀の地でも可なり南よりの鳳嶺の北の麓の近くにあつた。從つて盧溪から急いで鄕里へ歸らうとすれば、嫌でも應でも秦嶺の嶮を越え、續いて巴山の嶮を越えなければならない。先きにやつとの思ひで秦嶺を越した彼は、更に、世の中の山と云ふ山を一つ殘らずあつめて來たかと思はれるほどに折り重つてゐる巴山一帶の群峯の間を、北から南へ斜に縫つて、所謂「天下第一之險」を今やうやく三分の二ほど越して來たところであつた。

「今夜こそはどうにかして柔い褥に長々と手足を伸ばして、ぐつすり好い氣持に寐たいものだが」

口に何度となく考へる同じ考が、かうして日が暮れかけて來ると更めて又しみじみ心の底から湧いて來た。そして、「もう、そろそろ人家が見えても好ささうなものだ」と云ふ風なことをぼんやり考へなが

ら、彼はあてもなく行手の溪を瞰下（みおろ）したりした。

溪は何時の間にか薄い鼠色に暮れかけて來た。先刻まで空の夕燒の色を映（うつ）して、山のところどころを點のやうに彩つてゐた紅葉のむれも、今ではすつかり暮色の中に融け込んで終つた。深い深い溪の下からは、時々底力のある瀨鳴りの響が聞えはするが、もう水らしいものの影も見えない。唯、一度か二度、早瀨が岩を嚙むのかしらと思はれるものが、うす白く絶壁の裾を染めてゐるだけであつた。溪の底には何時の間にか早くも柔かな乳色の夜霧の縞が、細長く流れてゐるところさへあつた。

やがて途が思ひ切り峻しい山の襞を一つ廻ると、溪が心持大きく開けてゐるところへ出た。その時、鎰は直ぐ向ふの同じやうな襞の中程を、人の影らしいものが一つ、こちらへ向つて歩いて來るのを見懸けた。多分右手の溪の懷に沿つて行けば、途は自然とそつちへ通じてゐるらしい。

「人に逢ふほどだから村はもうそんなに遠くはあるまい」

かう思ふと鎰はやつと少し元氣が出て來たので體のつかれを取り返しでもするやうに一とゆすり腰をゆすつた後で、尚、一層馬の手綱を引き締めた。するとその人影も向ふの途をずんずん急いで來る。藍色に染つた夕方の薄明りの中を急ぎ脚にやつて來るのが、何か輕いものが風に流されてゐるやうである。その裡に人影は溪の懷の奥に懸つてゐる小さな橋の袂まで來るとそのまま鎰を待つもののやうに立ち止つた。

「手前の主人からあなたをお連れ申すやうに云ひつかりましたので、ここまでお迎へに出ましたのですが」

鋋が近附いた時、男はかう云つて恭しく一揖した。小型な胸あてをして短い矛を持つてゐる様子が、どうも何處かの番卒らしい。

「實は主人が今夜是非お宿をいたしたいと申しますので……甚だ突然で怖れ入りますが」

少し話が思ひ懸けないので、鋋が不思議さうに鞍の上から相手の様子を眺めてゐると、男は下からそれを見上げて、更にかう云ひ足して又一揖した。

「御主人と云ふのは、この邊の太守か何かでいらつしやるのか」

「いいえ。巴西侯です」

「巴西侯？」

聞いたことのない名前なので少し相手の見當がつきかねたため、鋋は鸚鵡返しにかう訊いた。

然し、かうやつて番卒を迎へによこすところを見ると主人と云ふのは例ひ太守でなくつてもとにかく相當の人であるらしい。その人が禮を厚くして迎へてくれるのを、大した官にも就いてゐない自分がさうさうことわるわけにも行かない。それに、今夜泊るところが格別きまつてゐるのでもなし、又馬も自分もすつかり疲れてゐるので鋋はそのまま一緒につれられて行くことにした。

「では、私が轡をお取り申しませう。大分日も暮れて來ましたやうで、少し急がないといけませんから」

男はかう云つて、左の手で馬の轡を取つて右の手で矛を肩に支へながら、先へ立つてずしんずしんと大股に走り始めた。山途に慣れてゐるためか、脚はなかなか早い。その勢に促されて馬も段々元氣を回

復したらしく、幾度も首をゆすり上げては、嬉しさうに房々とした鬣を振つた。

「とにかくこれで今夜はどうやら久し振りにらくらくと寐られるらしい」

かう思ふと、鉦は今まで山の中の一人旅に張り詰めてゐた心持がゆるんだためか、連日の疲れが段々出てくるにつれて、何時の間にかうつらうつらと睡氣を催して來た。それに馬が好い調子でだくだくを踏むので、その度に鞍壺から輕くゆすり上げられる體が、子供の時分、母親の手でゆすられた時のやうにうつとりするほど好い氣持である。その上、輕く地面を叩く蹄の音が、藍をぼかしたやうな淡の夕闇に消えて行くのが、何處か遠くで鼓を鳴らすやうにも聞える。つい鼻の先で鳴る轡の音さへ、その時の鉦にとつてはどうやら夢の中で聞いてゐる音のやうにも思へた。實際は、鉦は鞍壺の上へそのまゝつすり寐込んで終ひたいやうな心持がした。

その裡に體が一とゆすり烈しく橫にゆすられたので、はつと氣がついて眼を醒ますと、馬は何處かの大きな樓門をくぐつて、細長く敷き詰められた石疊の上を靜かに歩いてゐる。あたりは何時の間にかもうすつかり夜であつた。

見ると眞直ぐに續いてゐる石疊の白い線が何時か夜の色に消されて見えなくなつてゐるあたりには、今と同じやうな樓門がいくつもいくつも黑い影を重ねて立つてゐる。その衝きあたりには遠くからでさへ、見上げなければならない程に高く幾層かの殿堂が嚴めしい鈎形の屋根を、くつきりと闇の中に浮き上らせてゐた。そして、それ等の樓門や殿堂の窓と云ふ窓からは、一つ殘らず、眩ゆいほどの光がさしてゐるのが見える。

鋌の馬は矢張り轡をとられたまま、その樓門を一つ一つ順々にくゞつて行つた。石壘の兩側に茂つてゐる樹は段々大きな森にでも續いてゐるらしく、唯一と色の闇で塗り潰されたやうに何の影も見えない。何處か遠くの方から蟲の聲が、靜かな雨のやうに聞えて來た。最後の樓門をくぐつた鋌は、數へきれない程つながるやうに點いてゐる殿堂の灯に明るく半身を照されながら、しばらく右手の方へ導いて行かれたが、やがて眞暗な森の奧に一つ離れて立つてゐる亭の中へ案内された。その亭で少しの間待たされた後、鋌は更に別な室へ導かれた。

堂の中には幾つも部屋がつづいてゐて、その最後の部屋は向ふが見えないほどの廣さである。その上、壁も扉も床も天井も悉く「蜀江錦」とでも云ひさうな金襴で一面に張り詰められてゐるので、部屋の中は何處からともなく自然と光を放つて、殆ど眼を開けてはゐられないほどの眩しさである。それをぢつと我慢してあつちこつちと見廻してゐると、錦の中の燃え立つばかりに赤い紅葉の梢が、それを埋めてゐる銀の雲と一緒に段々部屋の中を流れ始めたり、銀と碧との波頭に輕く弄されてゐる金の砂が、何時の間にかきらきらした霞となつてすつかり床の上を埋めたりする。張鋌は次第に激しくなりかけて來た空腹をかかへたまま、ひとりぽつねんと、しばらくその眩ゆい光の中に待たされてゐた。

やがて何處かで鋌の馬が、俄かに氣魂しい叫を上げて、どつと闇の中に倒れる音がしたので、彼は思はず息を殺して立ち上つた。表で何事かあるらしい。と思ふ間もなくどしんどしんと云ふ重々しい廊を踏む響が聞えて、直ぐ錦の扉が靜かに外から開かれた。見ると鴨居よりも高い程の大きな男が、幅の廣い肩を聳かしてぬうつと外に立つてゐた。

その人は金茶色に燿く袍をゆつたりと着流して、頭には赫灼たる金の冠を戴いてゐる。その思ひ切つて大きい顔は火よりも赤い。そして角張つた下顎と分厚く横に延びてゐる唇と、わけても、眼窩の奥で物凄く輝く瞳とは、見る者の心を飽くまで威壓せずには置かないと云ふ風である。その様子にすつかり脅されてしまつた鋌はしばらくぼんやりと立ち竦んだが、やがて怖る怖る禮を盡して一揖した。

金冠の人は應揚な態度で禮を返したが、やがて部屋の上み手に据えてある一段高い席につくと、袍裾をさばいて南面して座つた。そして、靜かに鋌を見下して始めて口を開いた。

「私が巴西侯です」

低い底力のある聲である。鋌は、又、前よりも一層禮を厚くして揖した。

「私はこの巴西の山に永年住んでゐるものですが、今日、私の誕生日にあなたがたまたま近所をお通りになつたので、ついここまでお呼びいたした次第ですが、どうか今夜はすつかりくつろいで下さい。あなたはたしか廣溪の衙門に勤めてゐる方ですな」

「はあ、衙卒の長をしてゐる張鋌と申す者です。私のやうな者をかうしてわざわざお招き下さいまして、まことに有難うございます」

巴西侯の言葉つきが思つたよりも優しかつたのと、自分の何者であるかを知つてゐてくれたのとで、やうやく心を落ち着けることの出來た鋌は、深くその好意を謝して、又、更めて禮を云つた。そして、たとひ衙卒の長と云ふやうな低い身分でも、それが役人である以上、田舍へ來るとこんなにまで厚くもてなされるのかと思つた時、鋌はつくづく自分が官に任へてゐることを滿足に思つた。

間もなく幾十人の侍女に依つて、數へきれないほど盃盤酒觴の類が運び出されて、侯と鉦との間に靜かな酒宴が始つた。酒宴を助ける侍女達の着物の色と、置き竝べられた器の色とは、あたりに漂つてゐる光を返して眼も醒めるばかりに鮮かである。

少し醉が廻つて來たかと思ふ頃。巴西侯は先刻鉦をここまで導いて來た使の者を呼んだ。使の者が下手の閾の外に膝をついて怖る怖る拜むやうに頭を下げると、侯は先づ侍女に云ひつけてその男にも盃をとらせた後で

「又、御苦勞だが例の六人の者を呼んで來てくれないか。今夜は蜀の張鉦と云ふ珍らしいお客樣が見えたから、みんなもここへ來て一緒に酒を飲むやうにさう云つてくれ。いいか。急ぐんだぞ」

侯はかう云つて、又、月ほどの大きさのある金の盃をぐつと乾した。先刻見た時には愴いほどにたくましかつた顏の色も、何時の間にかすつかり和らいでしまつた。

使の者が出て行つたかと思ふと、さう大して時間の經たない裡に遠くの方から廊下を踏む多人數の足音が聞え出した。鉦はどんな人達が入つて來るのだらうと思ひながら、更めて又、崩れかけた自分の居ずまゐを直した。すると間もなく呼ばれた六人の者がどやどやと部屋の中に入つて來たが、みんな一人一人侯に向つて丁寧に頭を下げた。そして、侯が顎で輕くそれに答へるのを待つて、始めの四人は盃盤を圍んで東西南北に、後の二人は侯の座に近く左右に岐れて各々の席についた。その時侯はみんなのものを初めて張鉦に引き合はせた。

四方に座つたのは、白額侯、六雄將、滄浪君、五豹將の四人である。侯の左右にゐるのが鉅鹿侯と玄

丘校尉とである。みんな誰を見ても如何にも風采が堂々としてゐるところから推して、どうしてもこの邊の貴人らしい、引き合はされるまゝに、鈕はいちいち丁寧な初對面の挨拶をしては、禮を厚うして盃をさした。

白綾侯は眞白に光る絹か何かの分厚な着物を着て、頭には透き通るほどに綺麗な白玉の冠をいただいてゐる。鋭い鎌型に跳ね上つた銀色の髯と、ぎらぎらと峻しく光る大きな眼と、わけても頰にはつきり殘つてゐるいくつかの傷痕とは、一と眼見ただけですつかり鈕の心を脅かして終つた。六雄將は黒い裘に鐵の冑をかぶつて、人の好ささうな眼を小さく動かしてゐる。滄浪君は青い袍に碧玉の冠を戴いてはゐるが、物を云ふたびに大きな白い齒をぐつとむき出すのがどうも不釣合である。黄色の地に漆よりも黒い斑を一面散らした衣を着てゐる五豹將は、一番小柄ではあるが凡ての感じが如何にもきりつとしてゐる。中で鉅鹿侯が一番年嵩らしい。大きな角のついてゐる冑を少し阿彌陀にかぶつて焦茶の裘を着てはゐるが、白髮まぢりの短い顎髯を握りながら、ともすると柔和さうな眼を細くしてはうと〳〵と居睡をする。唯、玄丘校尉の尖つた鼻と少さな眼とをきよろ〳〵と絶えず他人の態度を盜み見るのが、妙にその一團にそぐはなかつた。鈕はさゝれる盃を返す度に、それ等の人々の樣子をいち〳〵丁寧に眺めては、心の中で頻りにみんなの身分をいろ〳〵と考へたりした。

その裡に酒宴は段々盛んになつて行つた。殊に主人の巴西侯がひどく機嫌の好いためか、絶えずその大きな赤ら顏の相好を崩しては喉から押し出すやうな聲を上げて笑ひ續けるので、それに釣り込まれてみんなもすつかり浮き〳〵となつて終つた。何時の間にか部屋の中の壁に近い兩脇には牡丹の花をずら

りと並べたやうに、若い女が幾側にも居流れて一齊に晴れ〴〵した管絃を奏し始めた。そして、別な側からは一と組づゝ違つた色の着物を着た女が現はれては、若々しい肌が見えるほどに透き通つた羅の袂を輕く飜へして踊つたり、金絲の繡のある袍の裾を亂しては華やかに舞つたりした。その度に窓にかけた錦の帷が輕く動いた。

鋋は空き腹の上へ輿に乘つて無闇に盃を重ねたゝめか、間もなくすつかり醉つて終つた。それにまたしても連日の疲れが出て來たので、ともすればうと〳〵と居睡が出さうである。彼はそれをぢつと我慢しては、幾度も睡むさうな眼を大きく開いた。然し矢張り何時の間にか周圍のものがぼうつと淡く霞んで終つたり、管絃の音の波が聞えないほどに遠去いて行つたかと思ふと、耳の直ぐ側で俄かに渦を卷いたりした。そして、いろ〳〵色の違つた裳を飜してはきらびやかな女の群が、あつちこつちと動く度に、それが、時には風に煽られて梢から雪崩れ落ちる花吹雪のやうにも見えたり、時には入り亂れて空を流れる秋の夜の星のやうにも見えたりする。その上、部屋の四方を圍む綿の壁や帷の中から、金沙の雲や銀の波頭がぬけ出して來ては何時の間にかきらびやかな霞となつてそれ等のものを包んで終ふ。鋋には何處からが夢で、何處までがほんとうであるかどうもはつきりした區別がつかなくなつた。

かうして可なりの時間が經つた。鋋はつと氣がつく度に盃を乾し、又、氣がつく度に盃を乾しては、薫の高い花の中へ身を埋めて終ひでもしたやうな、うつとりとした醉心地になりながら、何度も夢と現の界を往たり來たりした。

その裡に、輕く肩を叩かれたので、鋋ははつと驚いて眼が醒めた。見ると銀の鎌臂を立てた白額侯の

鋭い顔が直ぐ自分の顔の側にあつた。

「大分、お睡いやうですな」

白額侯はかう云つて鎚に大きな盃をさしながら、注意深く眼を見張つてじろ〲と彼の體を眺め廻した。そして、しばらく間を置いだ後で

「お見懸けしたところ、あなたはなか〲好くおふとりのやうですが」

と云つて、又、更めて鎚を眺めた。

「えゝ。子供の時分から格別思つたこともないものですから……」

「成程さうでせうね。一寸見たゞけも如何にもうまさうに見えますからな」

「ははゝゝゝ：　お冗談を　：　」

鎚が輕く笑つて盃を返へすと、白額侯は何故か俄かに眞顏になつて、瞳を据えて鎚を見詰めた。

「あなたに是非聞き入れていたゞきたいお願ひがあるんですが」

「えゝ。私で出來ることなら何でもいたしますが。」

「無論、あなたでなければ出來ないことです。然し、又、あなたならば今直ぐにでも出來ることなのです。」

「では、何をしろとおつしやるのです」

「なあに、何でもないことなんですがね。實は、私、今日まで夜食を喫べてゐないので、如何でせう。あなた一つ私のために喰物になつてくれませんか」

相手の言葉の意味がどうもはつきり呑み込めなかつたので、鋌は直ぐに訊き返した。
「食物とおつしやつたところで、あなたが何をお好きだか、一寸私に解りかねますが」
「いや。他のものぢやないんですよ。あなた自身の體ですよ。その體が喰べたいのです」
「私の體を……」
と云ひかけたが、じつと見据えた白額侯の顏附があんまり物凄いので、俄かに呼吸が詰つて見る見る口が硬張つて終つた。すると、相手は尚も疊みかけて
「一寸見ただけでも、實際、うまさうですがな。今、ここで直ぐに如何でせう」
かう云つた白額侯は、その顏を尚も突き出して、二三度烈しく小鼻をうごめかした。と思ふ、と矢庭に毛だらけの手を出して鋌の手首をぐつと握つた。その時、鋌は思はず驚の叫びを發して、その手を力の限り振り拂つたが、すつかり體が竦んで終つて、もうどうすることも出來ない。相手は鋌を見据えながら、尚もぢりぢりと寄つて來る。食慾をそそられたその大きな口には、もう唾が一つぱい溜つてゐるらしい。何時の間にか體中が全く硬張つてしまつた鋌は、骨の中から泌み出すほどの烈しい惡寒を覺えるとともに、段々手足が慄え出した。
それを見て居た五人の貴人は、みんな一度に大きな聲を上げて腹を抱へて笑ひ出した。中で青袍碧冠の滄浪君は、白額侯が喰べるのなら自分も一緒に喰べたいと云つた風にぐいぐいと低く喉を鳴しながら、段々鋌の方へいざつて來た。
するとその時である。今まで默つて凡てを眺めてゐた巴西侯は、俄かにさつと顏の色を變へたと思ふ

と、直ぐ樣思ひ切つて荒々しく白額侯を呶鳴りつけた。

「今日はおれの誕生日だから、かうしてみんなを呼んだんぢやないか。それに平生同樣、亂暴なことを云ふなんてあんまりだ。第一、わざわざ迎へたおれのお客樣にお前なんかが無禮を働く法はない」

その一喝に驚いたためか、白額侯は鋌の手首を摑んでゐた手をすつと引つ込めたかと思ふと、部屋の中が搖れるほどに一と聲大きな聲で笑つた。

「いや、少し醉つたものですから、調子に乘つてつい冗談をしただけなんです、格別、如何かしやうと思つたわけでもないのですから、まあ、さうお怒りにならずに置いて下さい。……お客樣もそんなに驚かなくつても好いんですよ。別に何でもないんですから」

かう云つて巴西侯と鋌との顏を見較べた白額侯は、一寸きまりの惡さうな色を見せた。が、直ぐ樣それを隱すやうに、大きな盃をぐつと顏の前に傾けた。そして、わざと音をさせてぐつと一と息に酒を啜つた。

鋌は白額侯の今の一と言ですつかり不氣味になつて終つたが、主人の巴西侯がいろいろと好意を見せてくれる以上、宴の了らない裡にさうさう一人で先へ歸るわけにも行かない。彼は止むなくみんなの中に混つて、又、盃を乾し始めた。鋌があまりに脅えたのを見て少し氣の毒に思つたと見えて、老人の鈺鹿侯はわざわざ側へやつて來ていろいろともてなしたり、慰めたりした。そのおつとりとした俯目勝ちの長い顏には、如何にも人懷つこい子供のやうな樣子が見えた。

その裡に、巴西侯の機嫌も段々直つて行つたので、宴が再び盛んに催された。遂には六人の貴人まで

が、きらびやかな若い女の群に混つて踊つたり、聲を張り上げて謠つたりした。しめやかな哀調を帶びて珠をまろばすやうに流れ出る鉅鹿侯の聲が、一番深くみんなの心を動かしたらしい。

大分夜更けになつたかと思はれる頃に、先刻の使の者が靜かに闥を排して、その外から巴西侯に向つて恭しく跪座の禮を捧げた。

「唯今、洞玄先生と云ふ方がお見えになりまして、何か大變至急な御用がおありになるさうですが」

「洞玄などと云ふ名前はまだ聞いたことがないが、こんなに遲くなつてから何の用があるのだらう」

侯はかう云つて、不思議さうにみんなを見渡したが、無論、誰も知る筈がない。然し「至急な用」と云ふ言葉に動かされたと見えて、使の者にとにかくその男をこちらへ案內するやうにと云ひつけた。

間もなく洞玄先生が、這ふやうに身を屈めてのそのそと入つて來た。胴の割りに手足の短い男である。體には固い甲羅か何かをいくつも分厚く綴り合せた鎧をつけて、猪首の上に深く鼠色の皮の冑を戴いてゐる。先生はみんなの者にいちいち恭しく揖し終ると、鎧で堅めた腰を伸ばして、窮屈さうに主人を見上げた。

「初對面の癖に、こんなに遲くなつてからやつて來るなんて、一體どんな用があるのだ」

思ひ懸けない闖入者に依つて酒宴の興を妨げられた巴西侯はもう大分不機嫌になつてゐる。

「無論、今夜中に來なければ取り返しのつかない事が起るので、かうして夜更けを犯してまでも參つたのです、實は……」

と、一と言云ひかけてしばらく後を云ひ淀んだ先生は、盜むやうな瞳をちらりと鋋に投げた。眼にはた

しかに隠し切れない不安の色が見える。鋋は、又してもはつと脅かされて思はず先生の言葉に心を配つた。

「實は……今、怖しい禍が御主人のお身の上に落ち懸らうとしてゐるのです」

「何？　禍が落ちて來る？　どんな禍が」

流石に巴西侯も心を動かされたらしく、少し言葉の調子を亂してから訊いた、すると先生は、又もやぢろりと鋋の方に瞳を閃めかしたが、とうとう思ひ切つたと云ふ風に指を擧げて張鋋を差した。

「禍はあすこにゐる男です。張鋋です、あの男は今に必ずあなた方の生命をとるにきまつてゐます」

「なんだ。そんな事か。詰らない」

「いいえ。決して冗談などを申すのではございません。唯今、私の占にはつきりその事が現れたのです。今、あなた方が鋋の生命を取らなければ、今夜の裡にもあなた方が、返つて生命を取られます」

その顏色から推して、先生は餘程思ひ詰めてゐるらしい。今や鋋の生命は一つに懸つて巴西侯の返事にある。先刻よりも遙かに大きな危難が眼の前に迫つて來たのを知つた鋋は、全身に冷い汗を流しながら齒を喰ひしばつて、言葉もなく二人の顏を見較べた。手足は何時か微かに慄へてゐる。然し巴西侯はなかなか口を開かない。唯、息を殺してぢつと相手の樣子を見詰めてゐるだけである。洞玄先生は直ぐ又その後を續けた。

「もし私の言葉をお容れになればあなた方はたしかに助かることが出來ますが、もしお容れにならない時は一人殘らず殺される上に、私までが一緒に死なければならないのです」

こゝまで默つて聞いてゐた巴西侯は、堪へ切れない怒のために烈しく齒を鳴らし出したと思ふと荒々しい言葉が始めてその部厚の唇を洩れた。

「今夜のやうな樂しい晩に突然他人(ひと)の家へやつて來て、その樂しみをぶち壞したばかりでなく、その上大切なお客まで誣いて危難を加へさせやうとするのは、あんまり人を莫迦にしてゐるぢやないか。第一、こんなお客一人の力で吾々仲間の一人でも殺されて堪るものか、實際莫迦を云ふのも大抵にしろ」

から云つた巴西侯は炬のやうに眼を怒らして烈しく先生を睨みつけたが、そつと鋋を省みて氣の毒さうな樣子を見せた。然しいくら睨まれても先生は何故か少しも讓らうとしない。否、生命に懸けても鋋を殺させやうとするらしい。二人の爭は段々烈しくなり始めた。聲の調子が荒々しくなる。言葉使ひが峻しくなる。どつちの顏も何時の間にかすつかり引つ釣つたやうになつて終つて、額にはたら／＼と冷い汗さへ流れた。巴西侯は焰のやうな顏を烈しく横に振ると同時に、いきなり拳を擧げて力任せに先生の顏を撃つた。骨の碎ける音が低く響いて血が見る間にべつとりと顏を染めた。と思ふと二度程ふらふらと揺れた後で先生の體は材木を倒すやうに倒れて、顏を烈しく床にぶつけた。

それまで默つて側から眺めてゐた六人の貴人達は、先生の倒れた音が部屋の中に響くと一緒に何故かみんな手を拍つて笑ひ崩れた。唯、鋋だけは唇を動かすことさへも出來なくなつて、そのまゝそこに立ち竦んだ。然しその裡に醉ひ潰れた貴人達が一人倒れ二人倒れて、ぐう／＼鼾をかき始めたので、鋋もそれに誘ひ込まれて何時の間にかぐつすりそこへ寐込んで終つた。

それから可なりの後であつた。脊骨の兩脇が何だかぞく／＼と寒いので、鋋は思はず眼を覺した。す

ると如何したのかあたりは妙に眞暗である。まだ充分醉が醒めないので眼が霞んでゐるのかしらと思つて、彼は何度も瞼をこすつた。然し矢張り暗い。唯、何處からか微かに地面の上を響いて來る鼾らしい聲か聞える。鋌は段々薄氣味惡くなり始めた。

その裡に、眼が闇に慣れて來ると僅かづつ次第にまわりのものが見え出した。今、寐てゐるところは、どうやら思ひ切つて大きな石窟の中らしい。ぷうんと濕つた土の匂がして、時々上から雫が垂れる。そして、何處からか闇の中に薄青い光が流れてゐる。鋌は驚いて思はず知らず身を起した。すると石窟の出口と思はれる圓い洞門の向ふに、餘程遠く眞黒な山らしいものの影が見えて、その上に研ぎ澄したやうな半月が冷く懸つてゐた。光はそこから射すのである。

好く眼を落ち着けてあたりを見ると、石窟の中には何か大きな黒いものが、いくつも横になつてゐる。鼾はそれ等の一つから起るらしい。鋌が體を屈げて直ぐ横にある黒いものの一つをぢつと差し覗くと、驚くまいことかそれは人よりも遙かに大きい猿であつた。そのもう一つ向ふに長々と横になつてゐるのは額を銀のやうな白髮で埋められた虎である。その顔附や位置から云つて巨猿は昨夜の巴西侯であり。虎は確かに白額侯である。鼾をかくのは虎であつた。又、右手の方に大きな角を斜にして膝を折つて寐てゐる大鹿と、長い牙をむき出して鼻を鳴らしてゐる狼とがゐる。鉅鹿侯と滄浪君とがそれである。又、後の方に一匹の豹がねてゐる。形と位置とから推してたしかに五豹將である。そしてその側に突つ臥してゐる熊があるが、どうしても六雄將らしい。尚、もう一匹、豹よりも大きな狐がゐた。玄丘校尉である。それを見ると鋌は一瞬の間、烈しい怖のために全身の血が凍るかと思つた。

その裡に、巴西侯の華やかな饗宴に招かれた昨夜のことが段々はつきりと頭の中へ甦つて來ると、果して樂しかつた昨夜のことが夢なのか、今眼の前に見てゐるこの怖しい有樣が夢なのか、彼には一寸區別がつかなかつた。そして、どうにか出來るなら、昨夜のがほんとうで今のが夢であつて欲しいと思つた。そして何時の間にか自然と頭がぼうつとなつて行くやうなので、彼は凡ての事を確かめるためにそつと手を伸して、側に寐てゐる巨猿の腕にさわつて見た。すると松葉のやうに硬つてゐる獸の毛が、薄氣味惡く指に觸れた。彼は再び全身が硬張るほどの怖を感じた。

そこで頭の上を流れてゐる青白い光を手頼りにそつと足音を忍ばせて、注意深く獸の體をよけながらやつとの思ひで石窟の門の處まで逃れ出した。その時、硬いものが爪先に觸れたので驚いていきなり脇へ避けると、それは頭を無茶苦茶に碎かれ倒れてゐる思ひ切り巨きな鼬であつた。成程、洞玄先生である。そして、彼が乘つた馬は何時の間にかすつかり肉を食はれて、唯、骨と皮だけが門の入口に一つばい散らかつてゐた。鋌はともすれば恐怖のためによろよろ倒れさうになる體を無理に支へて、月に照らされた薄い夜霧の中を唯、無闇矢鱈に人里の方を眼差して走り出した。

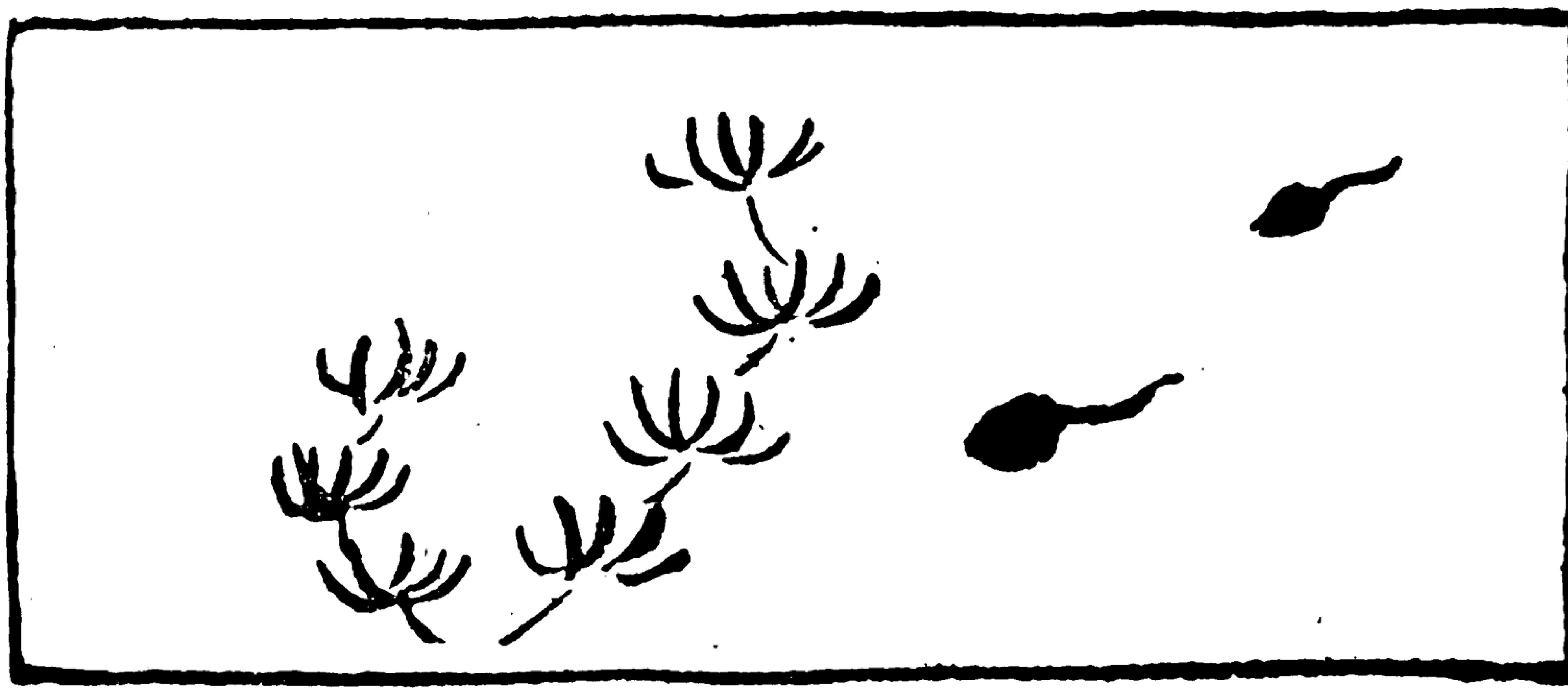
峽谷の夜が漸く明け離れやうとする頃に、鋌は何百人もの村の人達を伴れて、又、石窟の門のところへ歸つて來た。そして、弓や矢や鎗や刀を構へてすつかり用意をした後で、鼓を打つと一緒にみんな一齊に鯨波を上げた。

それまで中でぐつすり寐込んでゐた獸達は、それに驚いて跳ね起きたが、間もなくみんな殺されてしまつた。一番最後まで戰つた巴西侯の巨猿が、とうとう石窟の門の前で脇腹に深く鎗を刺された時、猿

は力の限り立ち上つて大きく兩腕を擴げたと思ふと、
「あゝ。おれは間違つてゐた。洞玄先生の言葉を容れなかつたのは、實に一生の過りだつた」
から大聲に人間の言葉で呶鳴つて、地響を起すほどに烈しくそこへ倒れて死んだ。

郷里へ歸つてから鋋がこのことを一人の村夫子に話すと。その人は暫時默つて聞いてゐたが、おしまひになつてから如何にも物の解つたやうな顔附をしながら
「はゝあ。成程。つまり洞玄先生は所謂諛難に死んだのだし、巴西侯は嬌つて諫言を容れなかつたゝめに生命を墮したと云ふわけだね、世の中にはそんなことがいくらもあるよ。お前さんも好く〳〵氣を着けないといけないぜ」
から云つてぐつと顎をしやくつて、眞黑に煤けてゐる自分の家の天井を仰いだ。そして、如何にも得意さうにその見すぼらしい山羊髯を捻つた。然し、それは要するに世の中の出來事の總てを片つ端から村夫子らしく片附けて行く、如何にも村夫子らしい解釋にすぎない。

（八・五・二二）



土藏のかげ

田山花袋

一

お春の耳には劇場の騒音がまだ微醉のやうに殘つてゐた。身は夏空の夜更の廣い田圃を見渡してゐながら、賑やかな混雜した色彩はチラチラと眼の前に搖いてゐるやうな氣がする、赤い白いまたは紫の色彩が——。と、かの女の前を同じやうに車に搖られて行つてゐるお銀の若い頃の役者狂ひなどが思ひ出されて來た。

かの女の娘盛りはそれに比べては淋しく過ぎた。女學校を出た時には月に一度位手紙の遣り取りをしなければならない友達もあつたけれどもそれも次第に疎遠になつて、今では全く一人ぼつちになつた。お春は車に搖られながら、夜露のしつとりした空氣に誘はれたやうにこんなことを思つた。平生は世間や他人に對して誇りに思つてゐる自分の家の財産などは何うにもならないやうな氣がした。

星の光の煌々と映る村の境界の川の橋を渡ると、兩側には低い農家があらはれ出して、夜目にもそれとはつきり見える白堊の土藏、栽え込みの繁み、半鐘を吊した梯子、さうしたものが段々續いて、やがて格子戸の大きな構への七八間前に來ると、前に立つたお銀は『そこで好う御座んすよ』と言つて車を停めて下りた。

やがてチャラチャラと錢の音がして「御苦勞樣、五錢つゝ增しましたよ」といふお銀の聲がしたが、そのまゝあとを振返つても見ずに、小刻な日和下駄の音を小石に立てながら大きな格子の前に行つて、

「姉さん、唯今歸りました」

かう小聲でお銀は言つた。

しかし中は眠つて了つたのか、ひつそりして、暫しはそれに答へるものもなかつた。

「姉さん、唯今」

二度、三度と段々聲が高く、お銀の焦れてゐるのがお春にもわかつた。

しかし、やがてはわかつたらしく、戸内に駒下駄を引摺る氣勢がして、大きな鍵に手がかゝつたと思ふと、ガラガラと輕くくゝり戸が明いた。裸蠟燭の光がチラチラと内から二人の立つてゐる敷石を照した。

「今お歸りかね」

かう五十近い體の丈夫さうな、しかし顏の蒼白い女が腰を延ばしながら迎へた。

あたりに滿ちてゐる酒の香りと、ぴつしやり閉め切つた家の中のいきれとが、入つて行つた女達を息

苦しく感じさせた。入口は土間で、そこには大きな酒樽が竝び、ビイル罎の一杯に置かれた棚が、奇怪な繪でもあるかのやうにチラチラと蠟燭の灯に映つて見えた。その土間は眞直に家の中を貫いて、酒樽の列んでゐる後の壁一重が勝手、右は店、それに接して主人の居間があるといふ風につくられてあつた。そしてそこに、主人の金藏と妻のお靜とが來た。

子供達――總領の俊介と弟の光二とはその奥の二間の座敷の方に來た。お春とお銀とはその次の一間へ。

お銀はお春の叔母に當つてゐた。

「芝居は何うでしたね」

お靜は片膝を立てたまゝ、太い指の若い掌に茶の分量を計つて、それを急須に入れながら、笑ひつゝ訊ねた。

「大入りでね」

かうお銀はいくらか顏を慇め加減にして、「それに、役者も餘り好くはなかつた」

「でも、狂言は好かつた」

かう傍からお春が言つた。

其處は主人の居間で、少し片寄つて小さな爐が切つてあり、その隅に、茶箪笥、佛壇、神棚、本箱、机その他澤山な帳簿が置いてあつた。電話室もあつた。

茶を飮んだり、少しばかり芝居の話の相手をしたりしてお靜はゐたが、もう遲いのと、さつきとろと

ろしたところを起されて一時目がさめたのがまた眠りを催して來たので、
「もうおやすみな。私は寐るよ、もう」
から言つて寐間の方に行つた。
あとで、お銀は戸棚をあけて、唐辛子の入つた小さな鹽煎餅を取出してそれをぼり〳〵食つた、お春はお春で、勢よく白い脛をあらはして立上つて、吊してある籠から水蜜桃を取つた。二人は暫く爐のそばで食つたり飮んだりして、役者や芝居の品評をした。

二

その居間には朝から日が射した。
小僧が力一杯にガラカラとその表の大戸を繰ると、朝日は家の内に流るゝやうにまともにさし込んで來て、いかな寐坊でも眩しくつて寐てゐることは出來ないほどであつた。いつも父親の金藏が最先に飛び起きて、ぞんざいに大急ぎに蒲團をたゝんで、それから、揚子を啣へて井戸流しに顏を洗ひに行つた。臺所は下駄穿きで何でも出來るやうにつくられてあつて、井戸は勝手の屋根の下にあつた。金藏の顏を洗ひに行く時分にはお靜は下女のお淸を相手に、いつも裾を蹇げて、效々しく働いてゐた。
「婆さん、顏の色がわりいな」
金藏は口のまはりを齒磨粉で白くしながら、丸々と肥つた體を猫背にして、眼尻に皺を寄せたあか黑い顏をお靜の方に向けた。

「何うもしませんがね」

「葡萄酒呑んでゐるかえ？」

「え」

「もうなくなつたらう、なくなつたら、電話で二三本言つてやりな」

「まだありますよ」

「困るなア。碌々飲まないんだな。他所(よそ)ぢや飲まうたつて、ロオド葡萄酒なんか飲めない家があるんだ、それなのに家なんぞは、何うか飲んで呉れッて、俺が謝るやうに、頼むやうにしてゐるんだが、それでも飲まうともしないんだからな。いけないぜ。此頃は玉子も飲まないな、黄味だけなら、一つや二つ何でもなからうがな」

『拙くつてね、玉子は――。でも、葡萄酒は飲んでゐますよ。まだ、しかしありますから。……何うもすみませんね。さうお氣を揉ませては――」

かう言つてお静はさびしく笑つた。お静は去年心臓を病んで二月ほど病院に入つてゐたのであつた。今ではもうすつかり治つたと自分では言つてゐるけれども、それでも皮膚には血の氣がなく、何をするにも呼吸がきれた。

竈の下はもう火を引いた。味噌汁の支度も出來て、下女は汁の實を切つてゐると、やがて口や咽喉をガラガラ言はせる主人の騒々しい音がかなりに長くあたりに鳴り渡つた。そしてそれがすむと、今度は拍手を打つ音が静かな朝の空氣に冴えてきこえた。座敷の方では、お春が威勢よくはたはたと拂塵(はたき)をか

けてゐる氣勢がした。

顏を洗つて了ふと、金藏はいつも酒庫の方へと見廻りに出かけた。白壁の土藏が氣持よく朝日に照されてゐるのが先づ第一にかれを愉快にした。つゞいて土藏の前に、新にする杉丸太や松材が堆高く積んであるが、それからずうと勝手の方へ大谷石で長く高塀を築いてゐる工事がかれを樂しませた。かれは昨日の工事の出來榮えなどを眺めて暫し立盡した。

やがてかれは居間の方へと引返して來た。

その時には、お春はせつせと緣側に雜巾をかけてゐたし、お銀は見事な孔雀の羽の縫ひのしてある襟などをかけて、いやに艶めかしく若返つた格好をして、襷をかけたり裾を褰げたりして、盥を中庭に持出して、逸早くも洗濯を始めてゐた。

金藏は居間に上つて、お靜の汲んで出した茶を默つて啜つて、菓子皿の羊羹を一つ摘んだが、口をもぐ〳〵させながら、机の上から大きな算盤を取上げて、節立つた指先で、敏捷にパチ〳〵と彈いて見た。朝日はそこら一面に明るく美しくかゞやいてゐる。やがて金藏は、滿足した顏色で算盤を下に置いた。

「お春！」

とかれは呼んだ。

「何アに！」聲をきいてお春が此方にやつて來た。

「酒を一本つけな」

お春は默つて引込んで行つたが、やがて底の開いたガラス罎が一本爐の傍の猫板の上に持つて來られ

た。金藏は小さな盃で、チビリチビリそれをやりながら、頻りに帳面をところどころ明けて見て、算盤を彈いて見たり何かした。何だか氣持が好さゝうだつた。そこへ、町へ自轉車ですぐ近い町へ新聞を取りに行つた光二が歸つて來た。新聞は東京のも大阪のもあつた。

朝飯は倉の若衆や小僧達がドヤドヤと竈の後の板敷に上り込んで、飯を食ふのが早いの、晩いのと大騷をして食ひ出すのが始めであつた。しかしかれ等の食事はすぐすんで了つた。かれ等は瞬間にドヤドヤと出て行つた。

家のものでは、光二がW市の商業學校に行くので、大抵一番最初に食つた。それから暫くして、長男の俊介が膳に向つた。その膳は箱膳で、茶碗や箸や、また食い殘したものなどが皆なその中にちやんと仕舞はれるやうになつたゐる。俊介は今年二十九になるが、箸を子供のやうに握つて、味噌汁などは滅多に啜つたことはなく、常に絕えず東京から海苔や、佃煮や、雀燒などを取寄せてご飯の菜にした。

「この頃は、東京の佃煮はまづくなつたな」などゝ言つて箸を置いた。

金藏は勝手で食つたり居間で食つたりした。

女達はいつもお終ひだ。

飯がすむと、金藏の姿は俊介と一緒に酒庫の入口に屆んで、酒を樽に詰かへてゐるのがよく見られた。小僧達が、背中に四つ割、六つ割の樽を背負つて、自轉車で出て行かうとすると、

「お錢を貰つて來るんだぞ。向ふのいふことばかりをきいてゐては駄目だぞ」

などゝ後から聲を懸けた。

太い井戸繩を手繰つて、大きな洗桶に一杯水を滿えて、下女が茶碗や何かを洗つてゐると、その傍にお春も來て手傳つた。其處へ水差を提げてお靜が來た。お春は言つた。

「銀ちやんは、まだ國雄のを洗つてゐるんだよ」

お靜はしかもその言ひつけ口には成るだけ取合はないやうに、

「さうかえ……　誰も子は可愛いからねえ」

『可愛けりや、出て來なければ好いんだ。子供が三人もある癖に――。今度の阿母さんにだつてわるいやね。もう自分は他人になつたんだもの」

「そんなことお言ひでないよ。聞えたら怒るよ」

かう母親がとめると、お春は倍々好い氣になつて、『構はない、怒つたつて構はない。本當だもの。また、あの國雄の餓鬼も餓鬼だ。この間なんかも、俺は大きくなれば、母(おつか)さんの世話をするとさ。始終小遣や着物なんか貰つてゐるもんだから、そんなことを言つてゐやがる」

鷄の一群が店の方から餌を啄みながらやつて來て、母子の立つてゐる足元に近寄つて、そのあたりを暫し突ついてロツ／＼言つてゐたが、やがてまた奥の方へとぞろ／＼かたまつて歩いて行つた。

三

お銀はそんな蔭口を姉や姪にきかれてゐるとは少しも知らずに、滿天星(どうだん)の木の傍に盥を据えて、中腰になつて、頻りに白いものを洗濯板に擦りつけてゐた。此方から行つた鷄の群は、お銀の後の日當の

好いところに行つてあちこちに散ばつた。

お銀はやがて洗濯物を白い腕にかけて、酒庫の傍の方へと歩いて行つた。

そこには、僅かな野菜畑と、材木の物置と、得體のわからない小さな祠とがあるばかりであつた。その畠と土藏との僅かな空地にかの女は竿を二本通して、メリヤスのシャツだの、襦袢だの、單物などをそこに干し並べた。此處は人目に遠い處であつた。

向ふの新築の石塀のあたりでは、頻りに石を斫る音がきこえ、土藏の前では、木挽が松板を挽いてゐた。

お銀の姿を見ると、

「今日は」

と丁寧に挨拶して、「結構な好い天氣で御座いますな」

「本當に好い天氣ですね」

からお銀もにこやかに挨拶して通り過ぎた。

井戸端のところにきて見ると、お靜もお春ももうそこにゐなかつた。下女のお清が、ひとり低頭いて赤い太い腕をむき出しにして、せつせと釜を洗つてゐた。

お銀は自分の家から一町と離れてゐない農家に嫁ついだのであつたが、姑が難かしいとか何とか言つて、今から八年前に、三人の子をあとに殘して出戻つて來た。すつかり、もう緣は斷れて了つて、あとにも別な後妻が入つたり何かして、その家の內情もすつかり變つて了つたけれども、それでも近くにゐるために、三人の子供達——殊に長男の國雄は、何ぞと言つては、人目をかねながら母親の許にやつて

來た。

それにしても、八年の間、お銀のゐるためにこの家庭は何んなに動搖したであらうか。お銀は姉のお靜の穩かな性質と違つて激しい氣性の持主であつた。それに神經が强かつた。今ではもう大分よくなつたけれども、以前は時計のセコンドの音にも、一疋の蚤にも安眠することの出來ないといふほどであつた。從つて家の者とは誰とも皆なよく喧嘩した。そしてそれは金藏が町へ用事を足しに出たあととか、旅に行つて留守の時とがよく起つた。勿論、穩かな姉のお靜は、何んな場合にも默つてゐた。困つた妹だとは思ひながら默つてゐた。

中でも、總領の俊介とは、一番ひどい喧嘩をした。女の癖に、後には組討をした。髮の壞れた物凄い顏でお銀が「妾はこゝで生れたんだ。手前の伯母だぞ。畜生よく毆りやがつたな」から武者振りついて行くし、俊介は俊介で「何だ、生意氣な。俺は此處の跡取りだ。貴樣のやうな餘計物は、さつさと何處へでも行きやがれ！」と言つて怒鳴つた。爲方がないので、お靜はいつもその留め役をつとめた。喧嘩のあとは、お銀は二日も三日も默つて口をきかなかつた。相手がお春だと、いつも負かされて、陰の方でシク／＼泣いてゐるのが例であつた。

お銀は濡れた手を手拭で拭いて、居間に入らうとしたが、ふと表の方をちらりと見て、急いで帳場を拔けて、格子戸の一隅の方へと行つた。そこには絣を着た十五六の少年が立つてゐた。それは國雄であつた。幸ひにも店にも往來にも人の姿は見えなかつた。お銀は帶の間から鼻紙に包んだものを渡して、あたりを見廻しながら此方に來た。

四

座敷では、一面に新聞が散されてある中に、だらしなくお春は寝そべつて、頻りに婦人畫報の寫眞を見てゐた。

其處へやつて來たお銀は、

「芝居へ行つた翌日は、何うしても疲(くた)びれるね。あ、あ」

かう溜息をついて、そこに半ば蹲踞(うづくま)るやうにしたが、二三種の新聞の中から、特に都新聞を選み出して、一面の長い續き物を讀み始めた。

暫く沈默がつゞいた。

やがてそれをも讀んで了つたらしく、

「お梅の爺は、もう來さうなもんだな、肩がたまらなく張る」

かうお銀は言つて、自分で自分の肩を二つ三つ叩いて見た。

「呼んで來て上げやうか」

かうお春が言つた。

「なアに、その中來るでせう」

「でも、待つてゐては、いつだかわからない。呼んで來やう」

「さうかえ、氣の毒だね」

「なアに――」

お春は立上つた。

しかしお春には他に目的があつたのであつた。お春は間もなく歸つて來たが、やがてそこに投り出した。竹の皮包を見ると、中から串にさした團子が出て來た。「また、お團子かえ」かう言つてお銀は笑つた。そしてすぐ一本取つて口に持つて行つた。

「よく食ふね」

「だつて、もう十時よ」

それから始つて、誰ともなく食物の話が出て來た。かれ等は何ぞと言ふと、商用で東京へ行くものに賴んでいろ〳〵旨いものやらめづらしいものやらを買つて來て貰つた。俊介は上野の廣小路の雀燒、お銀は淺草の仲見世の鹽煎餅、お春は上野停車場前の岡野の餅菓子といふ風に――。從つて戸棚には、いつも東京の甘いものが絶えないといふ形であつたが、しかも田舍のザラ〳〵する團子も食つて見て拙いといふでもなかつた。『東京の餡物は高くばかりなつて、しやうがない』などゝ二人は話した。

暫くして、店に、「今日は」といふ聲がした。

「あ、お梅の爺が來た」

かう言つてお銀は半ば起ちかけた。

『と、六十ばかりの、顋鬚の半ば白く疎らな、顏の蒼白い年寄が、縞目もわからないやうな着物で入つて來た。汗くさい匂ひが何處からともなくした。

「相變らず、いつも御馳走がありますね」

「さア、お上りよ」

「御馳走さま」

さう言つただけで、爺は手を出さなかつた。

「大變、肩が張つて、しやうがない。あとで、一本つけて上げるから、精出して揉んでお呉れな」

「へえ、へえ」

早速爺は仕事に取かゝつた。

お春は新聞を讀みつゞけてゐたが、お銀は口を開かず、母親はゐてもゐないやう、店では金藏も俊介も皆な出拂つたらしく、夏の午後はひつそりとして、唯石切る音が夢見るやうに響いて來るばかりであつた。戸外は殘暑の暑い日がヂリヂリと照つた。お春は新聞の上に突伏したまゝ、好い氣持になつて、つひウトウトした。

家の前を眞直に十二三町もゆくと町に出た。午後には町の市場に野菜物をつけて行つた百姓が、馬を店前に待たせて、「一杯コップに……」などと言つて入つて來た。何うかすると、お春は桝を取つて煮豆の殘つたのと漬物の餘りなどを小皿に載せて出して、自分は遠くその百姓から離れて店に坐つてゐたりした。餘り近しくすると、さういふ百姓達は、お春のハイカラに結つた頭や異國模樣の出た帶などをめづらしさうに眺めて、ぐづぐづと一二杯のコップ酒を前に長く話し込んだ。お春はそれを恐れた。

店頭は、夕方、混雜した。近所の百姓の上さん、泥だらけの子供などがてんでに錢を下げて、二合呉

れとか、十錢がた果れとか言つて下やつて來た。其時分は、西日が一杯に店に當るので白い日除をしてそれを遮つたが、それの外まれる頃には、倉の若衆が、逞しい體を素裸で、風呂から出て來て、敷石の上を倉敷の方へ歩いて行くいなせな姿が店賣の飲口を拈つてゐるお春の眼に映つた。夕日はあかあかと庫の向ふの竹藪を染めた。

その時分には、小僧は鷄を栂に骨折つて追ひ廻して入れやうとしてゐるし、俊介は土間や店先を掃除して、そこに心地よく打水をしてゐたりしてゐた。

時にはお春は小僧の着物を縫つたり、古い着物を解いて母親の手助けになるやうなこともしないでもなかつたけれども、しかし多くは懶惰にその日その日を送つて行つた。何も爲すこともなくて暮して行くやうなことが多かつた。その癖、座敷の長押にかゝつてゐる東照宮の遺訓を、横になりなり見覺えて、電話室へ急ぐ緣側で、「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し、急ぐべからず」などと小聲で誦しながらばたばたと歩いて行つた。

一日きこえてゐた石屋の音も既に止んで、仕事着の塵を拂つてゐるかれ等の姿が、樹と樹の間にチラチラと隱見した。やがて職人達がぞろぞろと帳場に聲をかけて歸つて行くと、親方だけ二人は、疲れたといふ風にして緣側に腰を下して休んだ。そこに、お春は酒と肴とを持つて行つて置いた。

金藏は金藏で、その頃、風呂に入つて、湯を水のやうにうめてゐた。

五

金藏には、風呂から上つての晩酌が、この世の中での一番の樂みでもあるかのやうに、暫くの間、湯上の素裸で爐の前に胡坐をかき、臂を膝の上に立て、あたりを心地よげに見廻してから、一人靜かに盃を口に當てた。と、お銀は莞爾しながら、勝手から土間の通ひの板を渡つて、「兄さん、こんなものは何う？」などと言つて、胡瓜揉の小皿を運んで來て下に置いて、序でに二三杯お酌をして行つた。來るものも來るものも皆盃をつきつけられるので、お春も、お銀も、俊介も皆なそこで醉つた。アセチリン瓦斯の灯は一間のすべてを凉しく美しく見せた。

金藏は盃を口に當てながら、心持好ささうに、若い時分のことなどを思つた。この店を養父の手から讓渡された時には、僅か百圓の金の融通にも困つたが、それから思ふと、自分はよくこれまで大きくしたものだなどと思つた。庭の一つの方の土藏だつて、店前の米藏だつて、皆な自分の代になつてから出來たものだ。養父の手から受取つた時の家だつて、位置こそ同じであるが、あとも形も殘つてゐない位にかれが修繕した。新築する以上に金をかけた。酒庫の六尺桶も、何本殖えたか知れやしない、それにかれは村長にも推された。郡會議員にもなつた。酒造組合長にも選ばれた。縣下でもかれの名を知つてゐるものは澤山にある……。これで、俺も學問さへ出來れば、人一倍すぐれた、誇るに足る人間だが、惜しいことに、それはやることは出來なかつた。仕方がないからと思つて、せめて子供達には、本でも讀ませやうと思つて、莫大の金のかゝるのには頓着せずに、「大日本地名辭書」だの、「大日本百科辭典」だのといふやうな浩澣な書籍も買へば、歷史、地理、科學の本も隨分買つた。現に、駐在所の巡査や小學校の訓導などが、圖書館か何のやうにして、調物があると、いつも來ては用を足して行く。しかし、折角、

さう揃へてやつても、子供達は碌にそれを讀まうともしない。《矢張、親に似て、學問は不得手かしれんな》盃を口に當てながらこんなことを金藏は腹の中で言つた。《これからは、子供の身だ。女は女、男は男と、それぞれきめてやらなければならない、俺だツて、來年はもう五十六だ。いつまで檜の呑口をギイギイ捻ねくりたくもない》――急に、かれは大きな聲で、

「婆さん、婆さん」

と呼んだ。

腰に手拭を挿んだお靜は、勝手から此方へとやつて來た。

「何か御用？」

「まア　好いから、少し此處にゐなよ」

「はい」

と言つてお靜は素直に其處に坐つた。

金藏はもうかなりに醉が廻つてゐた。

「あの石塀が出來ると、火事ももう怖くはなくなるな。何處も此處も新しくなる」

「あの普請はまだ餘程日がかゝるんですか」

相槌は打たずに、かう反問して來たが、別に機嫌もわるくもせずに、

「もう、たんとのことはない」

「お金ばかりかゝつてしやうがありませんね」

「まア好いさ」

其處へ、村の人が十圓紙幣を兩替して貰ひに來たので、お靜は用簞笥の方へと立つて行つた。

光二もお春も、飯がすんで、父親が元氣に話してゐる明るい居間へと集つて來た。光二は羊羹を出して、茶を濃く煎れて、何杯も何杯も呑みながら、

「父さん、今度は電氣を引くんですね。瓦斯は臭かつたり、蟲が寄つて來たりしますよ」

などと言つたりした。

金藏は赤く醉つた顏をあたりにかゞやかしながら、

「光二、お前は何になる。兄貴の支店か」

「いやな事だ。商人は眞平だ。それは旨く行けば好いけれども、懸引が難かしくつて….。それに、僅かばかりの資本ぢや、中々成功しやしない、それに、頭は無暗に下げなけりやならず、拂ひを待てと言へば、はいと言つて、いつまでも待たなければならず、弱い者よ、汝の名は商人なりと言ひたい位ですよ。僕はそれよりか銀行か役所へ出た方が好い。その方が氣樂だ」

其時、お靜は既に店に戻つてゐた。

金藏は、「そんなことを言ふが、月給取なんか慘めなもんだぞ。首になりやそれ切りだ。年中、上役の顏色ばかり見て、やれ免職になりやしないかと心配する。餘り好いもんぢやないぜ、縣廳へ行つて見ろ、役人で御座候と威張つてゐても、精々四十圓か五十圓で、その中から、やれ積立だ、同僚の見舞だ

辨當代だッて差引かれて、手に殘るのは、僅かしきやありやしない。それで、妻子を養つて行かなけりやならないんだからな。だから、彼奴等の顏色を見ろ、皆な營養不良といふ顏をしてゐる。兎に角、世の中は金がなければ駄目だ。金を儲けるのは、矢張商人だ――」かう言つて大きく笑つた。

さういふ父親の意見の立場から、商人でなければ何うしてもいけないといふところから、器量は十人並であるのに拘らず、お春の婚期は後れたのであつた。

「なァ、婆さん」と今度はお靜を顧みて、「今年の秋こそ、二人で伊勢詣りをしやうぢやないか。それまでには普譜の方もすつかり片附くし、何日でもこの身代を俊介に渡すことが出來るばかりになるし、年寄も、もうそろそろ引込む時節だ。俊介もお蔭で、五年や六年でこの家の何處にも手を入れずに住めるよ」

「本當ですね。もう引込んでも好い時分ですね。私も隨分、竈の前に踞んだから、もう好いかも知れない」

かうお靜も笑ひながら言つた。

「何でも金ね」

ふと、何を思ひついたか、傍からお春が言つた。

「さうだらう。だから、お春の亭主には、金持を見つけてやらうと思つて、父さんは心配してるんだ」

「はァ、はァ」とお春は袂を顏にあてゝ笑つた。

「俊介は何うした？　ゐないか」

「さつき、何處かへ出かけて行きました」かうお靜は言つた。

「あいつも困るんだ。餘り早く持たせすぎたもんだで女房の味もよく味へなかつたと見える。(俊介は昨年兵營から歸つて、間もなく妻を持つたが、二月と經たない中に離緣した)そいつも、何處か一人好いのをさがさなけりやならない。好いのがないかなア、何處かに——」そればかりが苦勞だといふやうに、それさへきまつて孫でも出來れば、もう俊介に家を讓りわたしても好いといふやうに、ちらつと頭を傾けて考へたが、さうした念からはすぐ離れて、またもとの機嫌好く、「光や、何にかやれよ」

光二は笑つて、

「やりますかな、何をやりませう」

「何でも好いやな」

「父樣は、呂昇の壺坂が好きだ。あれをやりませう」

かう言つて光二は起上つた。

「今夜は、大變御機嫌ですね」かうお靜は笑ひながら言ふと

「うん、今夜は少し飲みすぎた。かう吞べエになつちや、やり切れない。仕舞には、家も身代も飲み潰して了ふぜ!」

「酒はお旨くして飲むのが一番結構ですよ」お靜はかう調子を合せた。

「光や、蓄音機は少し離れて聞いた方が好い」

「私も行かう」とお春も起上つた。

お靜は子供達の飲んだ茶碗や急須を片附けながら、「また、往來に、一杯、人がたかるでせうね」

奧の座敷では、光二やお春の他に、小僧や下女達も大勢集つたらしく、やがて蓄音機の壺坂が靜かに始まり出した。

六

それから二月經つた。

ある日、外から入つて來た光二は、いきなり母親を捉えて、

「母さん、僕は赤面しちやつた――」

かう言つて呼吸をはづませた。

「何んだね？」

「お春ちやんゐるかね」

「ゐるよ、何うしたの？」

光二は母親の耳に口を寄せるやうにした。お靜の耳には、思ひもかけないことがきこえた。

「……」

思ひ廻して見るやうにして――更にまた、さう言はれて見れば、そんな印象もぼつ／＼見えないことでもなかつたことを思ひ出して、お靜はじつと一ところを見詰めるやうにした。

暫くして、

「本當だらうか？」

「うそか本當か知らないけども、僕は顔から火が出るやうな氣がした。さう言はれて見れば、僕も可怪しいと思つたことは二三度ある。用もないのに、春ちやんは、よく裏に出掛けて行くが、あれが變だ。相手は傳次ですぜ。彼奴はずるい奴だから……。今の中何うかしなけりや駄目ですぜ、母さん。本當によろしくない。相當な家庭に育つて、敎育もありながら」

「でも、ね、お春だつて、そんな馬鹿ぢやあるまいがね」

「それがいけないんですよ。母さん。わかるもんですか」

そこに、お銀が入つて來たので話は切れた。

お靜はいろ〳〵に考へた。これは金藏に話してはいけない。それよりも當人に譯を言つてきかせる方が好い。思ひ返させる方が好い。それに、まさかに、お春がそんな馬鹿ではあるまいといふ信頼もかなりにつよく胸の底にはあつた。で、母親はそれをこつそり娘に訊いて見る機會を求めたが、人出入の多い、忙しい家は、容易にさうした機會がやつて來なかつた。夜遲く、お靜は、一緒にお春を風呂に伴れて行つて入つて、漸くそこでその話を持出した。

「學校へも行つたお前だから、まさか、そんなことはないだらうと思ふけれど、村には味方もあれば敵もある。飽まで身持は潔白にしなければならない。さうしたことがなければ好い。一時いくら噂に立てられたツて、實際ないことなら、いくら難癖つけられたつて、そんなことは構はない……。しかし、もし、さうしたことを言はれる種がこれつぱかしでもあるなら、私に言つてお呉れ」

「……」

「お前一人の恥ではない、父さんの顔にも拘れば、家名にも拘はる。御先祖様に對しても――」

「そんなことはわかつてゐますよ」

母親の諄々言ふ言葉が、兎角お談義になるので、お春は後には、荒々しくかう言ひ放つて、體も碌々拭かずに、着物を支へたまゝ戸外へ出て行つた。

「あゝいふ奴だ……」

母親は自分のもので自分に自由にならない娘を歯痒さうに見送らずにはゐられなかつた。

それからはお靜は絶えず娘に注意を拂つた。よくはわからないけれども、何うもあやしい……。傳次もあやしい、しかし、これを金藏に打明けたところで爲方がない。只徒らに事を大きくするばかりである。それよりは、何うかして人に知られずに、娘に改めさせ度い。かう思ふと、お靜の苦心は並大抵のことではなかつた。庫の方へお春が出かけて行つたと言つては、後から娘の名を呼び、團子など買ひに行つて、歸りが遲いと言つては、店の前に出て、村の入口の方を眺めた。お靜はひとりで心を苦しめた。これといふのも、父親が餘り選り好みをして、此の年になるまで、嫁にやらなかつたために、かうした苦勞が湧いて來たのだなどとすら思つた。

「お前、そんなことがあるならばあるとお言ひよ」

あたりに人のゐない時に、かうお靜が訊くと、

「そんなことはありやしないよ」

かうぶつ切棒にお春は言つた。しかし、何うも、その言ひ方に、またその顔色に、面白くないところがあるのを母親はいつも見逃さなかつた。

「本當にないかえ！」

「ありやしないつて言ふのに、わからない母さんだねえ」

お春はかう言つてすぐ起つて行つて了つた。

夜も、お靜は注意してお銀と二人の寐る一間にこつそり來て見たりした。お銀に話して、その監督をお賴めば、一人で見張つてゐるよりも一層好いのはわかり切つてゐるけれども、しかしさうしたことをお銀に打明ける氣には何うしてもなれなかつた。

ところが、ある朝、いつものやうに、W市で發刊する新聞をひろげてゐた父親は、ふと思ひもかけないある二三行の記事を發見して、ひたりとそこに眼が留つた。長い間、かれはそこから眼を離さなかつた。何故と言ふに、そこに、その葉書欄に、木村の酒屋の娘は土藏の中で、白痴小僧と乳繰り合つてゐるそいふことが書いてあつたからであつた。

『小僧と言へば誰れだ？　傳次より他にない』から考へて、「まさか、お春が？」から口へ出して笑つて見たが、いろいろなシインを思ひ出して見ると、急に笑へなくなつて來るのを感じた。『馬鹿にしてやがる。早速新聞社に正誤を出してやらう』それを見た刹那にかう思つた小さな怒りも、滅多なことは出來ないやうな氣もして來た。金殿には、お春の様子が何だか急に目につき出して來た。

かれはその。一日、妻にすらその話をする氣になれずに懊惱したが、夕方になつて、ちよつとお靜が

かれの居間に入つて來たのを呼留めて、小聲で、
「家のお春のことが、新聞に出てるが、本當かな」
新聞といふ二字に、はつとお靜は驚いたやうにして、
「え？　新聞に？」
「何アに、小さく葉書だよりにちよつと書いてあるだけだけども、本當かえ？」
「何んて書いてあるんですか」
「雇人と關係してゐるつて書いてあるんだが――」
さう聞いても別に驚いたやうな風もないお靜の態度も金藏には意外に感じられた。お靜は言つた。
「この間、光二もそんなことを言つてゐましたがね……」
「おや、知つてゐるんだな、お前は？」
「いゝえ、知つてゐるつていふわけでもないんですけども、此間も、その事はよくお春に言つて聞きました。」
「事實かえ？」
「そんなことはないつて、いくらきいてもあれは言ふんですけども……」
「本當らしいところもあるのか」
「まだ、私にもよくわかりませんけども……。さういふことがあつちや大變ですから、それで、私も此間から心配して、貴方にも話さうか、話すまいかと思つてゐたんですが……。かういふことは、荒立て

では損ですから、もしも、さういふ間違があつたらあつたで、ぢつとしなければなりませんからね……」

「……」

金藏は默つてゐた。

暫くして、「俊介はゐるか？」

「もう、少しさつき出て行きました」

「何處に行つたんだ……。この頃は、毎日、夕方になると出かけて行くぢやないか」

「耳の療治に行くんです」からお靜は靜かに言つた。

「耳の療治？何處かわるいのか？」

「何んだか、耳が空鳴りがして、痛くつてしやうがないッて言つてゐました」

「病院か？」

「さうでせう、乾度」

金藏は不愉快さうな顏をして、風呂場の方へ行つた。

七

それから二三日經つたある日の午後、俊介は座敷の自分の机の前に坐つて、何か頻りに計算をしてゐた。算盤を彈いて見ては考へ、考へてはまた彈いて見、更にまたそれを鉛筆で小さな手帳のやうなものに細かく書き附けた。

誰にもわからなかつたことが、父母にも、親類にも、同胞にも、或は世間の人達にも、誰にもわからずに、旨くしてやつたといふことが、尠なからずかれを滿足させた。これで女は何うにでもなる筈である。あの可愛い離れられない女を人知れず身受けして、町に圍つて置くことが出來るのである。それは、いつかはわかるに相違ない。いくらのんきな親父でも、その大穴に最後まで氣がつかずにゐることは望まれない。しかし、兎に角半年や一年はわからずに町に圍つて置くことが出來る。その後になつてわかつたところで、それはまたその時で、臨機應變な所置をすることが出來る。かう思ふと、かねてこつそり計畫してゐた爲事が一段落ついたやうな氣がして、ほつと呼吸がつかれた。今時分は、女は廓を出たに違ひない。そしてあの世話好な女の伯母やが、昨日約束して來た家に、女をつれて移つたに相違ない。かう思ふと、一刻もかうしては居られずに、今からでも飛び出して出かけて行きたいやうな氣がした。しかし、折角これまでにしたのだ。今になつて知れて、親父に茶々を入れられてはそれこそ大變だ……。かう思つて、俊介は矢張いつもの耳の療治に行く時間の來るのを待つことにした。

それに、何うしてだか、何か譯があるのか、この二三日、いやに、親父も家にばかり引籠つてゐて、出なければならない筈のところにも出て行かず、不愉快さうに、沈欝な顔色をして、まごまごすれば、すぐ怒鳴られさうに見えるのも無氣味だつた。もしや自分のあの大穴が知れかゝつてゐるのではないかと思ふと、びくびくするといふほどではなくとも、少くとも氣懸りで爲方がなかつた。俊介は親父や同胞や世間があるために、思ふまゝに女と樂しむことの出來ないのを情けないやうに思つた。何うした連想か、田舍の農家から來て二三月ほど一緒にゐた色の白い離縁した妻のことなどが胸に浮んで來た。

其處に、金藏は入つて來た。

「耳がわりいつてな‥‥？」

「え」

「何處だ？　耳は？」

「表は何でもないんですけど、中が何うかしてゐるんですッて‥‥。このまゝ投つて置くと、聾になるさうです。」

「何時から、そんなになつたんだ？」

「つい、先月の末あたりからです。何うも變な、變だと思つてゐたんです。いやに、ガァンとしたり、少し痛かつたりしたんです」

「‥‥‥」何か猶詳しく訊くかと思つたら、きゝもせずに、そのまゝ金藏は店の方へ行つた。

しかし、暫らく經つた後には、金藏はしなければならない用事をふと思ひ出したといふやうにして、急いで、中庭を通つて、酒庫に行つて、九升樽に頻りに酒を詰めはじめた。

ふと氣が附くと、さつきそこにゐた傳次の姿が急に見えなくなつた。

「傳次！」

かうかれは呼んで見た。

矢張返事がなかつた。何うしやがつたらうと思ひながら、庭から勝手へ來て、店を見廻しても、其處にも矢張その姿は見えなかつた。

丁度午後三時すぎで、お銀は座敷の北方の間で仕事、お靜は體が少しわるいと言つて居間で枕をして横になつてゐた。あたりはしんとして、鷄がコッ〳〵言つて地を啄いてゐる音がそれと際立つてきこえるばかりであつた。お春の姿は何處にも見えなかつた。

金藏はふとあることに氣が附いたといふやうにして、庭から、樹と樹の間を小さな祠の方へ拔けて、庫の横手の方へと歩いて行つた。果して、此處に、午後の日の斜めにさしわたした土藏のかげの五坪ばかりの狹いところに、傳次とお春とが立ちながら何か話して笑つてゐるのがかれの眼に入つた。

「傳次！　何をしてゐる？　傳馬があるぞ」

から金藏は怒鳴つた。

「へえ」

傳次はわざと何氣ない風を裝ふて、づうづうしく此方へと歩いて來た。

しかしお春はギヨッとした。その顏は初めは赤く、やがては蒼青に變つて、何うして好いかわからないやうに體がぶる〳〵震へた。金藏は何も言はずに、默つて、鋭い怒りの一瞥をお春の上に投げて踵をめぐらした。お春は暫しの間は地に根が生えでもしたかのやうに立竦んで了つたが、やがて思返して母屋の方へと行つた。

お春は恐れ慄いた。美しく樂しかつた歡樂は足下から崩れて、今は眞逆さまに奈落の底にでも落ちて行くやうな氣がした。恐ろしい父親の顏―それを打消すやうにして、男と樂んだ其折々のシインがきれぎれに頭を掠めて通つて行くけれども、また何うなるものかといふ氣になつて、頰を赤くし、眼を異樣に

かとやかしては見るけれども。しかし父親のその恐ろしい一瞥は拂ひ去り難く強くお春の身を壓した。

お春は緣の柱に凭れて、庭の一方を凝視した。

しかし何うすることも出來なかつた。時が經つて胸の鼓動は靜まつたが、不安と恐怖の念は少しもその量を減じなかつた、爲方なしに、お春は座敷の次の一間の隅のところに小さくなつて、戸棚をあけて、縫ひかけたメリンスの前掛を出して、紐をつけ始めた。と、父親の怒る聲が居間の方できこえて、次第に、それが近くなつて來たと思ふと、荒々しい足音がして、振返らうとした途端に、その横顏をお春はしたゝかに打たれた。

お春はあつと言つて突伏した。

怒つた父親の拳は、霰のやうに、背や頭や肩に落ちた。束髮の櫛も折れた。父親はこれをするにも何一言も言はなかつたが、唯ならぬ物音に驚いてお銀も、お靜も、俊介も皆なその周圍に飛んで來てそして父親の手を遮つた。

「馬鹿、馬鹿、俺の娘だ、殺したつて構はない……」

から金藏は怒鳴つて、また烈しく亂打した。俊介はそれはお春でなくつて自分のやうな氣がした。